**母音イとウの相関について考える**

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　2020.1.15

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　ichhan

**目次**

1. はじめに　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　 p2
2. インキとインク　　　　　　　　　　　　　　　　　 p2
3. の表記を考える　　　　　　　　　　　 p4
4. 中古舌内入声はどのように借音されたのか　　　　　 p7
5. 中古入声韻尾の変化を考える　　　　　　　　　　　 p10
6. 「松浦」はなぜ「末盧」と音訳されたのか　　　　　 p11
7. 呉音シチと漢音シツの関係を考える　　　　　　　　 p13
8. 「質」の呉音と漢音の変化を考える　　　　　　　　 p15
9. 江戸初期の舌内入声はどんな音だったのか　　　　　 p17
10. 捷解新語のツの表記を考える　　　　　　　　　　　 p18
11. 中古舌内入声はtではない　　　　　　　　　　　　 p21
12. 母音の無声化はいつまで遡れるのか　　　　　　　 p23
13. 「御座る」のルは無声化していたのか　　　　　　 p27
14. 鹿児島県薩隅方言の無声化を考える　　　　　　　 p29
15. チ・ツはtʃi/tsになぜ変化したのか　　　　 p33
16. 舌尖母音ɿとは　　　　　　　　　　　　　　　　　　　 p36
17. 母音の無声化とみられたものは何か　　　　　　　 p40
18. キリシタン時代の舌内入声はtɿだった？　　　　　 p42
19. 重刊改修捷解新語の「せつつ」の表記を考える　　　　　　 p44
20. 『狂言記』」の「まつする」の表記を考える　　　　 p45
21. 世阿弥の小書きの「ッ」について考える　　　　　　 p49
22. ツの破擦音化はいつ起きたのか　　　　　　　　　　 p52
23. 雀の鳴き声から国号「清」の読みを考える　　　　　 p54
24. 雀はtsiutsiuと鳴いたのか　　　　　　　　　　　 p58
25. チ・スの変化を考える　　　　　　　　　　　　　　 p61
26. ツの変化を考えなおす　　　　　　　　　　　　　　 p66
27. 母音イとウの相関を再び考える　　　　　　　　　 p71
28. 正歯音3等について考える p73
29. あとふみ　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　 p80
30. おわりに　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　 p81

【注】　　　　　　　　　　　　 　　　　　　　　　　　　　 p82

【以前の考察】 　 p102

【引用書など】　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　 p104

【中国語資料解説】　　　　　　　　　　　　　　　　　　　 p110

【韓国語・朝鮮語資料解説】　　　　　　　　　　　　　　　 p112

1. はじめに

前回の更新では「古代朝鮮語の母音調和を考えなおす」（<http://ichhan.sakura.ne.jp/korean/korean4hp.docx>：以下、～[ne.jp/](http://ichhan.sakura.ne.jp/)までは省略します）のテーマで書きました。そこで今回の更新はその続きとして、『訓民正音（諺解本）』に「君군＋ㄷ＋字ᄍᆞᆼ」（姜　1993：152）のようにㄴと同じ調音位置にある「語間字（사잇 소리）」（金　2003：165）のㄷが挿入される理由について書くつもりでした。しかし、それにはまだ準備すべきことが多くあります。そこで以前の更新「中古中国語の舌内入声を考える」（korean/korean3hp.docx）のなかで、「中古舌内入声韻尾はtではない」というアイディアをだしておいたので、今回はその続きを書くことにしました。

ところでキリシタン時代の「質」の舌内入声韻尾tが現在ツとなっているのは日本語の特質である開音節化のために呉音では母音イが、漢音ではウが添加されて呉音シチと漢音シツとなっていると説明されています。しかしそうであれば呉音と漢音の添加母音イ・ウの違いはどのように説明すればよいのでしょうか。これは日本語の開音節化のために母音が添加されると説明するだけでは解決するものではなく、それ以上の説明が必要となるでしょう。

そこで今回は「母音イとウの相関」という観点から呉音シチ、漢音シツの違いが何に由来するのかを考えていこうと思います。そしてその考察からこの添加母音の違いは中国語舌内入声韻尾の変化と深くつながっていることをみていきたいと思います。その後、以前の更新では考察が中途になってしまった、撥音と促音の関係を考えていきたいと思います。

2019.2.1

ichhan

1. インキとインク

古代から日本語は母音終わりの開音節であったとみられています1。そこでイとウの相関を考えるために外来語インクについて考えることにします。

筆者の子供時代のインキは現在インクになっているのですが、この変化は次の記述でよくわかります（日本大辞典刊行会編　昭和48（第2巻）：451,454）。

1.「インキ⇒インク」

2.「インク〘名〙（英ink）（略）＊一握の砂〈石川啄木〉我を愛する歌「新しきインキのにほひ栓（せん）抜けば餓ゑたる腹に沁むが悲しも」（略）＊休憩時間〈井伏鱒二〉「机の上に角帽を置き、その上にノートやインクを載せて」（略）」

＊「一握の砂」は1910年刊。

＊筆者が小学生の頃、ノートは雑記帳といっていました。

このようにインキは古く、インクは新しい言葉で、「言葉はかわる」ということが実感されます。しかしこのインキとインクの言葉の違いは単に古い、新しいといった違いだけではありません。筆者にとってインキは「舶来のかをりを漂はしめる」（亀井　昭和59：129）、朝刊の新聞から匂い立つ香りであり、それにたいしてインクは町の活版印刷屋の職人さんの汚れた指についた、においといえる違いでした。

ところでここ100年近くの間に英語inkの音が変わったわけでもなく、日本人の耳に生理学的な変化が起きたこともないのに、どうしてインキはインクにかわったのでしょうか。韓国語でも外来語のink（[iŋk]）は日本語と同じように、語末のkに母音[ɯ]を添加して、「잉크」（羅聖淑　2008：249）のように発音するようです。そしてこの크（翻字khɨ）の母音はあいまいな母音ウ（ᅳ：非円唇のɯ）で、はっきりした母音ウ（ㅜ：円唇のu）ではありません。そこで韓国語でも原音の語末kにɯを添加することで、inkのkの音質（聞こえ）をできるかぎり忠実に表わそうとしていると考えることができるでしょう。また古代日本語に目をむけると、中国語「菊」（屋韻kɪuk）2はその入声韻尾kに母音ウが添加されて、呉音・漢音ともにキクとなっています。そこでインキやインクに母音イやウが添加されて開音節化されるのは古くは漢語、現在は英語など外来語の語末子音の聞こえをできるだけ忠実に表わそうとしたためとみることができるでしょう。しかしここ100年ほどのあいだにinkの原音や日本人の耳に変化があったわけでもないので、借入当時のインキと現在のインクの聞こえは同じだったとみることができるでしょう。そこで明治期のインキのキをキ1として、そのインキ1は現在のインクと同音（聞こえが同じ）であったと考えてみます。そして明治初期のキ1が現在のキに変わったために、inkの聞こえにより近いのは現在のインキではなく、現在のインクであると考えることができるでしょう。

この考えは次のように表わせます。

|  |  |
| --- | --- |
|  | 借入時　　現在 |
| キ | キ1------→キ |
| ク | ク |
|  | kの聞こえ |

このように明治初期のキ1は現在のクと同音であったと考えると、インキ1からインクへ表記がかわったことをうまく説明できるでしょう。しかしそう考えると、inkの聞こえが同じであったのに、つまりインキ1とインクが同音であったのに、イとウの添加母音に違いが生じたのはなぜかという疑問がでてくるでしょう。

次節ではこの疑問を解くヒントを神名のの表記から考えることにします。

1. の表記を考える

インキからインクへの表記と同じような変化は「紫陽花」の言葉にも、次のようにみられます（日本大辞典刊行会編　昭和47（第1巻）：272/上代語辞典編修委員会編　1967：28）。

1．「あずさい　あづさゐ【紫陽花】〖名〗「あじさい（紫陽花）」に同じ。＊二十巻本和名抄-二〇「紫陽花　白氏文集律詩云紫陽花　和名安豆佐為」（略）」

2．「あぢさゐ[紫陽花]（名）あじさい（略）「の八重さく如く・・・」（万四四四八）（略）」

＊『和名類聚抄』（源順撰934年頃成。巻20草木部)。

＊「ほかに「味狭藍」とも書かれている。（なお新撰字鏡にはいまだ「安地佐井」とみえる。）」（亀井　昭和61：268）。

また万葉集2495番の「養子眉隠隠在妹見依鴨」（筆者補：「のははが　のごもり　こもれるを　みむよしもも」）の「足常」は「たれしも「足常」のかたちを「タラチネ」にあてたものと、ひとえにそう解しきたったはずである。」3（亀井　昭和61：269）との考えにも母音イとウの相関をみることができるでしょう。そして「」4の「竹馬」について、「このはこれをチクバとよむべく、それがツクバ（菟玖波）をかすったもの（略）」（亀井　昭和61：269）とみる考えにも、母音イとウの相関をみることができるでしょう。

さらに八十巻華厳経音義私記に表装具のひとつである「軸」の音注5にたいして、亀井氏は次のように考えられました（亀井　昭和59：128）。

「軸轄　上文地奇也　轄音割　訓可利毛

これは、字に対して、「ヂキ（地奇）」なる訓を施したものとみられる。ただし、この字は、屋韻の字であって、後世のかなづけを以て推せば、万葉がなのばあひにも、おそらくは「地」とか「地」などと施訓せらるべき筈のものである。（略）」

＊「菊・竹・軸」はすべて屋韻「ɪuk」（藤堂・小林　昭和46：26）。「久」（有韻）：「kɪəu」（同書：98）。「句」（遇韻）：「kɪu」（同書：48）。

この「地」（定母至韻dii）の音にたいして、亀井氏は次のように考えられました（亀井　昭和59：131）。

「上代日本語のヂは、（略）（筆者補：硬い子音）[d]みづからが、口蓋化をきらふかぎり、当然、これと結びつくものとしては、中舌の[ï]の方が自然である。（改行）もし、「ヂ」が、さういふ性質のものであったとすれば、これに対する清音の「チ」も[t]と中舌母音[ï]との結合したものであったであらう。」

ところで上にみてきた母音イとウの相関は古代の神名「アジスキタカヒコネノカミ」の表記にもみられます。

亀井氏によればこの神名の表記には、次のようなものがあります（亀井　昭和59：132-3）。

「味耜高彦根神」（日本紀の本文・一書）

＊「自注に「味耜此云婀膩須岐」とある。」（亀井　昭和59：132）。

「阿旎素企多伽避顧禰」（日本紀の一書、歌謡）

＊「流布本に、ににつくるのは、あやまりである。（略）アジスキのキは、明かに甲類のキである。「スキ（耜）」のキが甲類に属すべきことは、古事記雄略の条にのせるところの、「金岡」なる地名の起源を説明する歌謡にも、あきらかな旁証がある。」（亀井　昭和59：132）。

「阿遅高日子根神」（古事記、訓釈仮名）

「阿遅志高日子根神/阿治志高日子根神」6（古事記地の文、音釈仮名）

「阿治志多伽比古泥能迦微」（古事記歌謡）

上の神名にあらわれる「貴」（キ乙：未韻去声kïuəi）字は推古遺文での常用字です。そして奈良時代になると、やはり常用字であった「貴」と同韻異声調の「帰」（微韻平声kïuəi）とともに、記紀以下、万葉集などには使用されなくなっていきます。

そこで亀井氏は「阿遅志貴～」の「志」字について、次のように考えられました7（亀井　昭和59：136）。

「推古遺文では、記紀万葉の側においてもっぱら用ゐられてゐる第八転三等の字は用ゐられず、第四転三等の字は、別の音に宛てられる。これらの事実は、「アヂシキ（志貴）」の字面が、その基くところ、古きにあることを窺はしめるものである。」

＊第8転3等の字：「其」（之韻平声ɪei）や「志」（志韻去声ɪei）。第4転3等の字：「奇」（支韻平声ɪe）。

そして亀井氏は「阿遅志貴～」の「志」から「阿遅素企～」の「素」への表記の変化について、「しからば、シ→スといふ変化が起りうるについて、特に何か上代の日本語の音韻体系の構造にその原因を求められないであろうか。」（亀井　昭和59：137）と疑問をだされました。古代には「月」（ツキ乙）と「月夜」（ツクヨ）、あるいは「神」（カミ乙）と「神風」（カムカゼ）といった乙類イとウの母音交替8がみられます。そこで「甲乙二類の混同の一歩手前の時期における乙類の「イ」は、単純な中舌母音[ï]ではなかったらうか。」9（亀井　昭和59：138）との考えから、「く」の名詞「」（キは甲類）はsuku＋i→sukui→sukï（スキ乙）→suki（スキ甲）のように変化したと考えることができるでしょう。また先に亀井氏が「地」をdïと考えられたように、「志」10の母音を中舌母音ïとみれば、「阿遅志貴～」の「志」と「阿遅素企～」の「素」にたいして、乙類イとウの母音交替を考えることができるでしょう。しかしこのように考えても、中古音の「」と「」の違い（tʃɪeiとso）は大きく、「志」から「素」への変化は難しいとみられそうです11。

しかし「志」と「素」が同音と考えられそうな面白い話を、次に紹介します（橋本萬太郎　1981：212）。

「あるとき、わたくしは、このくにの知人のお宅で、そのいえの子供たち――兄と弟――が、ラジオの時報の音――ふつうに「カチ、カチ、ボーン、ボーン」となるような音――を、その兄のほうは

　「テッキ、テッキ、ルーン、ルーン」

といっているのだと言いはり、弟のほうは、いや、いや、それは、

　「チッタ、チッタ、ゴーン、ゴーン」

と鳴っているのだ、と主張して、口喧嘩をしているのに、居合わせたことがある。（略）。」

そして橋本氏はこのエピソードとともに、「ふたりは、非常に似た方言をはなすばかりでなく、問題の音を、同じ時刻に、同じソース（ラジオ）から聞いていて、この始末である。（略）」（橋本萬太郎　1981：213）と述べられています。このように擬態語や擬声語を表わす社会的に決まった表記を持ち合わせていない子供たちにとって、ラジオの時報の音12を表わすことは容易ではないでしょう。

ところで味耜高彦根神は古代人にとっても、実在の神というよりは伝承のなかに存在した神だったのではないでしょうか。そこで幼い兄弟がラジオの時報音をまったく違って聞いたように、古代人もその神名を伝承のまにまにまったく違って聞いたと考えてみます。そう考えると旧時代（奈良時代以前）の古代人がその神名を「阿遅志貴～」と聞き、新時代の奈良人が「阿旎素企～」と聞いたと考えることも一概に否定することはできないでしょう。そこで「味耜高彦根神」は「阿遅志貴～」「阿旎素企～」と表記は違っていても、その神名の音は同じであったと考えてみます。前節で、英語のink（[iŋk]）のkを借入当時は聞こえの近いキ1で、現在はクで表記していると考えました。そこで旧時代の「阿遅志貴～」の「志」の聞えをシ1、また新時代（奈良時代）の「阿旎素企～」の「素」の聞えをスと考えてみます。つまり、より古い時代のシ1とスが同音（聞こえが同じ）であり、古事記以後、旧時代のシ1が現在のシに変化したために、「志」から「素」へと表記が変わったとみるのです。

前節で借入時のインキ1と現在のインクの聞こえを同じとみたように、この考えは次のように表わすことができるでしょう。

|  |  |
| --- | --- |
|  | 聞こえが同じ　　　現在 |
| 「阿遅志貴～」のシ | シ1（志）-------→シ |
| 「阿旎素企～」のス | ス（素） |

しかし「阿旎素企～」と「阿遅志貴～」の「「ス・キ（甲）」と「シ・キ（乙）」では、いはゆるで説かうにも、ひらきがありすぎる。」（亀井　昭和59：134）とみられるので、「阿遅志貴～」のシ1と「阿旎素企～」のスが同じであったとは考えにくいと思われます。そこでやはり「志」と「素」は同音ではなく、「志」が「素」に変わったために、神名の表記が「阿遅志貴～」から「阿旎素企～」へ変わったとみるほうがよいでしょう。

上のような母音イとウの相関は舌内入声の「質」の呉音シチと漢音シツのあいだにもみられます。そこで次節では中国語の入声の変化について考えることにします。

1. 中古舌内入声はどのように借音されたのか

現代中国語各方言の入声韻尾（-p/-t/-k）をみてみると、次のようになっています(詹　昭和58:54)。

|  |  |  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- | --- | --- |
|  | | | 鴿（-p） | 脱（-t） | 各（-k） |
| 北方方言区 | 華北方言 | 北京 | kɤ | t‘uo | kɤ |
| 西北方言 | 太原 | kəʔ/kaʔ | t‘uəʔ/t‘uaʔ | kəʔ/kaʔ |
| 西南方言 | 成都 | ko | t‘o | ko |
| 江淮方言 | 揚州 | kəʔ | t‘oʔ | kɑʔ |
| 呉方言区 | | 蘇州 | kɤʔ | t‘ɤʔ | koʔ |
| 粤方言区 | | 広州 | kap | t‘уt | kok |
| 閩方言区 | 閩東方言 | 福州 | kaʔ | t‘uaʔ | kauʔ |
| 閩南方言 | 潮州 | kap | t‘uk | kak |

＊（　）内は中古入声韻尾。声調符号は略。

＊「北方方言は，その言語特色によっておよそ四つの下位方言区に分けることができる。」(詹　昭和58:120)。

＊「…（筆者補：太原方言）のみならず、官話の中でさへも、南京官話は入聲の韻尾にやはり聲門閉鎖音を持つてゐる。これらの状態から考へて見ると、同じ系統に屬する北京官話の如きも、古くはやはり入聲韻尾には聲門閉鎖音を持つてゐたものであり、それが後世消失した結果今の形になつたものである、と考へる方が一層穏かなやうである。」（有坂　昭和32：602）。

＊閩東方言福州話の閉鎖音韻尾については注13。

ところで舌内入声の質韻は上古から中古へ、次のように変化したとみられています（藤堂　昭和42：86-87,87-88）。

「Ⅷ　微部・隊術部・文部

　　　　入類ət　　　　　　　　　　　例字

〈等〉　〈上古〉　〈中古の韻母〉　　〈等〉　 〈上古〉　 〈中古の韻母〉

3 4　　ɪět------→ɪět　 質　　　　　3　　 乙　·ïět----→·ïět（質）

3 4　　ɪuět-----→ɪuět　質合　　　　3　　 率　sïuět---→ṣïuět（質合）

Ⅸ　脂部・至質部・真部

　　　　入類 et　　　　　　　　　　　例字

〈等〉　〈上古〉　〈中古の韻母〉　　〈等〉　〈上古〉　 〈中古の韻母〉

3 4　　ɪet-------→ɪět　質　　　　　4　　 吉　kiet---→kiět　（質）

　　　　　　　　　　　　　　　　　 3 4　 室　thiet--→ʃɪět　（質） 」

＊「質」：3等ɪět、「堲」：4等 iět。

＊「（17）質部　開三（吉・室）　先秦―南北朝ḭet 隋唐ḭt」（王　1985:512）。＊ḭはiの下部に͡（半丸括弧）を付けた記号の代用。

このように質韻の入声韻尾は上古から中古まで変わらずtで、そのtは南方方言の粤方言広州話などに保存されているとみられています。

ここで上古・中古の入声韻尾tが中期朝鮮語にどのように借入されたのかを次にみてみます。

A;漢陽大學校附設國學研究院　1974：12,23,20,11,21,21,11,9,11,21,9,7,15。

B;小倉　昭和16.12：60,67/小倉　昭和16.8：66,77,57,59,83,66/小倉　昭和16.12：72,59。

|  |  |  |  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- |
| A：『雞林類事』（宋の孫穆著1103-4両年間） | | | | B：『朝鮮館訳語』（15世紀初葉） | | |
| k（喉内） | 蚤曰批勒  （pyəruk） | 射曰活索  （hwar so-矢射る） | 尺曰作（cah） | k |  | ***白錢　迫引*** |
| ***皮曰渇翅*** | ***皮　憂尺***〈ka-čok〉 |
| t（舌内） | ***傘曰聚笠*** | 笠曰葢音渇（kat） | 猪曰突（toth） | t | 田　把〈pat〉 | 陽　別 〈piɔt〉 |
|  | 火曰孛（pɨr） | 馬曰末（mʌr） | r | 月　得二〈tɐr〉 | 星　別二〈piɔr〉 |
|  | 梳曰苾音必（pis） | 花曰骨（koc） | s | 花　果思〈koč,kos〉 | 城　雜思〈čas〉 |
| p（唇内） | 七曰一急（nirkup）/口曰邑（ip） | | | p | ***七　你谷***〈nir-kup〉 | **口　以**〈ip〉 |

＊Aの語例と（　）内の翻字は李基文　1975：108。Bの〈　〉内の翻字は小倉氏の上書より。ゴシック太字斜体の語は筆者補。

＊「矢射る」（李基文　1975：108）。「傘曰聚笠」「白錢　迫引」については注14。

＊喉内入声韻尾はk（「蚤曰批勒」）→h（「尺曰作」）のように変化したとみられます。

また「質」の入声韻尾は周辺の各言語では次のようになっています。

|  |  |  |  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- |
| A | B | C | D | E | F | |
| 中国語  「質」 | チベット 漢字音 | 朝鮮漢字音 | | ベトナム 漢字音 | 日本  漢字音 | |
| 『訓民正音』 | 『東国正韻』 |
| 中古音  -t | 8世紀前半 | 1446年頒布 | 1448年刊 | -t | 呉音 | シチ |
| -（d）/-r | -r | -rʔ（ㅭ） | 漢音 | シツ |

＊A：「質・實」：質韻3等（ɪět）。「七」：質韻4等（iět）。

＊B：『天地八陽神呪經』の「七」は「tshir/tshịr」。「實」は「shir/shịr」15（高田　昭和63：380,380）。

＊C：「終声字はㄱㆁㄷㄴㅂㅁㅅㄹ（筆者注：k,ŋ,t,n,p,m,s,r）の八字母で十分に事足りる。」（趙義成訳注　2010:81）。

＊D：「質　·지ᇙ」（建國大學校出版部発行　1973：169）。東国正韻の序に「質・勿のような入声の韻は影母（ㆆ）をもって来母（ㄹ）を補う（略）」16（趙義成訳注　2010:182）とあります。

＊E：『越南字典』（1931年ハノイ）：「cht　質」（三根谷　1993：476）。

＊F：「呉音　「質」シチ」/「漢音　「質」シツ」（藤堂　1980:171,171）。

1. 中古入声韻尾の変化を考える

前節では中国語入声韻尾が周辺言語でどのように借入されたのかをみました。そこで今度はその本家である、中国語の入声の変化を次にみてみることにします。

周徳清（1324年成）の「《『中原音韻』》17の表す中世の華北・華中の共通語を，〈古官話〉（Old Mandarin）と称し，それは今日の官話方言の祖型にあたるものといわれて」（藤堂　1980：77）います。その古官話の後裔に、「 4）閉鎖音韻尾を保存せず，調類のひとつとしての入声をも保存していないもの。たとえば北京の「入派三声」など原注〔6〕」(詹　昭和58:53）があります。

その北京官話「百」の変化を有坂氏は次のように考えられました18（有坂　昭和32：605)。

「「百」は中原音韻ではpaiʔの形であった。つまり、まづ中心母音とkとの間のglideが發展してi音となり、然る後にkがʔに變じ、その後つひに消失し去つたのである。」（有坂　昭和32：605)。

　＊簡略に示せば、pʌk→paik→paiʔ→pai。ʔ：声門閉鎖音（/ʔ/）。

そこで藤堂氏は北方方言の入声の変化を次のように考えられました19（藤堂　1980：115）。

「（2） 入声韻尾が弱まり,ある方言では声門閉鎖音となり,また他の方言では-ゼロ,-w,-jの三者に変化する。」

　＊南方方言の入声については注20。

そしてこの入声韻尾の消失にたいして次のような考えがあると、橋本氏はいわれています（橋本萬太郎　1981：327）。

「CVp＞CV（改行）CVt＞CV（方言によってはCVi）（改行）CVc＞CVi（改行）CVk＞CVu（改行）のように「変化」し、（略）この「変化」を説明するために、唐末から、音節末の閉鎖音が「弱まった」として、たとえば、  
CVp＞CVp＞CV

のように、このpをちいさく書いて、その消失の中間段階をしめしたり、

CVp┓  
CVt┻━CVt━┓  
CVk ＞ CVk━┻CVʔ＞CV

のような、併合のあとをたどって、その「説明」にしようとしている。（以下、略）」

＊筆者注： ʔ：声門閉鎖音（/ʔ/）。原著の } 記号は┓と┻で代用。

しかし橋本氏は上のような説明に対して、次のような異議をだされています（橋本萬太郎　1981：328）。

「その言語（筆者注：北方夷族の手に落ちた万里の長城よりも北方の中国語）では、-pと-tの併合とか、-ʔへの統一というような段階をへずに、＊CVp＞CV,＊CVt＞CV,＊CVc＞CVi, ＊CVk＞CVuのような、直接的な「対応」がみられる。その話し手が、大規模に中原地方に進出してきたのが、唐末、宋初の歴史であった。（略）」

このような舌内入声の「-t,-kは合流して-ʔ に弱まり」（平山　昭和42：166）、その後、消失したとの記述を読んだ筆者もまた疑問を感じた一人です。なぜなら今まで読んできた言語学・音声学の入門書のなかに、語末子音k/t/pが声門閉鎖音（/ʔ/）に変化する、あるいは語末の子音k/t/pには声門閉鎖音が内在するというような記述をみたことがまったくないからです。橋本氏の上の異議も当然で、中国語北方方言の入声がt/k→ʔ（その後、消失）とみる通説には大きな疑問がわくでしょう。

1. 「松浦」はなぜ「末盧」と音訳されたのか

前節では北方方言の舌内入声韻尾がt→ʔと変化（その後、北京方言などで消失）したとみることには疑問があると述べました。そこでこの問題を考える糸口となる、倭人伝の地名表記「末盧」について考えることにします。

3世紀末、西晋の陳寿によって書かれた倭人伝にでてくる地名「末盧」は「（1）肥前松浦郡。今の名護屋か唐津附近であろう。梅豆羅、末羅（『古事記』）・松浦（『日本書紀』）」（石原編訳　1985：41）と比定されていて、この比定に疑念をいだく人はいないでしょう。しかしこの比定が正しいとすれば、陳寿は「松」の音をなぜ「末」字で写したのかという疑問がでてくるでしょう。そこでこの疑問にたいしては当時の中国語に「松浦」の「松」の音を写す適当な漢字がなかったために、陳寿はやむなく舌内入声字「末」（末韻1等muat：以下、すべて中古音）を用いて、「末盧」と音写したのだと説明することができるでしょう。しかし少々腑に落ちない点があります。たとえば倭人伝と同じ頃、サンスクリットのuttara（人名）は「優多羅」と音訳されています21。そこで、「優」（尤韻ɪəu）字を用いて「松」は「末優」（muatɪəu）のような表記ができたかもしれません。また『大唐西域記』（玄奘646年成）には地名Kapila-vastuを「」（水谷訳　1971：191－2）などと写しているので、「堵」（姥韻1等上声to）の音は玄奘時代にはtuに近い音であったとみられるでしょう。そうであれば「松」は入声字「末」（muat）で音写するより、「摩」（戈韻1等平声mua）と「堵」を用いて「摩堵」（muato)と写したほうがもっとよい音訳ができたのではないでしょうか。筆者はこのように考えてみたのですが、今となっては確かめることはできません。しかし、日本語よりはるかに母音の種類が多い中国語を母語とする、西晋の陳寿が「松浦」の地名を音が近いとは思えない「末盧」で音訳したのはなぜかという疑問は残るでしょう22。

そこでこの取るに足りないとみえる疑問を放置するのではなく、疑問を解消させるアイディアはないかと前向きに考えることにします。そのため「松」と同音の中国語がなく、やむなく「末」で音訳したとの考えをすてることにします。第2節で漢語「菊」（kɪuk）が開音節化されてキクになっていることを紹介しました。そこで日本人にとって、古代中国語の喉内入声kの聞こえはクのような音であったと考えることができるでしょう。そこでにわかには信じることはできないでしょうが、当時の倭人が入声「末」（muat）の聞こえをマツと聞いたように、中国語「末」は中国人にとっても、当時の倭人と同じような聞こえであったと考えてみます。すると倭人の「末」の聞こえがマツ（matu）であり、「末」はまた中国人にとっても倭人と同じ聞こえであったという仮定から、当然「松」（matu）を音訳するためのぴったりな漢字は「末」ということになるでしょう。この説明は判じ物のようですが、「松浦」の地名を音が近いとは思えない「末盧」で音訳したのはなぜかという疑問からは解放されるでしょう。そしてこのように考えれば、中国語の「末」そのものがmatuのような聞こえをもっていたことになり、つまり舌内入声韻尾はtではなく、tuのようなものであったという考えがでてくるでしょう。

　ところで陳寿の生きた西晋（265—316年）といえば、上古音から中古音への変化の途上にあった時代です。前々節でみたように、舌内入声韻尾は上古から中古までずっとtで変化はなかったとみられています。そこでこの通説を信じれば、陳寿の時代の「末」の入声韻尾はtではなく、tuのようなものであったという筆者の考えはとても受け入れることはできないでしょう。しかし「舌内入声韻尾はtではなく、tuのようなものであった」という筆者のこのアイディアは絵空事ではありません。このアイディアがとんでもない考えではないことはこのあとの長い長い考察で明らかになるでしょう。

　次節では、そのために「質」の呉音シチと漢音シツの関係を考えることにします。

1. 呉音シチと漢音シツの関係を考える

まず中国語の入声韻尾が日本語でどのように開音節化されたのかを、藤堂氏の語例から次にみてみます。（藤堂　1980：167,171）。

|  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- |
| 語末入声 | 語末 | 例字 | |
| 呉音 | 漢音 |
| p | フ | ・ | ・ |
| t | チ | ・・ |  |
| ツ |  | ・・ |
| k | ク |  | ・・・ |
| キ | ・ | ・ |

また入声韻尾がk/tである呉音と漢音の違いは次のようになっています23（藤堂 1980：167,171）。

|  |  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- | --- |
|  | 喉内入声韻尾k | | 舌内入声韻尾t | |
| 呉音 | 語尾はク・キのどれかになる（藤堂 1980：167） | | シチ | 「質」  （質韻3等tʃɪět） |
| 漢音 | 体母音/e,ɛ/のあと　：「歷」（錫韻4等liek） | レキ | シツ |
| 体母音/o,a,ə/のあと：「各」（鐸韻1等kak） | カク |

そこで「質」の南北方言の入声韻尾の変化と、それにたいする呉音・漢音との関係は、次のように考えることができるでしょう。

　5-6世紀頃　　『切韻』(601)ころ　　　　　　現在

--北方方言t-------t--┬-------------------→入声韻尾消失（北京語など）

　　　　　　　　　　　└-（日本語に借入）--→漢音シツ

--南方方言t-------------------------------→入声韻尾t保存（閩語など）

　　　　　└-（日本語に借入）--------------→呉音シチ

ここで呉音・漢音のもとになった中国語「質」の入声韻尾をそれぞれ「t呉」と「t漢」とします。また「歷」（錫韻iek）と「各」（鐸韻ak）の体母音の違いを仮に「歷e」と「各a」のように記号化します。そして入声韻尾「t呉」と「t漢」が同じであることを「t呉」＝「t漢」、また同じでないことを「t呉」≠「t漢」、そして「歷」と「各」の体母音が同じでないことを「歷e」≠「各a」と記号化します。そして漢語借入当時の入声韻尾「t呉」と「t漢」が同音でなかったとみる考え方をAとし、「t呉」と「t漢」は同音であるという通説の考え方をBとします。

そうするとそれぞれの舌内入声韻尾と喉内入声韻尾、また日本語に添加される母音イとウとの関係を、次のように考えることができるでしょう。

|  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- |
|  | 中国語の入声韻尾t（舌内）とk（喉内） | | 日本語の添加母音 |
| A | t | 「t呉」≠「t漢」（入声韻尾が同じでない） | イ（呉音）とウ（漢音） |
| k | 「歷e」≠「各a」（体母音が同じでない） | イ（錫韻）とウ（鐸韻） |
| B | t | 「t呉」＝「t漢」（入声韻尾が同じ） | イ（呉音）/ウ（漢音） |
| k | 「歷e」≠「各a」（体母音が同じでない） | イ（錫韻）とウ（鐸韻） |

上表のAは、舌内入声韻尾に添加される母音の違いは中国語の入声韻尾「t呉」と「t漢」の違いに由来し、喉内入声韻尾に添加される母音の違いは中国語の体母音の違いに由来するとみる見方です。それにたいしてBは、舌内入声韻尾に添加される母音の違いは日本語の開音節化に原因があり、喉内入声韻尾に添加される母音の違いは中国語の体母音の違いに由来するとみる見方です。

そこで上でAとBの見方を比較したように、「質」の呉音・漢音の入声韻尾（t呉/t漢）とその「質」の語末チ・ツ、またインキとインクの語末キ・ク、さらに神名「阿遅志貴～」と「阿旎素企～」の「志・素」の関係を、次のように比較してみます。

|  |  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- | --- |
| 「質」の入声韻尾 | | 「質」の語末 | インキ・インク | 味耜高彦根神 |
| t呉≠t漢 | t呉 | チ（呉音） | キ | 志 |
| （t呉→）t漢 | （チ→）ツ（漢音） | （キ→）ク | （志→）素 |
| t呉＝t漢 | t呉 | チ（呉音） | キ＝ク | 志＝素 |
| t漢 | ツ（漢音） |

ところで第2節で「キ＝ク」、第3節で「志＝素」と考えるよりも、「キ→ク」、また「志→素」の変化を考えるほうがよいとみました。そこで上のAの見方のように舌内入声韻尾のt呉とt漢が同音ではなく、T（上古）→t呉→t漢（＝中古t）のように考えることが可能であるなら、喉内入声の場合は体母音の違いにより、舌内入声の場合は入声韻尾の違いにより、添加母音イとウの違いが生じたとより統一的に考えることができるでしょう。

　次節では、漢語「宜」の変化から舌内入声韻尾のt呉→t漢の変化があり得ることをみていきたいと思います。

1. 「質」の呉音と漢音の変化を考える

まず考察の糸口として、『切韻』（陸法言、隋601年）時代の南北方言にたいする藤堂氏の考えを次にみてみます（藤堂　1980：212）。

「「奇：祇」（筆者注：支韻3等gɪe/4等gie）のたしかに違ったことは，《切韻》の共編者の一人であった顔之推（筆者注：：531－91？）の《顔氏家訓（音辭篇）》のうちに，‘岐山の岐は，奇と読むべきだが，江南では祇と読んでいる’といって，「奇・祇」両音を区別しているのをみても，もはや疑う余地はない。」（この続きは注24）。

また『切韻』とほぼ同時代の陸徳明の『経典釈文』（583－9年成）には、「方言の差異はもとより自ら同じではない。河北と江南で，最も大きく異なっており，（略）」25（詹　昭和58：142）と記述していて、『切韻』当時にはもうすでに方言とみられるほどの差異があったことがわかります。

しかし、南北朝の詩人の用韻を考察された王力氏の考えをうけて、水谷氏は次のようにいわれています(水谷　昭和42:97)。

「その結果，時代の先後は用韻に対して大きな影響を見せているが，地理的な差異は影響が小さいことを発見している。」

＊王力氏の「南北朝詩人用韻考」では、386－600年を3期に分け、詩人の用韻が考察されています。

さらに唐代音と現代諸方言との関係を、平山氏は次のように述べられています(平山　昭和42:165)。

「概略的に言って現代諸方言音の多くは，じつは中古音から直接にではなく，唐代音から，それがさまざま異なる方向に変化したものとして，説明できる状態にある。」

ところで「呉音はふつう長江下流，つまり当時南朝のさかえた華中・華南地方の字音であると言われ」（藤堂　1980：166）、また漢音は「袁晉卿が8世紀中頃（735年渡来）に洛陽長安の字音を伝えて来た。」（藤堂　1980：169）ものとみられています。そこでこれまで紹介した記述を総合すると、南北朝時代には地理的な方言的差異は大きくなく、唐代以後に方言の分化が大きくなったと考えることができるでしょう。そこで『切韻』（601年）当時の中国語は現在にみられる揚子江を分ける二大南北方言に分岐していなかったとみれば、日本借入音の変化の原因をその中国語の字音の時代差に求めることができるでしょう。

たとえば藤堂氏は「宜」の借入音の変化を次のようにみられました（藤堂　1980：161－2）。

「宜（筆者注：疑母支韻3等ŋɪe）などが（1）ガ→（2）ゲ乙→（3）ギ乙となったのは，中国において[ŋɪa] →[ŋɪe] →[ŋɪ]のような字音の変化が起こったために，わが国の借用音にもそれが反映したものだといえよう。」

＊（1）は推古朝（592—628年）遺文などの音。（2）は奈良朝の古事記（712年）・万葉集（759 年以後）の呉音。（3）は日本書記（720年）の漢音。注26。

上の考えは、次のように表わすことができるでしょう。

|  |  |  |
| --- | --- | --- |
|  | 『切韻』(601)　　　　　　8世紀　　　　現代 | |
| 中国語「宜」 | ŋɪa--------→ŋɪe---------ŋɪ-------→ | 中国語各方言 |
| 日本借入音 | │　　　　　│　　　　　└----→ギ乙 │　　　　　└----------------→ゲ乙 └----------------------------→ガ | 漢音（日本書記） |
| 呉音（古事記・万葉集） |
| 推古朝音（推古遺文など） |

そこで上の「宜」の変化と同じように、「質」の呉音シチと漢音シツの違いを南方方言と北方方言の差ではなく、呉音と漢音借入時の舌内入声韻尾の差に由来すると考えてみます。

すると「質」の舌内入声の変化とそれぞれの時代に借入された呉音・漢音・中期朝鮮語の入声韻尾（t呉/t漢/t）の変化を、次のように考えることができるでしょう。

|  |  |  |
| --- | --- | --- |
|  | 4世紀頃　　　　『切韻』(601) | 現在 |
| 中国語 | T---------→t呉---→ t漢→ t-----→ | t /ʔ/消失（各方言） |
| 朝鮮借入音 | T-------------------→ t（借入）-→ | rʔ（中期朝鮮語） |
| 日本借入音 | T---------→t呉---→ t漢---------→　　　　　　　　│　　　 └-（借入）-→ 　　　　　　└----------（借入）-→ | t（キリシタン時代） |
| ツ（漢音） |
| チ（呉音） |

＊いま仮に上古の入声韻尾をT、朝鮮語に借入された入声韻尾をtとしてあります。

　このように呉音シチと漢音シツに添加される母音イとウの違いを借入当時の中国語の入声韻尾にあるとする考え、つまり呉音・漢音の借入当時の中国語「質」の韻尾t呉とt漢が同じではないという考えは、今まで中国語音韻学者や日本語学者、さらには韓国・朝鮮語学者の誰もが想像しなかった世界で初めての考え方です。しかしこの驚くべきアイディアを思いついたからといって、「質」の入声韻尾t呉とt漢がどのような音であったのか、また先の中国語北方方言はt/k→ʔ（その後、消失）のように変化したという通説にたいする疑問が解けるわけでもありません。

　そこで次節では、江戸初期の舌内入声がどんな音であったのかをみてみることにします。

1. 江戸初期の舌内入声はどんな音だったのか

ロドリゲスは『日本大文典』（1604-8年）のなかで、舌内入声について次のような記述をしています（ロドリゲス　昭和30：642,231）。

1.「日本のことばはすべて母音か子音のN，Tかに終ってゐる。」

2.「〇ある綴字でTに終るものは，日本では‘つ’（Tçu）の綴字に当るのであって,そのTを‘「詰字」’（Tçumeji）と呼ぶ。さうしてT そのものを写す文字がないので，Guatと書くべきを‘ぐわつ’（Guatçu）と書く。」

　＊「月」：疑母月韻3等入声ŋïuʌt。

またロドリゲスは連声27について、次のように記述をしています（ロドリゲス　昭和30：637）。

「〇 T（ツ），又は，chi（ち）の後にVa（は）が続く場合には，Vがないかのやうに，或いは又，Va（は）がTa（た）に変るかのやうに，二つのTを以て発音される。例へば，Taixetta（タイシェッタ），Xixetta （シシェッタ），Connitta（コンニッタ）はTaixetua（大切は），Xixetua （師説は），Connichiua（今日は）である。尤もこの二つの方法は，両方とも発音され得る。」

　上のタ行連声現象について次のような考えがあります（奥村　1977:234）。

「「絶・日月・念仏」（京大本平曲正節の例）のごときタ行連声現象も、近世期にはおおむね衰退した模様であるが、これもつまりは、語末促音の消滅を意味する訳である。」

そこでキリシタン文献の舌内入声韻尾をtとみることで、「今日は」の連声はkonnit＋pa→konniQtaの変化として説明できるように思われます28

　次に日葡辞書（1603年刊）からツ（チ）の表記をみてみます（土井・森田・長南編訳　1980：73,73,286,337,509,290,350,791,791,343,68,67）。

|  |  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- | --- |
|  | ツ表記（促音形） | | ***ッ***表記（入声形） | チ・ツ表記（開音節形） |
| 和語 | Catta カッタ（勝つた） | |  | Catçu カツ（勝つ） |
| 字音 | p | Futteiフッテイ(払底) |  |  |
| t | Ippitイッピ***ッ***(一筆) | Qisatキサ***ッ***(貴札；書状の意) |  |
| k | Gaccŏガッカゥ（学校） |  |  |
| x | Ixxŏイッシャゥ（一生） | Xŏguatシャゥグヮ***ッ***（正月） | Xŏguachiシャゥグヮチ（正月） |
| s | Issocuイッソク（一足） | Butjiブ***ッ***ジ（仏事） | Butçujiブツジ（仏事） |

＊「***ッ***」（小文字のツのゴシック太字斜体）は土井氏の表記（州の草体）の代用。  
＊「「つ」「ツ」の字形の起源は（略）古代朝鮮半島における用字を参考にした「州」の説が有力である。」(日本大辞典刊行会編　昭和50（第13巻）：606)。

上表から当時の舌内入声には促音形のツ表記（-pp-/-tt-/-kk-/-xx-/-ss-など）と入声形の***ッ***表記（-t）、さらに開音節化したチ・ツ（chi/tçu）の表記がみられることがわかります。

1. 捷解新語のツの表記を考える

亀井氏は捷解新語の「～筆」にたいする、次のような種々の表記をあげられています（A.京大國語國文研編　昭和47：356上,361上,371上/B.土井・森田・長南編訳　1980：337,184,601,612）。

|  |  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- | --- |
| A.『捷解新語』 | | | B.『日葡辞書』 | |
| いつひつ（一筆） | － | 읻빋（it pit） | Ippit | 一筆 |
| 御てんひつ（御伝筆） | ᅁᅩ뎐비쭈（ŋko tyən pi ccu） | － | Denpit | 伝筆 |
| たひつ（多筆） | 다빋주（ta pit cu） | － | Tafit | 他筆 |
| Tappit | 達筆 |
|  | 開音節化した綴り | 促音形/入声形の綴り | | |

＊「この原刊本『捷解新語』は、その刊行が康煕十五年（一六七六）、編纂時期も、それに先立つ四十年ごろと考えられるため、（略）」（濱田　昭和58：47）。編纂時期については、森田　昭和48：221-4。

＊亀井氏が「「捷解新語」の注音法」（亀井　昭和 59:313－369）に引用された語はこれ以後も京大複製本（京大國語國文研編の各冊）から引用しなおします。

上の3種の表記のうち、읻빋（it pit）は語中の促音形と語末の入声形を、またᅁᅩ뎐비쭈（ŋko tyən pi ccu）の쭈や다빋주（ta pit cu）の주は開音節形のツを表わしているとみられます。

ところで捷解新語では「とかく」の表記にたいして、次の3つの表記がみられます（京大國語國文研編　昭和47：301上,354上,252上/土井・森田・長南編訳　1980：653）。

|  |  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- | --- |
|  | 並書表記 | 音節末の入声kと音節頭のk | 単書表記 | 日葡辞書 |
| ハングル | 도가꾸 | 도각구 | 도가구 | Tocacu |
| 転写 | to ka kku | to kak ku | to ka ku |

　＊下線は筆者。

このように捷解新語では「ツ」や「とかく」などに種々の表記がみられます。そこでこの表記のゆれは10数年を捕虜として日本で過ごした、康遇聖自身の発音が揺れていたこと、いいかえれば当時の日本語のクの音がゆれていたとみることができるでしょう。

ところで捷解新語では「有る」の促音形の「あって」とみられる表記が次のようにみられます（京大國語國文研編　昭和47：195上,245上）。

|  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- |
| 表記 | 仮名表記--ハングル表記 | 本文表記 | ㄷ/ㄸの表記 |
| 単書 | あつて-----앋뎨（’at tyəi） | 「つ」あり | 第一音節末と第二音節頭にㄷ（t） |
| 並書 | あて-------아뗴（’a ttyəi） | 「つ」なし | 第二音節のはじめにㄸ（tt） |

＊（　）内の翻字。

＊重刊改修捷解新語：「あつて　앋뎨（’at tyəi）；京大國語國文研編　昭和47：139下）。

そこで亀井氏は上の単書・並書表記と本文のツの有無との関係を次のように考えられました(亀井　昭和 59：364)。

「かながきが一定の方針の下に行はれてゐるとすれば、「つ」の有無は発音と関係し、従って促音をあらはすのはその一方のみとなる。（中略）本文に促音を「つ」で明記してゐて、ハングルの方に初声を重ねる形式をとったものはないのである。」

また特殊な注音字「쭈」（ccu）について、亀井氏は次のように考えられました（亀井　昭和 59：362,367-8）。

1．「入声音の特殊な注音法「쭈」は、やはり、tから今日行はれる単純な「ツ」に推移するその過程に存した実際の発音の様態を写し伝へてゐるものであらう。」

2．「もとより、初声を重ねた注音法によってあらはされたもののうち、その一部は促音に一致してゆくであらうが、（中略）ことは、とらはれざる外国人の耳がいかに日本語の秘密をあばいてゐるかに係はる。（略）」

そこで初声を重ねた（各自並書）表記29は何をあらわしていたのかという疑問にたいして、亀井氏は次のように考えられました（亀井　昭和 59：367)。

「（上略）これを以てみると、初声を重ねる形はいはゆる勁音（된시옷（筆者注：toin si ’os））と同じく声門の破裂（glottal explosive）の音をあらはすものかと思はれる。（中略）要するに初声を重ねた注音法に対し促音より適切と思はれるものを擬することはやはり不可能である。しかし、促音を以てすべての場合を押切ってしまふこともまた躊躇せられる。（以下、略）」

亀井氏のこれらの記述から単書表記앋뎨（’at tyəi）のt-tは促音を、また並書表記아뗴（’a ttyəi）のttは現在の促音のもとになる音を、そして語末の並書表記피도쭈（phi to ccu：「ひとつ」）のccuは現在のツのもとなる音を表記したとみることができるでしょう。

ところで語頭の初声を重ねる（並書ㅃ/ㄸ/ㄲ/ㅆ/ㅉ）表記は現代韓国語では声門閉鎖音（/ʔ/）のある濃音で、「p’/t’/k’/s’/tʃ’」（筆者注：ここではʔp/ʔt/ʔk/ʔs/ʔtʃに改め；李翊燮ほか　2004：70）と発音されます。また現代韓国語の濃音と奄美喜界島方言の喉頭化音のカイモグラフを比べると、同じ波形がみられる（小倉　昭和50：174、伊波　1974:27）ので、濃音と喉頭化音は音声的特徴が同じ声門閉鎖音（/ʔ/）30をもっていると考えることができるでしょう。

ところで先にみたように捷解新語では、ツやクが쭈（ccu：ᅁᅩ뎐비쭈 ŋko tyən pi ccu）や꾸（kku：도가꾸 tokakku）で写されています。そこで当時のツやクを喉頭化音のtsʔuやkʔuであったと考えれば、도가꾸（to ka kku）はtokakʔu、また도각구はto kak ku、さらに도가구はto ka kuで、それらは現在では「とかく」となっているとみることができるでしょう。そしてtsʔuは現在のツ（ts）や促音の「ッ」（Q）に変化したと考えると、「とかく」はtokakʔu（도가꾸）→tokaQku（도각구：Qは促音）→tokaku（도가구）のように変化したと考えることができるでしょう。

さらに喉頭化音tsʔuの声門閉鎖音（/ʔ/）が平安時代以前にも存在したと考えると、ツの開音節化と促音化は次のように考えることができるでしょう。

|  |  |
| --- | --- |
|  | 古代　　　平安時代初め　　江戸時代初期　　現在 |
| 開音節化 | T-------→tʔ------------→tʔsu（쭈）-----→tsɯ（쯔） |
| 促音化 | T-------→tʔ------------→tʔ-------------→Q |

＊ ʔ：声門閉鎖音/ʔ/。Q：促音（/Q/）。ここでは説明の便宜のため開音節化と促音化31の二つの変化にわけてあります。

＊とりあえず古代と平安時代初めの舌内入声はT/tʔ、また「今日は」の「日」（řɪĕt）はnitʔと考え、konnitʔ+pa→konnitʔ+a→konniQta（連声：コンニッタ）のように変化したと、ここでは考えておきます。

1. 中古舌内入声はtではない

前節では語末のツと促音のツの先祖をtʔと考えるアイディアを示してみましたが、これは絵空事ではありません。たとえば身近な外来語「ラジオ」の例で考えてみます。ラジオは「日本では、大正十四年（一九二五）以降、一般に普及した」（日本大辞典刊行会編　昭和51（20巻）：270）のですが、「一般には、例えばラジオを、国語の文脈の中で、[radio]とか、ましてや[reidiou]などと発音することは、たとえ英語の先生といえども、まずないと言ってよい」（濱田　昭和58：84）でしょう。このようにわずか100年もたたないうちにradioは日本語化されて、ラジオになっています。

そこでこのような外来語の急速な日本語化の傾向を考えれば、濱田氏が次のような疑問をだされたのも当然といえば当然でしょう（濱田　昭和58：84）。

「その当初においては、一往音韻体系外の特殊な発音形式（筆者注：舌内入声のt）として取扱うことが許されるにしても、八百年もの間永続した後における、一般的な発音（筆者注：「仏事」butji）をも同様に考えることが出来るかどうかは、甚だ疑わしいと言わざるを得ない。」

このように舌内入声をtとみれば、次のような疑問がおこるでしょう。

1. 言語学の教科書に記述されないt→ʔの変化が中国語北方方言で起こったのはなぜか。
2. 中期朝鮮語でt→rʔ（東国正韻：ㅭrʔ）の変化が起こった理由は何か。
3. 捷解新語で音節末のツを並書の쭈（ccu）で表記したのはなぜか。捷解新語の表記からはその当時のツはʔtsuのような音とみられるが、日本語で入声tが開音節化するとなぜ声門閉鎖音（/ʔ/）は発生するのか。
4. 陳寿（その当時の中国人）は倭人伝の地名「松浦」の「松」を「末」字で音訳したのはなぜか。「松」の音訳のためにもっと適当な音の近い中国語はなかったのか。
5. 呉音と漢音借入時の「質」の韻尾が同じtであるとすれば、呉音シチ、漢音シツと違ってしまった理由は何か。
6. 「今日は」の「日」（質韻3等řɪět）の入声韻尾をtとみると、連声「コンニッタ」をうまく説明できそうです。しかし入声tがキリシタン時代までずっと変化せずというのは本当なのか。連声すると入声tはなぜ促音化（「コンニッタ」のッ）するのか。

上のような数々の疑問は舌内入声をtとみるかぎり解くのは難しく、日本語や韓国語のある不明の原因によって、そのような変化が起きたとしかいいようがないでしょう。そこで上のような疑問を少しでも解消できるアイディアを考えることにします。

中国語の上古と中古の舌内入声韻尾をT/tとみて、それらの舌内入声の変化を次のように比較してみます。

|  |  |  |
| --- | --- | --- |
|  | 中国語の舌内入声 | 周辺言語に借入された後の舌内入声の変化 |
| A | 上古Tより中古tʔへと変化 | 借入当時の入声韻尾（tʔ）がその後各言語で独自に変化 |
| B | 上古より中古までずっとt | tを借入後、各言語で独自に変化（シチ/シツ,rʔなど） |

そこで中国語と周辺言語に借入された舌内入声の変化を次のように比較できるでしょう。

|  |  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- | --- |
|  | | | 中国語と周辺言語の舌内入声の変化 | |
| A.筆者の考え | B.通説 |
| 中国語 | 北方方言 | 北京 | （T→）tʔ→ʔ〈tの消失〉→φ〈ʔの消失〉 | t→ʔ→φ〈消失〉 |
| 太原 | （T→）tʔ→ʔ〈tの消失〉 | t→ʔ |
| 南方方言 | | （T→）tʔ→t〈ʔの消失〉 | t〈変化せず〉 |
| 中期朝鮮語 | 東国正韻 | | （T→T0→T1→）T2（＝tʔ）→rʔ | t→rʔ |
| 日本語 | 倭人伝「松」の音訳 | | 「末」（muaT→）muaT0（＝muatʔu）で | 「末」（muat）で |
| 呉音シチのチ | | （T→T0→）T1を借入。T1→tʃʔi→tʃi | t→tʃi |
| 漢音シツのツ | | （T→T0→T1→）T2を借入。T2（＝tʔ）→tsʔu→tsu | t→tsu |
| キリシタン時代 | 開音節ツ | （T→T0→T1→）T2（＝tʔ）→tsʔu→tsu | t→tsu |
| 促音Q | （T→T0→T1→）T2（＝tʔ）→ʔ→Q | t→Q |

＊T/T0/T1/T2/tʔ：上古、倭人伝時代、呉音借入時、漢音や中期朝鮮語借入時、キリシタン時代のそれぞれの舌内入声韻尾。ただし、ここではT2とtʔは同じとみておきます。

ʔ：声門閉鎖音（/ʔ/）。Q：促音（/Q/）。チはtʃi、ツはtsuとしてあります。

上の比較からわかるように唐初の舌内入声をt（Bの考え）ではなくtʔ（Aの考え）とみれば、通説では説明不可能な種々の疑問にたいして、よりよい説明が可能になるでしょう32。

ここまでの考察は2017.5.24に更新した「中古中国語の舌内入声を考える」（korean/korean3hp.docx）と多く重複していますが、「母音イとウの相関」という観点から再び舌内入声について考察してみました。

1. 母音の無声化はいつまで遡れるのか

前節では舌内入声韻尾の変化をT（上古）→T1（呉音借入時のt呉）→T2（漢音借入時のt漢）のように考えました。しかし、それでも上古のTやその後のt呉やt漢の実体は不明です。そこで上古の舌内入声韻尾がどのような音であったのかを考えるための手がかりとなる、母音の無声化について考えることにします。

母音の無声化とは、次のような現象をいいます（外山　昭和47:239）。

「現代日本語（たとえば東京語）には、母音の無声化、つまり無声子音と〔i〕・〔ɯ〕で作られる音節が、無声子音の前や語（文節）末に来るばあい、その有声母音を失い、「草（くさ）」は、〔ksa〕（あるいは〔kɯsa〕）のごとくになる、という現象が見られる。」

＊ɯ：ɯの無声化音（ɯの下に小丸o）の代用。

そこで上の母音の無声化は「もともと有声母音としてあったものが弱まり、ぬけおちていく歴史的な現象を表わすものとしても考えることができる。そして、下〔ʃta〕という発音は、まさしくそういう道すじをへて生まれたものにちがいない。」（宮島　昭和36：38）と、宮島氏は考えられました。そしてこの考えのもとに宮島氏は母音の無声化がいつまで遡れるかを考察されました。

その考察のなかで宮島氏はメドハーストの記述（1830年刊）を次のように引用されています（宮島　昭36：43）。

「「単語や音節の終わりへ来たときに、ちぢめられる（be contracted）文字がある。たとえば、チtsiや（筆者補：ツ）tsooはts’に、ルrooはr’に、クkfooはkf’に、フfooはf’に、キkiはk’に、シsiやスsooはs’に――しかし、ちぢめられたとき、これらはみな力を入れて発音され、その音節の終わりの方がまだのどに残っているように、またはちぢめられた音節の子音がくりかえされたように聞こえるのである。」（p vi）」

上の記述から「contractionsとしてあげているものが無声化と現象の上で一致し（略）」（宮島　昭36：43）ているとして、宮島氏は江戸末期にすでに母音の無声化が存在したとみられました33。

ここで宮島氏の種々の資料を筆者でまとめてみると、次のようになります（宮島　昭和36：42-47）。

|  |  |  |  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- |
| A | B | C | D | E | F | G |
| Cocks | Collado | Kaempfer | Thunberg | Medhurst | Titsingh | Curtius |
| 1615-22 | 1632 | 1727 | 1791 | 1830 | 1834 | 1857 |
| Assackxa | fitòtç | si,ssi,s | Wataks | ts’/s’ | Dai bouts | mas |
| 浅草 | ヒトツ | シ | わたくし | チ・ツ/シ・ス | 大仏 | マス |

＊上書は筆者未見のため、宮島氏が引用された書名・頁はこれ以後も省略します。

＊R.Cocks：平戸のイギリス商館長。「イギリス商館長日記」（1615-22）より引用34。

＊D.Collado（1619-25在日）の『日本語文典』の「讀者に寄する序詞」のなかの記述（コリャード　昭和9:6）より。

＊E.Kaempfer：博物学者で長崎商館医（1690-92在日）。『日本誌』の著者で、そのなかに「山伏（Jammabos）」「薬師仏（Jakusi）」（ケンペル　1977：57,137）などみられます。

＊C.P.Thunberg：植物学者で長崎商館医（1775-6在日）。旅行記第3巻（1791）の対訳単語よりの引用(宮島　昭和36：44）。「十八世紀後半の九州方言に無声化があったこともまずたしかである。」（同書：45）。

＊W.H.Medhurst：宣教師・中国語学者。『英和・和英語彙』（『An English and Japanese and Japanese and English Vocabulary』(Batavia 1830)の著者。

＊I.Titsingh：オランダ商館長（1779-1780在日）。

＊J.H.D.Curtius（1813-79）：最後のオランダ商館長で、最初の駐日外交官（1852-1860在日）。Curtiusの原稿をJ.J.HOFFMANNが改訂増補した『PROEVE EENER JAPANSCHE SPRAAKKUNST』（1857）からの引用35（クルチウス　昭和46：13-4）。

そこでコリャードの日本語文典にみられる「御座る」36にたいする記述を次にみてみます（コリャード　昭和9：6）。

「i又はuで終る單語が日本人に依つて發音されるときには、最後の母音は初學者には殆んど聞き取れない、例へばを聞く場合gozàrと聞こえ、を聞く場合に單にfitòtçの如く聞えるし、又、 を聞いても單にàx no fàraと聞こえるのである。」

またコリャードと同時代人であり、コリャードよりも日本語観察に優れていたとみられる宣教師ロドリゲスは次のように述べています（ロドリゲス　昭和30：642,231）。

1．「日本のことばはすべて母音か子音のN，Tかに終ってゐる。」  
2．「〇ある綴字でTに終るものは，日本では‘つ’（Tçu）の綴字に当るのであって，そのTを‘詰字’（Tçumeji）と呼ぶ。さうしてTそのものを写す文字がないので，Guatと書くべきを‘ぐわつ’（Guatçu）と書く。」

そして日葡辞書にも次のように「仏」（vïuət）の入声形と開音節形の二つの表記がみられます（土井・森田・長南編訳　1980：67；67,68）。

1．「But.ブ***ッ***（仏）」

2．「Butçuji.ブツジ（仏事）/Butji.ブ***ッ***ジ（仏事）」

このようにキリシタン資料の漢語の語末はt、また和語の「御座る」の語末はrなので語末母音の消失を考えれば、その当時、語末母音は無声化していたとみられそうです。そこで宮島氏は母音の「無声化のもっとも古い記述は、おそらく（改行）D.Collado（略）に見えるものである。」（宮島　昭和36：46）と考えられたのです。

しかしこの考えに疑問がわく、次のような記述がみられます（ロドリゲス　昭和30：645）。

「〇注意すべきことは，日本人は1つの子音と一つの母音とから成る単純な音節を以て彼等のあらゆる語を発音するので，PadreをPatere（ぱてれ）といひ，TrindadeをChirindade（ちりんだあで）といひ，NatalをNataru（なたる）といひ,（以下、略）」

このように漢語の「仏」やPadreなど借入語では母音が添加され開音節化されるのですが、そうすると和語の「御座る」ではgozàrのように母音uが脱落しているので、漢語などの外来語には母音の添加、和語では母音の消失といった相反する現象がみられることになります。ではなぜこのような現象が現れるのでしょうか。

そこでこの問題を考えるために、「御座る」「一つ」「私」の語のキリシタン時代から明治初期に至る変化を次にみてみます。

|  |  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- | --- |
|  | 御座る | 一つ | | 私 |
| A.難語句解（1592～3年刊） | gozar | fitoccu | | － |
| B.日葡辞書（1603年刊） | Gozaru | Fitotçu | | Vatacuxi |
| C.日本大文典（1604－8年刊） | GOZARV/Gozaru | Fitotçu | | Vatacuxi |
| D.日本語文典（1632年刊） | gozàr | fitòtç/ | |  |
| E.捷解新語（1676年刊） | 御さる ᅁᅩᅀᅡ루（ŋko za ru） | ひとつ | 피도쭈 （phi to ccu） | わたくし 와다꾸시 （’oa ta kku si） |
| F.重刊改修捷解新語（1781年刊） | 히도쯔 （hi to ccɨ） |
| G.Exerecise in ～（1879年刊） | Arimas（アリマス） | Stoats（ヒトツ） | | Watarkshee（ワタクシ） |

＊A：バレトの『天草版平家物語難語句解』37（森田　昭和51：55（左12）,7（左5））。

＊B.『日葡辞書』：「Gozari,u,atta.ゴザリ，ル，ッタ（御座り，る，つた）」（土井・森田・長南編訳　1980：310,250,681）。

＊C：ロドリゲス　昭和30：592,260,265。

＊D：コリャード　昭和9：6,6,96,18。

＊E：康遇聖著（京大國語國文研編　昭和47：12上,35上,43上）。

＊F：康遇聖著（同書：11下,69下,13下）。

＊F：R.Atkinson著『Exerecises in the Yokohama Dialect』（馬　2015：8,8,8）。未見。

上表からコリャードやバレトは「御座る」の語末母音を表記していないのがわかります。しかしそれとほぼ同時代の日葡辞書では「御座る」の語末母音uを、また捷解新語では「ひとつ」のツを쭈（ccu）、その約100年後に刊行された重刊改修捷解新語では쯔（ccɨ）と語末の母音を表記しています。

たとえば明治初期のアトキンソンの横浜方言でも、語尾シとスの表記には次のような違いがみられます（馬　2015：8）。

「（略）そこでのス・ズ・ツのローマ字綴りを見てみれば

Arimas（アリマス）、Skoshe（スコシ）、Meeds（ミヅ）（以下、語例は略）

のように、例外なくすべてs、zで終わっている。それに対してシ・ジ・チの綴りはまちまちであり、母音[i]を表わすものと表わさないものもある。」

上の記述からわかるようにコリャードとバレトは「御座る」のル、またアトキンソンは「アリマス」のスの母音を表記していないので、これらの母音の無表記は母音の無声化とみることができそうです。ところで、もし江戸初期に「御座る」のルの母音が無声化していたとするなら、重刊改修捷解新語ではルの母音が表記されていることから、「御座る」のルの母音は重刊改修捷解新語以後、有声化したとみられます。また明治初期のアトキンソンの横浜方言では、ルと同じ母音をもつ動詞「あります」の終止形語尾スはsで終わり、母音が表記されていないので、スは江戸時代終わりころには無声化していたと考えられます。しかしこのような動詞語尾ルやスの母音ウの先祖返り（再無声化）を考えることは難しいでしょう。そこで捷解新語や重刊改修捷解新語ではルの母音が表記され、アトキンソンではスの母音が表記されていないことを勘案すれば、江戸時代初期にはまだ母音の無声化がなく、江戸時代終わり頃に母音の無声化が始まったと考えるのが自然でしょう。言語学者でもあり、方言学者でもあった佐久間氏が「東京語では母音の無声化は著しい事實である」（佐久間　昭和4：229）と、昭和初期の東京方言に無声化があったと記述されているので、そう考えても矛盾しないでしょう。このように母音の無声化が江戸時代終わり頃からはじまったと考えると、江戸初期のコリャードの母音の無表記は何をあらわしているのかという疑問がでてくるでしょう。

1. 「御座る」のルは無声化していたのか

前節では語末の母音イ・ウの無表記を母音の無声化とみる考え方に疑問をだしてみました。そこで母音の無表記が母音の無声化を表わすものではないとすれば、母音の無表記は何を意味しているのでしょうか。この問題を考えるために、コリャードのgozàr（「御座る」）の語尾rと現代語の「あります」のスの母音について考えることにしまう。

現在の「あります」の発音には、次のような方言差がみられます（柴田　1988：630-1）。

「【無声化】　ある条件のもとに母音のひびきが消えること。音声学的には、声帯の振動がなくなることと説明できる。東京方言では、「北（kita）」のiが全然ひびかないが、京都方言ではよくひびく。「あります」の末尾のsuのuは、東京方言では消えて［arimas］に近く聞こえるが、大阪方言などでは「スー」と長めに聞かれるほどsuのuがよくひびく。

　東京方言式の無声化は、無声の子音と無声の子音とに挟まれた狭母音（i・u）に起こる。kitaのk・tは無声子音、iは狭母音である。[arimasu]の場合も、末尾に続いて無声の子音があると考えれば（ときには、実際に、のどをつめる声門閉鎖音[ʔ]のあらわれることがある。すなわち、[arimasuʔ]）、sも無声子音で、間に狭い母音（u）が挟まれている。（筆者注：以下は次節で紹介します。）」

＊以下の考察のため、大阪方言などの「スー」をsu:であらわします。

このように現在の「あります」は東京方言でarimasと母音uが無声化され、大阪方言ではarimasu:と母音u が長音化されます。ところで現在の「あります」の「ます」は「まゐらする」の後裔であるとみられています38。

そこで中期朝鮮語文献の「まるする」から「ます」への変化をみてみると、次にようになっています（A/B：京大國語國文研編　昭和47：12上,33上,30上/-,30下,19下）。

|  |  |
| --- | --- |
| A.捷解新語（1676年刊） | B.重刊改修捷解新語（1781年刊） |
| まるする　마루수루（ma ru su ru） | － |
| まるすまい　마루수마이（ma ru su ma ’i） | *御*さりまする　ᅁᅩᅀᅡ리마쓰루（ŋko za ri ma ssɨ ru） |
| ～*御*さる　ᅁᅩᅀᅡ루（～ ŋko za ru） | *御*さります　ᅁᅩᅀᅡ리마쓰（ŋko za ri ma ssɨ） |

＊「Maraxe,suru.マラセ，スル（まらせ，する）」（土井・森田・長南編訳　1980：386）。

＊「*御*」：「御」の草体。

また「まるする」の促音形とみられる「まつする」が、狂言記（流布は1699年）に次のようにみられます（亀井　昭和61：396-7）。

「ただ稀に「まつする」の形をみる。

〇いや耳が、も、ちぎれまつするまつする（蟹山伏）（略）

〇遊山いたしたる事は御ざりませぬ。（文になひ）

の如き例をみる。漸く時代一般の趨勢は、「まらする」を棄てて「ます（る）」に就いてゐたことを窺はしめるものである。（中略）

因みに、現行大蔵流では、この「負ひませう」にあたる個所を「オイマンショ」と謡ふ。これは「マラショ」の俤をなほ存する珍しい形として注目せられる。」

ところで「まるする」から「ます」への変化を、亀井氏は次のように考えられました（亀井　昭和61：394-5）。

「この「まらする」といふ語は、上にすでに推知し得たごとく「まゐらする」と同義で、これより派出した形である。そして発生は室町時代の中期にまでは遡り得る。（中略）ここで、「まらする」はさらに崩れた形を一方に発達せしめたのである。すなはち、それが捷解新語の「まるする」である。これには、ma-ru-su-ruと読める形で音註が施されてゐるが、やがてma-r-su-ruを経て、（ma-ṛ-su-ru）＞ma-s-su-ruの段階に達したのである。この「まつする」の促音が脱落すれば、「まする」の形に到達する（原注4）。」

＊marusuru：「まるする　마루수루」（捷解新語）/massïru：「～まする　～마쓰루」（捷解新語）（京大國語國文研編　昭和47：12上/30下）。

＊marsuru：アビラ・ヒロンの『日本王国記』の表記。「Tabe marsuru（たべまるする、一〇五ページ）」（土井補注　1965：660）。

＊亀井氏の原注4にみえる「（ma-ṛ-su-ru）」（亀井　昭和61：420）を補筆。

＊日葡辞書では「Mairasuru（参らする）/Marasuru（まらする）」（土井・森田・長南編訳　1980：380,386）。

このように「ます」は捷解新語の「まるする」から狂言記の「まつする」、そして重刊改修捷解新語の「ます（る）」に変化したとみられています。そこで東京方言の「ます」はmarusuru→massuru→masuru→masu→masと、関西方言はmarusuru→massuru→masuru→masuu→masu:と変化したとみれば、現在の東京方言に無声化が、関西方言に長音化がみられることを無理なく説明できるでしょう。そしてこの考えが正しいとすれば、重刊改修捷解新語（1782年刊）では、「～ます」は「～마쓰」（ma ssɨ）と母音が表記されているので、東京方言の「ます」の「す」の無声化はそれ以後、江戸時代終わり頃に起こったとみなければならないでしょう。そして捷解新語や重刊改修捷解新語、またロドリゲスの日本大文典では語尾のスやルの母音が表記されているので、コリャードのgozàrの語末母音は無声化されたrụではなかったとみるほうが自然でしょう。このように考えてくると、コリャードがgozàrと母音を表記していないのは事実としても、それをただちに語尾ウが無声化していたとみることはできないでしょう39。

1. 鹿児島県薩隅方言の無声化を考える

前節ではコリャードの表記gozàrは母音の無声化を表わしたものではないと考えました。

そこで前節で省略した柴田氏の「あります」にみられる無声化についての記述の続きを次にみてみます（柴田　1988:631）。

「（上略）熊本方言などで、語末の狭い母音に同じような現象が起こる。「柿」[kakị]、「紙」[kamị]。この例からもわかるように、東京方言などの無声化とは条件が違っている。この傾向が進むと、鹿児島市方言のように、「柿」：カッ[kat]、「紙」：カン[kaɴ]となる。これは無声化と言うよりは、末尾母音の脱落と言うべきものである。この無声化は沖縄へ行くといっそう激しくなり、宮古平良（ひらら）市（筆者注：現宮古島市）方言では、「人」が[pïtu] から[pïtu]を経て[pstu]にまで変化した。同じ平良市だが、離島の大神では、b、d、g、zの有声子音がすべてp、t、k、sの無声子音に変化して、ついに「濁音のないことば」になった。たとえば、「鏡」:カカム[kakam]、「毒」：トゥク[tuku]など。」

＊ï：iの無声化音（iの下に小丸o）の代用。

上のような語中・語末の母音が脱落して、つまる音として発音される促音化は鹿児島県薩隅地方や長崎県五島列島など九州の一部の地域にみられるめずらしい現象です40。

この促音化には次のようなものがみられます(孝二　昭和50：343－4)。

「（1）語末の狭母音の脱落によって生じる促音（音声学的には入破音[t]）、または声門閉鎖音[ʔ]）。薩摩本土と五島列島の両方言の特徴。鹿児島では、キ・ク・ギ・グ・チ・ツ・ヂ・ヅ・ビ・ブ・ル・シは促音化する。それで「茎・靴・口・釘・首・櫛・来る」はみなクツとなる。（略）

（2）語中の促音[ʔ]で、鼻音・母音・半母音の前でつまる場合。鹿児島と五島福江両方言に共通する例、マツノツ〈松の木〉、ヤツモン〈焼きもの＝瀬戸物〉、キツネ〈狐〉、スツナ〈為るな〉、ユツアメ〈雪雨＝みぞれ〉、ナツヤンダ〈泣きやんだ〉。

（3）有声子音の前の狭母音が無声化することによって起きるいわゆる濁音の促音。-gg-、—dd-の例、アツガ〈秋が〉、イツギレ〈息ぎれ〉、コツゴ〈国語〉、テツドー〈鉄道〉、マツダサン〈松田さん〉、イツマツデン〈いつまででも〉（中略）

以上三種の薩隅式促音は島原半島でも実例を見出す。」

そこで九州の各方言と琉球方言の「月」の発音を次にみてみます（中本　1976:154,155,156,158,425,425/国立国語研究所編　昭和51：144)。

|  |  |  |  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- |
| 長崎方言 | 山下方言 | 黒瀬方言 | 鹿児島方言 | 奄美名瀬方言 | 宮古池間方言 | 首里方言 |
| [tsuki] | [tsuk] | [tsuT] | [tsuT] | tʃịki | tsïttʃu | çici |

＊山下・黒瀬方言：長崎県五島市富江町山下・黒瀬方言。

＊首里方言「月」の平民式発音は「tʃịtʃi /cici⓪/」、古い士族の成年男子の発音は「tsịtʃi /çici⓪/」41（幸雄　1997：324,324）。

＊五島方言のT：「（1）　入声音を含む促音/Q/が、語中語尾に盛んに現われる。/cuQ/（月）・/kuQ/（首）（略）無造作な発音における/Q/は、通常、喉頭閉鎖音[ʔ]で現われる。」(古瀬　昭和 58:194-5)。

上の九州各方言の違いから、「月」は「語末の狭母音にこの無声化がまず起こり，次に無声化した母音が脱落して語末に子音が残り，さらにこれが「ッ」に変化した」（木部　2011：192）と考えることができそうです。

そこで「月」の促音化を、次のように考えることができるでしょう。

長崎方言　　　　　　 　 山下方言　　鹿児島方言

tsuki-----→tsukị-----→tsuk------→tsuT

無声化　　　入声化　　　促音化

＊ị：iの無声化音（iの下に小丸o）の代用。

＊古代の「月」の変化については注8。

ところで薩隅方言の無声化がいつ頃起きていたのかを知ることができる資料の一つに薩摩少年ゴンザ42による『日本語会話入門』43（1736年）があります。

そこには母音の無表記とみられる次の3つの表記がみられます（江口　平成3：4）。

「①～＋子音＋（子音＋母音）＋～

例　41 kmo（雲）/98 ksa（草）など

②～＋（子音＋硬音符号）＋（子音＋母音）＋～

例　150 jebukъra（餌袋は）/258 fukъra（袋は）

③～＋（子音＋軟音符号）＋（子音＋母音）＋～

例　234 a′mь（網）」

＊江口氏は硬音記号を‘.’、軟音記号を‘,’、またアクセントを‘′’で代用されていますが、‘.’と‘,’は原綴りのъとьに戻してあります。以下も同じ。

上の①は母音がまったく表記されない場合、②は硬音符号ъを用いて母音を表記しない場合、③は「単語の語末や形態素の末尾のi母音相当の部分にのみ出現する形式」（江口　平成3：5）で、軟音符号ьを用いて母音を表記しない場合です。そこで江口氏はこれらの表記の違いを考察され、「『日本語会話入門』における母音の無表記と、現代九州方言における母音の無声化とが良く対応した状況を呈している」（江口　平成3：10）ことから、「ゴンザの諸資料にみられる母音の無表記は一部を除けば、母音の無声化を反映したものであろうと思われる。」44（江口　平成3：15）とされました。

このような母音の無表記を母音の無声化（脱落）とみる考えは、木部氏にも次のようにみられます（木部　2011：196）。

「（11）　dzigok（джигок，地獄，『露日』1章）

　 mocwo（мочво，餅を，『入門』228）（略）

（12）　komugь（комугь，小麦，『露日』8章）（略）

fičъ（фицъ，櫃，『露日』31章）（略）

surъ（суръ，する，露日ママ39章）（略）

このような表記は，ちょうど前節で見た（6）の変化（筆者注：「開く」はhiraku→hirat）の中間の段階（狭母音が無声化した段階，あるいは狭母音が脱落した段階）に一致している。つまり，ゴンザの資料は，18世紀初頭の薩摩語において狭母音の無声化や狭母音の脱落が既に起きていたということを表している。音節末の子音がさらに「ッ」や「ィ」や「ン」に変化するのは,この後ということになる原注＊2。」

ところが上の通説に疑問がわく、次のような記述がみられます（江口　平成3：8）。

「稀に「211 skno（少う）」「576 sъkno（少う）」「311 suknakaka（少なかか）」というように、同じ音節が「子音」のみ、「子音＋硬音符号」、「子音＋母音」というような表記のなされ方をする場合があるが、珍しい。」

このように上のスにたいしては、suとsъ、さらにsの3つの表記がみられます。そこで母音の無声化は当時のゴンザ（あるいは現在の我々）にとって感知することが難しいとみれば、su～sъ～sのような表記の揺れはあり得るかもしれません。しかしこのゴンザの資料に硬音記号ъや軟音記号ьといった「ロシア語の表記に抵触しないような表記が用いられるということは、むしろロシア語の表記法に極めて敏感なものの手になる事を示すもの思われ」（江口　平成3：8）ます。そこで上の資料にロシア人の強い関与があったとみれば、母音の脱落とみられる先の江口氏の①の例、ksa（「草」）の音はkusaではなく、ksaであったためにksaと表記されたとみるのが自然でしょう。このようにkusaとksaの音に違いがあったと考えると、スの表記（su/sь/s）は当時のゴンザが、あるいはsuで、あるいはsьやsで思いのままに書いたのではなく、ゴンザのスの発音をロシア人が正確に表記しわけたと考えることができるでしょう。そしてこのスの表記（su/sь/s）は当時のスの発音がsu（例：suknakaka）→sь（例：sъkno）→s（例：skno）のような変化の過渡期にあったことのあらわれとみることができるでしょう。しかし、もしゴンザの発音がその時々に（ロシア人が正確に表記しわけた）su/sь/sであったとするなら、スが有声母音のsuでもあり、無声化したsụや母音が脱落したsでもあるという、この発音の揺れはどのように考えればよいのでしょうか。そこで一般にはこのsuがsьやsと揺れることを無声化のあらわれとみて、母音の無声化が起こる条件は何かという方向に考察は進むでしょう。しかし、ここではこのような考えはやめて、ゴンザの発音の揺れを母音の無声化を表わしたものとは考えないことにします。前節でコリャードが「御座る」のルの母音を表記していないことを認めても、なおルの語尾ウが無声化していたとはみませんでした。そこでここでもゴンザのsu/sь/sの表記の揺れ（母音の無表記や脱落）を認めたうえで、その母音の無表記は何かと問うことにします。

次節では、この疑問を解くヒントとなる、チ・ツの破擦音化について考えることにします。

1. チ・ツはtʃi/tsになぜ変化したのか

日葡辞書ではタ行・サ行の発音は次のようになっています (土井・森田・長南編訳　1980：864)。

「サ　sa　シ　xi　　ス　su　　セ　xe　　ソ　so

タ　ta　チ　chi　 ツ　tçu　 テ　te　　ト　to

ダ　da　　　　　　　　　　 デ　de　　ド　do 」

このようにチがchi、ツがtçuで示されていることから45、当時のチ・ツの音価は「〔tʃi〕・〔tsu〕」（外山　昭和47：192）であったとみられています。

そこでキリシタン時代以前のチ・ツが外国資料で、どのように表わされているのかを、次にみてみます。

|  |  |  |  |  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- |
|  | A | B | C | D | E | F | G |
| 鶴林玉露 | 書史会要 | 伊路波 | 日本寄語 | 日本一鑑 | 日本風土記 | 捷解新語 |
| 1248年頃 | 1376年頃成 | 1492年刊 | 1523年刊 | 1566年頃成 | 1592年頃 | 1676刊 |
| チ | 口曰窟底 | ち啼又近低 | ち 디（ti） | 大刀　撻中 | 土　玆致ツチ | 口　骨止 | ち 지 ci |
| ツ | － | *川*土平声又近屠 | つ 두（tu） | 七　乃乃子 | 月　玆氣ツキ | 月　紫氣 | つ 주/쭈 cu/ccu |

A.羅大経著（羅大経　1990：人集　巻之四　日本國僧）。

B.陶宗儀撰（京大國語國文研編　昭和40.7：73,73）。「「底ママ・啼・低・土・屠」は、いずれも舌音に属する舌端破裂音である。」（外山　昭和47：192）。「*川*」はツの草体。

C. 『弘治五年朝 鮮 板伊路波』（京大國語國文研編　昭和40.7：3,3）。「ㄷはtに当る諺文である。」（外山　昭和47：193）。

D. 薛俊撰。「228大刀　濶中撻打奈（略）「撻中」はタチ、「濶打奈」はカタナとよめそうである。」/「328七　乃乃子　ナナツ」（濱田　昭和40.9：122,137）。「「水　明東」「靴　骨都」のごとく破裂音系の「東・都」などをも用いるばあいがあり、漸次、破擦化に向かっている状態を示したものではないかと思われる。」（外山　昭和47：193）。

E.鄭舜功編（木村晟編　1995：10,7）。「日本語のツ・ヅに対しては「玆」を、チ・ヂに対しては「致」を一律にあてている。「玆・致」は、いずれも破擦音を頭に持つ文字である。」（外山　昭和47：193）。

F.『全　浙兵制考日本風土記』（侯継高著；京大国語国文研編　昭和36：67,59）。「『日本寄語』の影響があると云われながら、チ・ツについては、ほぼ破擦音系の文字が用いられている。」（外山　昭和47：193）。

G1.『捷解新語』（康遇聖著；京大國語國文研編　昭和48：228）。「「ち・つ」に、いづれもtʃ・tsに当る諺文「ㅈ」を用いている」（外山　昭和47：193）。

＊これら外国資料については、「唐音に反映したチ・ツの音價」（有坂　昭和32：563-570）に詳しい。

そこで上の音訳字の変化から、「チ・ツ・ヂ・ヅの破擦音化は、十五世紀末より十六世紀へかけての比較的短期間に急速に進み、十六世紀末（キリシタン資料の時代）には、ほぼ大勢は破擦音となっていたと考えられ」（外山　昭和47：193）ています46。

ところでtiがtʃiに変化する口蓋化は世界中の言語にみられる変化ですが、tuがtsuに破擦音化したことに対しても、口蓋化とみる、次のような考えがあります（馬淵　昭和46：121）。

「（6） 『全　浙兵制考日本風土記』京都大学文学部国語学国文学研究室編の「音訳漢字表」によれば、日本語の「チ」を表わすのに「之」「知」を用いるが、「之」は精母[ts]の字であり、「知」は知母[t‘]の字であるからいずれもｔにくらべて口蓋化した音である。また日本語ツを現わすのに多用する「子」「紫」の字は、共に精母（ts）の字であるから、これも口蓋化していたとしてよい。」

このようにチの変化ばかりではなく、ツの変化も口蓋化とみる考え方が国語学者のなかにあるようです。しかし口蓋化は「第二調音として，前舌面が硬口蓋に向って[j][i]の場合のように，或はそれに近くもち上ること。」（服部　1951：134）をいいます。しかしツの母音は中舌母音のとみられているので、ツは口蓋化したということはできないでしょう。また「調音点もしくは調音法（あるいはその両方）の面で，子音が後続母音の特性に近づく方向へ変化」（窪薗　1999：79）することは同化といわれますが、このツの変化を同化で説明する考え方があります。

窪薗氏はチ・ツの変化を次のように考えられました（窪薗　1999：79—80）。

「b.[ti]歯（歯茎）閉鎖音＋硬口蓋母音→[tʃi]歯茎～硬口蓋破擦音＋硬口蓋母音  
「c.[tu]歯（歯茎）閉鎖音＋軟口蓋母音→[tsu]歯茎破擦音＋軟口蓋母音

上のbのチの変化は歯茎閉鎖音tが硬口蓋母音iに同化し、tがtʃに変化したとみればチは口蓋化したということができるでしょう。しかしcのツの場合、歯茎閉鎖音tが中舌母音(非口蓋化母音）に同化するのであれば、歯茎摩擦音sよりは、より奥の歯茎硬口蓋摩擦音ɕ（簡略表記ではʃ：後部歯茎摩擦音/ʃ/）47の方がより自然ではないでしょうか。そして、さらにもっと軟口蓋に近い硬口蓋摩擦音çまで近づいた（同化した）とみるなら、同化の定義（tu→tçu）により合うでしょう。そう考えるとtu→tsの変化が現実に起こったとしても、ツは同化の定義にあわない変化をしたといわねばならないでしょう。

ところでツの変化を上のような同化としては説明できないとの考えが48、馬氏の次の記述にみられます（馬　2015：11）。

「しかし、[]の調音器官は中舌面のため、齒茎音[s][z]よりは後部齒茎音[ʃ][ʒ]のほうがさらに[]に近い。 []による破擦音化であれば、[ʃ][ʒ]のほうが [s][z]より添加されやすいのではないか。一方、単に破擦音化の条件を狭母音に絞るとしても、その理由については明らかにされていない。近代朝鮮語では音節[ti][thi][t’i]は破擦音化して[tʃi][tʃhi][tʃ’i]に変化を遂げたが、音節[tɯ][thɯ][t’ɯ]は現代に至っても破擦音化しない。中国語でも音節[tu][thu][du]が破擦音化することはない。なお、母音の前後位置から考えて、前舌母音[e]を持つテ・デが破擦音化しないのに、ツ・ヅが破擦音化することも不可解である。

　要するに、チ・ヂの破擦音化は[i]の調音位置に相当する渡り音[ɕ][ʑ]が添加されたのに対し、ツ・ヅの破擦音化は[]の調音位置に相当しない渡り音[s][z]が添加されたという、調音音声学的に解釈しにくい問題が認められるのである（図4参照）。

【図4】

ヂ・ヂ：[ti][di] 　　渡り摩擦音の添加　 [tɕi][dʑi]

━━━━━━━━━━→

ツ・ヅ：[t][d] 　　渡り摩擦音の添加？　[ts][dz] 　」

このように馬氏が疑問とされたように、ツの変化（tu→ts）を硬口蓋化や先の窪薗氏が考えられた同化では説明することはできないでしょう。それではなぜツはこのような不思議な変化をしたのでしょうか。

この疑問にたいする馬氏の考えを紹介する前に、次節ではあまりなじみのない舌尖母音ɿについて、先にみてみることにします。

1. 舌尖母音ɿとは

舌尖母音「[ɿ]とは現行IPA(筆者注：国際音声字母)に収録されていない、もっぱら中国語音声音韻学に用いられる母音の音声記号」（馬　2015：2）です。

この舌尖母音ɿについてのカールグレンの記述を、馬氏の日本語訳から次に引用します（馬　2015：2）。

「舌尖母音はヨーロッパで珍しいが、中国の言語においては発達している。その一種は舌尖と歯茎前部との母音である。発音方法としては子音zを発音する際に舌と歯茎との隙間を広げ、口腔の摩擦を減らすということで容易に発せられる。（原著：294/訳本：197）」

＊舌尖元音（舌尖母音）：カールグレンの『中国音韵学研究』（趙元任ほか合譯　1995:197－200）。

またこの舌尖母音ɿ49は次のようにiと対立しています（馬　2015：2）。

「音声学的にはもちろん、音韻論的にも[ɿ]は『中原音韻』からその成立が確認され、現代方言では音節主音として、[i]とミニマルペアを成している。

北方方言（『中原音韻』）：思[sɿ]≠西[si]　　詞[tshɿ]≠斉[tshi]

呉方言（蘇州）　　　　　：思[sɿ]≠西[si]　　詞[zɿ]≠斉[zi]

客家方言（梅県）　　　 ：思[sɿ]≠西[si]　　詞[tshɿ]≠斉[tshi]文読 」

＊『中原音韻』（周徳清1324年）。

上の舌尖母音ɿは標準語のス・ツ（s・ts）の母音に近似していていると、佐久間氏は次のように述べられています（佐久間　昭和4：94）。

「北京官話の發音で「私・思・司・糸・死・四・寺」などは、ウェイドの記法ではssŭとされ、「姿・子・姿ママ・自・字」などはtzŭとされ、「疵・辭・此・次」などはt‘zŭとされてゐる（原注26）が、このŭを以て示されるものは、中舌母音〔〕に外ならない。（中略）もちろん「思・死・四」は〔s]と表記すべきものである。カルルグレンの支那音聲學に關する研究においては （原注27）、これを〔sï〕のやうに表記してゐるが、この母音〔ï〕には二とほりあつて、聽覺的印象は極めて類似してゐると述べ、（略）此の場合の〔ï〕の一つ（前者）はこの〔〕であり、他の一つは次に**說**くやはり中舌の〔ï〕であると思はれる。」

＊上文で、中略した記述は注50。

そして標準語のス・ツの母音と東北方言の中舌母音ïとの似かより51を佐久間氏は、次のように述べられています（佐久間　昭和4：95-6）。

「前舌母音「イ」の調音において、舌面と口蓋との接近が少くなり、同時に舌のさきはかへつて齒ぐきのうらに近くなり、そこにわづかのすきまをのこし、唇が〔〕におけるよりも一層開いて時としては「イ」の程度にも及ぶやうにすると、中舌母音〔ï〕が出來る。これはその調音域も中舌母音〔〕に近く、音色にも似たところがある。（中略）この際舌の縁が口蓋に近づくので、往々〔z〕樣の摩擦の「ひゞき」を伴ふにいたる。ゆゑに、「中舌母音」といふ名稱に拘泥すべきではない。

　中舌母音〔ï〕は、東京語にはまつたく現はれない。東北地方ではしばしば「イ」の代りに用ゐられる。その調音が〔〕に近く、その音色も相似てゐるところから、〔ï〕のかはりに〔〕があらはれ、かくて東北方言における「イ」と「ウ」との混同をきたすものであらう。（略）」

また琉球宮古方言にも中舌母音イがありますが52、その母音を舌尖母音ɿとしてはじめて記述された崎山氏は次のように述べられています（崎山　昭和38：7）。

「正確にいえば[s,z]を発する舌の位置で母音が発せられるので，非円唇舌尖母音を表わす音声記号[ɿ]を用いるべきである。（但し国際音声子ママ母にはない。）」

そしてこの宮古方言のɿの音響的特徴から中舌母音イではなく、標準語のス・ツの母音とみるほうがよいとの考えが、次のようにみられます（今石・三輪　平成元年：103）。

「平良市狩俣の母音で、何よりも注目されるのは、イの中舌母音と言われている発音の音響的特徴であろう。

　平良市狩俣で/Cï/とされている発音は、これを、イの中舌母音と認定するならば、本土部の発音にくらべるとF2が相当に低くなっている点に特色がある。むしろ、本土部のウの中舌母音に類似したものと言えなくはない。琉球方言の記述に中舌母音を[]で記した例をほとんど見ないが、この場合は、[ï]よりも[]のほうが適切ではなかろうか。」

ところで宮古方言の音声を最初に記述した言語学者ネフスキーは、宮古方言の中舌母音ïと東北・奄美方言の中舌母音との違いを、次のように述べています（ネフスキー　昭和2:44）。

[（上略）ï　mixed vowelで、日本東北方言の所謂「變的i」よりは少しback，大島（鹿兒島縣）のɨよりは稍frontである。（後者はロシア語ыに同じ。）]」

　＊この記述はかりまた　昭和61：58にみられますが、原書より引用しなおしました。

そこで、ここまでの記述から標準語イ・ウ53にたいする、各方言音との関係は次のようにみることができるでしょう。

前舌　　東北方言/宮古方言/奄美大島方言　平唇のウ　後舌

i--------------ï/ɿ（≒)/ɨ（＝Ы）---------ɯ-------u

＊ɿ：宮古方言のイ（≒)。ï：東北方言のイ。ɨ：奄美大島方言のイ（＝ロシア語のЫ）。：東京方言のス・ツの母音。ɯ：東京方言のス・ツ以外の母音（平唇のウ）。i/u：IPAの前舌・後舌母音。

このように標準語のス・ツの母音は東北・奄美方言の中舌母音に似ていますが、それ以上に宮古方言の舌尖母音ɿに似ているといえるでしょう。

そこで馬氏は標準語のス・ツの母音の調音的特徴54から、中舌母音とみるより「舌尖の調音関与のある母音であることを認めるべきである。」（馬　2015：5）として、次のような提言をされています（馬　2015：6）。

「日本語学においては、従来[]を使ってきたが、上の諸先学の研究から確認できたように、ス・ズ・ツの母音における舌尖と歯茎の間の狭めは奥舌と軟口蓋のそれより、ずっと狭いことが分かる。「舌と口蓋との最狭点」という母音の分類基準（筆者注：下注）から、ス・ズ・ツの母音を[]で表わすのは決して適切なことではない。[ɿ]という記号の使用によって、この母音の調音に対する認識を変えることは、外国人に対する日本語教育にとっても、重大な意味を持つのである。」

＊D.Jonesの母音の分類（　2012：53-4）に対する批判は注55。

そして日本語のス・ツの母音を中舌母音ではなく舌尖母音ɿとみなすことで、先に疑問としたツの破擦化を馬氏は次のように説明されています（馬　2015：12-3）。

「異音[ɿ]はツ・ヅの破擦音化の要因（先行条件）であったと考えられる。16世紀前半、音節ツ・ヅには子音[t][d]の順行同化によって、母音[ɯ]に異音[ɿ]が発生し、その調音位置が子音と一致するようになった。このような状況の下、[t][d]は[ɿ]に渡る際、破裂の呼気で舌尖と歯茎の間に渡りの摩擦音が起こり、ついにチ・ヂの破擦音化と同様に摩擦音[s][z]が添加されるようになった。さらに音変化が進むと、母音の無声化また脱落に至るのである。原注31）（表7）。

【表7】

|  |  |
| --- | --- |
| [i]による[ɕ][ʑ]の添加（＞無声化/脱落） | [ɿ]による[s][z]の添加（＞無声化/脱落） |
| [ti][di]>[tɕi][dʑi](>[tɕi][dʑi]/[tɕ][dʑ]) | [tɯ][dɯ]>[tɿ][dɿ]>[tsɿ][dzɿ](>[tsɿ][dzɿ]/[ts][dz]) |

＊引用は上表まで。

＊i/ɿの無声化はi/ɿで代用。また、その後の母音の脱落をあらわすとみられる、馬氏の記号はそれぞれɕ/ʑとs/zで代用。

上の馬氏の破擦化の考えを、筆者の理解によってまとめると、次のようになります。

|  |  |
| --- | --- |
| チ：ti→tɕi | tiのtがiに渡る際、摩擦音ɕが添加され、tiがtɕiと破擦化した |
| ツ：tu→tsɿ | tuのtがɿに渡る際、摩擦音sが添加され、tuがtsɿと破擦化した |

＊s：歯茎摩擦音/s/。ɕ：歯茎硬口蓋摩擦音/ɕ/。

そこでti/tuがi/ɿに渡る際、i/ɿの調音位置に近い摩擦音ɕとs56が添加されたと考えれば、チ・ツの破擦化を前節の窪薗氏の同化の考えよりはよりよい説明となるでしょう。

しかし、チがti→tɕiと破擦化することにたいして、尾崎氏の次のような強い非難があります（尾崎　昭和55：48,64）。

1．「またたとえばtが、後續する子音的なi介母によってに變えられるとか、また逆に、tは後續する母音aによってṭに變えられるとか、音韻史家はいつも、いとも簡単に言ってみせるのだが、もともとtが舌尖性の強いものであるなら、それにi介母がつづいたにしても、それがに變ることはあり得ない、というよりも、むしろそれはi介母の後續をきらうかも知れないし、またそういうtならば、何がつづかなくとも、そのままṭ、少なくともその一種なのだということもできる。（略）」

2．「tがi介母の後續によって「變る」とすれば、それはtiへであって、それ以外のものへではない。」

そこでti/tuにそれぞれɕ/sが添加されtɕi/tsɿ（≒ts）になったのが事実とすれば、tはtiにしか変わらないという尾崎氏の強い非難はどのように考えればよいのでしょうか。この非難をのりこえるためにはti/tu→tɕi/tsɿとみえる変化を満足させるアイディアが必要でしょう。

1. 母音の無声化とみられたものは何か

ここまで語末母音の無表記は母音の無声化を表わしたものでないとみてきました。それでは語末母音の無表記は何を意味しているのでしょうか。

そこで語末母音の無表記とは何かを考えるために、もう一度、幕末～明治初期の各種刊本の語末母音の表記を次にみてみます。

|  |  |  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- | --- | --- |
|  | | 馬氏の引用書 | ス | ツ | 他段のウ |
| 西洋人が聞いた ス・ツ | | W.H.Medhurst1830 | soo(s’) | tsoo(ts’) | -oo |
| S.R.Brown1863 | sz(s’) | tsz(ts’) | -u |
| ヘボン手稿（1867以前） | sz(s’ s) | ts(ts’tsz tz) | -u |
| 中国語のɿ | 官話 | S.W.Williams1874 | 思sz’ | 資tsz’ | － |
| 粤方言 | S.W.Williams1842 | 思sz’ | 資tsz’ | － |
| 呉方言 | J.Edkins1868（上海） | 思sz | 資tsz | － |
| 明治期の中国人向けの 日本語教科書のɿ/ ʅ | | 右記の語の引用書名は不明 | [ɿ] ： ス（斯司） | [ɿ] ： ツ（資子次此） | [u]： ク（古） |
| 明治期の日本人向けの 中国語教科書のɿ | | 右記の語の引用書名は不明 | [ɿ]：糸（ス） | [ɿ]：子（ツ） | [u]：古（ク） |

＊上記・下記の書は筆者未見のため、書名・語例などは馬氏（馬　2015：7-10）のものを重引しました。

＊メドハースト（『英和・和英語彙』）：「ノコラズnokoraz’（略）」（馬　2015：8）。

＊ブラウン（『会話日本語』）：「ウ段音のうちス・ツ・ズ（ヅ）にあたる部分のみをsz,tsz,dzと綴って、母音字uを用いていない。」（高山倫明　2012：38）。

＊ヘボン（J.C.Hepburn）手稿：『和英語林集成』（1867年初版）以前のもの。

また明治前後のズ・ヅとジ・ヂにたいする表記には、次のような違いがみられます（馬　2015：7-8）。

「メドハーストの音節表には濁音ズ・ヅがzoo、dsooとされているが、本文にはz’、ds’と書かれることも多い。これに対して、ジ・ヂの綴りはzi、dsiに一定しており原注15）、母音が省略されない。オールコットとジャイルズの綴りも同様であり、ブラウンの著書と共通する。）。

　『英和・和英語彙』：ノコラズnokoraz’（略）

　『日常日本語対話集』:マヅmadz（略）

　『華英辞書』：酢sz（略）」）。

＊上から、メドハースト（1830年）、オールコット（1863年）、ジャイルズ（1892年）。

そして「ローマ字綴りは一定せず、ただ外国人に分かりやすく、すぐ使えるという目的で作られた」（馬　2015：8）とみられる、アトキンソンの横浜方言には次のような表記がみられます（馬　2015：8）。

「Arimas（アリマス）、Skoshe（スコシ）、Meeds（ミヅ）（中略）Watarkshee（ワタクシ）、Watarkoosh’（ワタクシ）、（略）Onadge（オナジ）、Coachy（コッチ）」

　＊『Exercises in the Yokohama Dialect』（Atkinson1879年）

さらにブラウン（『会話日本語』1863年）とロニー（『日本語教程入門』1872年）には、次のような記述がみられます（馬　2015：7,8）。

1．「szはsとzを間を置かずに結合しただけである。tszはこれら三文字を結合したにすぎない。 sz、tszはどちらも最後のzの後には母音がない。zの音が必ず音節の終わりに来るのである。これが、少なくとも江戸と神奈川の発音である。（加藤・倉島　1998：337）」

2．「ロニーは日本語の母音が時に短くなることを指摘し、そこで「字母ts,dz,s,zの後に来るuは常に短くなる」原注16 ）と注釈している。」

そこで、上で母音がないとか短くなるとかいわれた語末母音について、馬氏は次のように考えられました（馬　2015：7）。

「「zの後には母音がない」というのは[ɿ]に対する認識がないためであろう。（改行）母音のない綴りは、単に母音の無声化または脱落とされている原注13」。（筆者補：ヘボンの）手稿ではシとチにそれぞれshi（sh sh’）とchi（ch ch’）の綴りを使っている。（略）しかし、ス・ツにおいては母音uが一切表記されていない。（略）こうしたブラウンとヘボン（手稿・初版）の綴りはスなどの母音が[z]に近似する[ɿ]であることを物語っているのではないか。」

このように馬氏はブラウンの語末のsz/tszの表記をzに近似するɿであろうとみられました。また第12節で「その音節の終わりの方がまだのどに残っているように…」（宮島　昭和36：43）とのメドハーストの記述を紹介しました。そこでその記述をすなおに読めば、その音節末には何もないのではなく、微細な何かがあると考えることができるでしょう。そしてその語末の微細な何かを母音に似たzであったとみれば、そのzは舌尖母音のɿであったと考えることができ、語末母音が表記されていないとみられた、szやtszはsɿやtsɿであったと考えることができるでしょう。そこでコリャードの「最後の母音は初學者には殆んど聞き取れない。例えばoàuを聞く場合gozàrと聞こえ、…」（コリャード　昭和9：6）の記述を当時の「御座る」の語末のウが無声化していたとみるのではなく舌尖母音ɿであったとみれば、コリャードはその語末母音ɿの聞き取りがうまくできなかったために語末のウを表記しなかったと説明できるでしょう。

1. キリシタン時代の舌内入声はtɿだった？

前節では「御座る」にたいするコリャードの表記gozarは無声化を表わすものではなく、舌尖母音ɿをもつgozarɿであったと考えました。そこで今度は日葡辞書にみえる漢語「仏事」の表記ButjiとButçuji（土井・森田・長南編訳　1980：68,67）の関係を考えることにします。

この入声形Butjiと開音節形Butçujiの関係は、次のようにみられています（土井・森田・長南編訳　1980：854）。

「別条Qiatatçu（脚榻）の条にQiatatと言う方がまさると注し，Itonami,u（営み，む）の条にButçujiよりもButjiの方がまさるとしているから，規範的には入声形を正しいとしながらも，話し言葉では開音節化の傾向が次第に進んでいたものらしい。」

上の記述からキリシタン時代の「仏」は入声形Butから開音節形Butçuへの変化の途上にあったとみると、このButとButçuの二つの音声を音韻としてどのようにみるかという問題がでてくるでしょう。  
　この問題にたいして濱田氏は次のように考えられました（濱田　昭和58：94－5）。

「一方私の推定による第二の形[tsu]は、勿論一般の「つ」の音節と同じく/tu/と解することも可能であろうが、しかし、まだこの時期においては上述の如く「」の様な連声が一般に行われていたとすれば、服部博士の所謂「作業原則」に従って、[t]のものと同じく、これもやはり/T/と解してもよいのではないかと思う。要するにこの時期は[t]から現代語の[tsu]に移行する過渡期であって、問題は、この様な過渡期の音韻をどう解釈するかという一般的な原則論にまで持ち込まざるを得なくなる。（略）」

このように濱田氏は[t]と[tsu]の二つの音声を音韻/t/と/tu/ではなく、ただ一つの音韻/T/のあらわれとみられたようです。そこで音韻/T/の音声的実現が入声のt（[t]）とツ（[tsu]）とみることのできるアイディアを探すことにしましょう。

前節で「御座る」の語末母音の無表記は母音の無声化をあらわしているのではなく、そこに舌尖母音ɿがあったとみました。そこで漢語「仏」（but）の語末母音も不分明で微細な舌尖母音ɿであったため、漢語「仏」の語末母音は表記されなかったと考えてみます。するとその語末の聞こえがより不分明であった時には漢語「仏」はbutとして聞きとられ、その聞こえがいくらか明瞭であった時にはbutɿとして聞きとられたと考えることができるでしょう。そこで日葡辞書の編者であるキリシタン宣教師たちは漢語の規範形として「仏」をbut、またbutɿであった口語の「仏」をButçuとして、異なる表記をしたとみることができるでしょう57。

ここで入声Tについてのロドリゲスの記述（第9節）をもう一度次に引用します（ロドリゲス　昭和30：642,231）。

1.「日本のことばはすべて母音か子音のN，Tかに終ってゐる。」

2.「〇ある綴字でTに終るものは，日本では‘つ’（Tçu）の綴字に当るのであって,そのTを‘「詰字」’（Tçumeji）と呼ぶ。さうしてT そのものを写す文字がないので，Guatと書くべきを‘ぐわつ’（Guatçu）と書く。」

上で漢語「仏」の語尾の母音は不分明で微細な舌尖母音ɿであったと考えたので、当時のキリシタン宣教師たちは「仏」と同じように漢語「月」の末尾母音をうまく聞きとることができなかったとみられるでしょう。そこで当時のツがtɿであったとみれば、ロドリゲスの上の「月」（Guatɿ）にたいする記述は、「tɿ（＝T）そのものを（我々宣教師には）写す文字がないので、Guatɿ（＝Guat）と書くべきを‘ぐわつ’（Guatçu）と書く。」と読むことができるでしょう。このようにロドリゲスの上の記述を虚心に読めば、先の濱田氏がだされた「tからtsuへの過渡期の二つの音声を音韻としてどのように解釈するのか」という難しい問題はツを[Guatɿ]と考えることで、音韻/Guatɿ/の音声的実現が[Guatɿ]であり、また[Guat]でもあると無理なく説明できるでしょう。

1. 重刊改修捷解新語の「せつつ」の表記を考える

重刊改修捷解新語の「せつつ」の表記を考えるために次の資料から引用します。

|  |  |  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- | --- | --- |
|  | 日葡辞書 | 捷解新語 | 重刊改修捷解新語 | ハングル音注の変化 | |
| 1603年刊 | 1676年刊 | 1781年刊 |
| せつ | Xet（節） | 셰쭝 syəi ccuŋ | 셰쯔 syəi ccɨ | ccu→ccɨ | ccɨ→t cɨ |
| せつつ | － | － | 셷즈 syəit cɨ |  |
| 御てんひつ | Denpit（伝筆） | ᅁᅩ뎐비쭈 ŋko tyən pi ccu | － |  | ccu→t cu |
| たひつ | Tafit（他筆） | 다빋주 ta pit cu | － | t cu→t cɨ |
| たひつつ | － | － | 다힏즈 ta hit cɨ |  |
| けつく | Qeccu（結句） | 겯구 kyət ku/격구 kyək ku | 곋구 kyəit ku | kku→k ku→ku（下注） | |

＊以下の説明が理解しやすいように「つつ」の初めの「つ」と「けつく」（「結句」）の「つ」には下線を引いてあります。

＊日葡辞書：「Xet.セ***ッ***（節）」「Denpit.デンピ***ッ***（伝筆）」「Tafit.タヒ***ッ***（他筆）」「Qeccu.ケック（結句）」（土井・森田・長南編訳　1980：756,184,601,479）。

＊捷解新語と重刊改修捷解新語：

「せつ/せつつ」（「節」）；京大國語國文研編　昭和47：14上/-；257下/64下。

「*御*てんひつ」（「御伝筆」）；同書：361上。

「たひつ/たひつつ」（「多筆」）；同書：371上/367下。

「けつく」（「結句」）；同書： 221上,295上/221下。

＊捷解新語の「」は셔쭈（syə ccu；上書：334上）と音注されていますが、ここは셰쭈（syəi ccu）にもどし、以下、この셰쭈を用います。ほかに捷解新語には「　읻빋（’it pit）」（同書：356上）もみられます。

＊捷解新語には「」の音注には「도가구」（to ka ku）/「도각구（to kak ku）/「도가꾸」（to ka kku）（同書：252上,354上,301上）がみられます。

さて捷解新語から重刊改修捷解新語への表記の変化は上表の右項に簡略に示しましたが、本文かなのツとツツの違いは「」ではccɨ/t cɨ、また「」では「御伝筆」のccuと「多筆」のt cuとなっています。そして本文かなのツとツツの違いは第10節で紹介した「有り」に助詞テが後続する、「あて」（아뗴 ’a ttyəi）と「あつて」（앋뎨 ’at tyəi）（京大國語國文研編　昭和47：245上,195上）の違いに対応しています。そこで「節」や「御伝筆」のccu/ccɨの並書表記はツの先祖、「節」（セツツ）の●ㄷ즈（t cɨ）や「多筆」（タヒツツ）の●ㄷ즈（t cɨ）の音節末のㄷ（t）と「結句」（ケツク）の구（k ku）の音節末のㄱ（k）は促音ツ（/Q/）の先祖ツとみることができるでしょう58。

ところで亀井氏は第10節で、捷解新語の並書（初声を重ねる）表記にたいして、「声門の破裂（glottal explosive）の音」（亀井　昭和 59：367) を想定されました。また濱田氏も注29の記述にあるように、「glottal stopを伴う[ʔtsu]もしくは [ttsu]の様な音」（濱田　昭和58：92）と考えられました。

さらに重刊改修捷解新語の「」や「」（「つ」の下線は引けないため）が셷즈（syəit cɨ）や다힏즈（ta hit cɨ）と音注されていることから、安田氏は次のように考えられました（安田　昭和48：298）。

「cɯの前の「つ」（t）は、舌内入声韻尾が本来有していた声門閉鎖的要素の独立した形のものと言うべきであり、ccɯと機能的に等価値であろうと考えたいのである。舌内入声韻尾のみならず、一般の「つ」にも、同様のことは言えるはずである。」

　　＊「つ」の下線は筆者。

そこでこれら亀井・濱田・安田各氏の推察から、当時のツは第10節で考えた喉頭化音（CʔV）であったとみることができるでしょう。また前節でキリシタン時代の「」（ŋïuʌt）の語末は舌尖母音のɿであったと考えました。そこで当時のツは喉頭化音であり、その語末は舌尖母音ɿであるcʔɿであったと考えることができるでしょう。また促音（/Q/）の先祖をqと考えると、t cu/t cɨと音注されたツツの音はqcu/qcɨとみることができ、「節」のセをローマ字でseと書けば、キリシタン時代の「」の発音はsecʔɿ、セツツはseqcɨと考えることができるでしょう59。

1. 『狂言記』の「まつする」の表記を考える

ここまで捷解新語と重刊改修捷解新語にみられる「」「」のハングル音注について考えました。そこで次は日本語文献にみられる、『狂言記』（流布は元禄 12 /1699 年）の「まつする」の表記を考えることにします。

ところで標準語の「知りません」は熊本方言では「知りまっせん」といわれ、次のような特徴がみられます（秋山　昭和58：220）。

「熊本方言の、知リマッセン・取ルマッセンの促音は語史（中世末のマラス）との関係があるが、それを除いても、ソギャンデッショ（そうでしょう）、ソギャンジャゴザッセンバイ（そうではありませんよ）など（印象風な記述が許されるなら）、拗音・促音・撥音が連続して、はずみのついた音連続であり、一拍ごとにツブを立てる律儀なものとはちがうかと思われる。」

また狂言記の「まつする」と熊本方言の「知りまっせん」の関係については次のような考えがあります（森田　1977：259/亀井　昭和61：395）。

1．「（上略）虎清本狂言に、（改行）いやみゝが。もちぎれまつするまつする（「蟹山伏」）（改行）とあり、今日の熊本方言で、「知りまっせん」「行きまっしょ」などと言う「まっする」になる前段階を示すものと見られる。これらによれば、母音の無声化は、十六世紀末にその兆が現れたらしい。（略）」

2．「（上略）やがてma-r-su-ruを経て、ma-s-su-ruの段階に達したのである。この「まつする」の促音が脱落すれば、「まする」の形に到達する（原注4）。」

そこで「まゐらする」から「ます」への変化は次のようにみられるでしょう（鈴木一彦　1990：235/小松　昭和56：322）。

1600年　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　1700年　　　　　　　1900年

日葡辞書　　　　　　　　日葡辞書　　捷解新語　 狂言記　　重刊改修捷解新語　明治

Mairasuru　 　　　　　　Marasuru　　마루수루　　まつする　마쓰루　 　 ます

1．「まゐらす→まゐらする--→まらする→（まるする）→まっす-→｟まする｠-→ます」

2．「mawirasuru ＞mairasuru ＞marasuru ＞marusuru　＞massuru　＞masuru 　＞masu」

＊上の1と2の表記は上下の語を対応させてあります。「まゐらす/まゐらする」は鈴木氏の記述のまま。

＊狂言記の「まつする」を鈴木氏の「まっす」に、小松氏のmarusuruを捷解新語の「まるする」に対応させ、亀井氏の重刊改修捷解新語の「まする」を｟　｠内に補筆。

＊各書の編刊年などは省略し、おおよその西暦年を書いてあります。

＊捷解新語の「마루수루」：（marusuru;：京大國語國文研編　昭和47：12上）。捷解新語の「ᅁᅩᅀᅡ리마쓰루」（ŋko za ri ma ssɨ ru；同書：30下）/ᅁᅩᅀᅡ리마쓰」（ŋko za ri ma ssɨ；同書：19下）。

＊日葡辞書には「Mairasuru（参らする）/Marasuru（まらする）」（土井・森田・長南編訳　1980：380,386）がみられます。

上の変化式は諸資料を使ってたいそう理にかなった方法で「まゐらする」から「ます」への変化を説明しているようにみえます。そこで「それにしても、数百年の間に、「まゐらす（る）」が「ます」にまで縮まってしまうとは、よくも姿を変えたものである。」（小松　昭和56：322）との感慨がでてきても不思議はないでしょう。しかし上の変化式には少々腑に落ちない点があります。

そこで「ま（ゐ）らする」「まする」「ます」の各語の変遷を次にみてみます（亀井　昭和61：396,395,393/鈴木一彦　1990：235）。

1a．「大蔵虎清が正保三年（筆者注：1646年）にその子に書かしめて自ら補訂した古伝書原注（5）においては、いまだ後の「ます（る）」は殆ど現れず、もっぱら「まらする」を用ゐてゐる。（下略）」

1b.江戸初期には「（上略）やうやく口語の上では「まいらする」の方は用ゐられなくなったので、（略）」

1c.「この「まらする」といふ語は、すでに元禄（筆者注：1688-1704年）ごろには一般の口語からは廃れてゐたものであった。」

2．「前期上方語では、終止形・連体形に、「ます」と「まする」、命令形に「ませ」「ませい」があった。後期江戸語では、「まする」はほとんど使われず、命令形に「ませ」と「まし」があった。」

上の記述から概略、江戸以前は「まゐらす（る）」、江戸初期は「まらする（まるする）」60、中期（上方）は「まする」と「ます」の混在、後期は「ます」が主に使用されていたと考えることができるでしょう。

また「まらする」の変化については次のような考えがあります（日本大辞典刊行会編　昭和50（第18巻）：443）。

「まら・する〘他サ下二・サ変〙（動詞「まいらす（参）」の変化したもので、本来は下二段活用、終止形は「まらす」のはずであるが、室町時代末ごろ連用形に「まらし」の形も現われ、サ行変格活用としても用いられ、終止形も「まらする」が普通となった）（以下略）」

そこで「まゐらす/まゐらする」（終止形/連体形）が連体形の「まらする」（捷解新語は「まるする」）に、そしてさらに「まする」（連体形）に変化し、その後現代の助動詞「ます」（終止形）になったとみられています。しかし小松氏自身「まゐらする」から「まらする」への変化にたいして、「なぜ、ここで母音[i]が脱落したのかを、音声的な理由づけをもって説明するのは困難である。」とされ、その後の「まらする」から「ます」への変化についても「不思議な変化の式であることに変わりがない。」（ともに小松　昭和56：322）と匙を投げておられます。このように「まゐらす（る）」から「ます」への不可解な変化、また重刊改修捷解新語の「～まする」（～마쓰루）や「～ます」（～마쓰）に声門閉鎖音（/ʔ/）が発生していること、さらには「まする」から「ます」への変化における「る」のあまりにも短期間の、完全な消失など疑問がでてきます。  
　ところで日葡辞書（1603年）には「まらする」、捷解新語（1676年刊）には「まるする」（마루수루）がみられるのですが、これらの語は同時代語とみてよいでしょう。しかし日葡辞書には「まらする」、捷解新語には「まるする」だけの表記がみられ、どちらの資料にも「まらする」と「まるする」の混在がみられません。そこでこの混在がみられないという事実から、小松氏が考えられたmarasuru＞marusuruの変化はなかったのではないかとの疑念がわいてくるでしょう61。このような疑念がわいてくると、狂言記の「まつする」が重刊改修捷解新語の「まする」に変化したのは本当なのかという疑問がでてくるでしょう。

ここでアビラ・ヒロンのmarsuruの表記にたいする、土井氏の考えを次にみてみます（土井補注　1965：661）。

「アビラ・ヒロンがmarsuruと書いた語中のrは語尾のruと対照して、音節ruの略記と見るよりは、u母音が弱体化して、「まるする」から「まする」へうつる過程の一段階を示したものと解してよいのではなかろうか。」

＊アビラ・ヒロン：『日本王国記』の著者。少なくとも1619年までは生存（岩生・佐久間　1965：27）。

ところで第17節では「御座る」、また第18節では漢語「月」の語末母音は聞こえが不分明で微細な舌尖母音ɿであったと考えました。そこで捷解新語の本文かなの「まる1する2」（마루1수루2：maru1suru2）の「る1」の母音も聞こえが不分明で微細な舌尖母音ɿであったとみれば、アビラ・ヒロンはその「る1」の母音ɿの聞きとりに困難を感じ、marsuruのように表記したと考えることができるでしょう。また捷解新語の마루1수루2の루1 （ru1）と수（su）の母音は同じ우（’u）で音注されているので수もsɿと考えてみます。そして重刊改修捷解新語の「御さりまする」（ᅁᅩᅀᅡ리마쓰루）と「御さります」（ᅁᅩᅀᅡ리마쓰）の「す」はどちらも쓰（ssɨ）と並書表記されているので、第10節で考えたようにこのスを喉頭化音のsʔɿと考えてみます。

そこで先の「まつする」から「まする」への変化を次のように考えることができるでしょう。

捷解新語　　狂言記　　 熊本方言　　　重刊改修捷解新語　　　　 標準語

かな表記　　：まるする--→まつする-→まっする---→まする------------→ます

ハングル表記：마루수루　　　　　　　　　　　　 　 마쓰루/마쓰

翻字　　　　：marusuru---------------------------→massɨru→massɨ---→***masu***

発音　　　　：marɿsɿru--→maqsɿru---→maQsɿru----→masʔɿru→masʔɿ----→mas

＊***masu***はローマ字綴り。

＊q：促音Q（/Q/）の先祖。ここでは「まつする」の後裔が「まする」とみてあります。

上の変化式でわかるように、捷解新語の「まる1する2」（마루1수루2：marɿsɿru）の「る1」（루ru）が消失し、重刊改修捷解新語では喉頭化音の「まする2」（마쓰루：masʔɨru）から「ます」（마쓰：masʔɨ）に変化しています。そこで先に狂言記の「まつする」にたいする、森田氏の「母音の無声化は、十六世紀末にその兆が現れたらしい」（森田　1977：259）との考えを認めると、「まする2」の「る2」（ru）の変化はru →rụ（ru の無声化）→r（uの消失）→ø（ø：rの消失）と考えられます。しかしこのような「る2」（ru） の無声化と消失がごく短期間に起こったと考えるのは難しいでしょう。

ところで前節では重刊改修捷解新語の「節」の本文かなの「せつ」のツと「せつつ」のツツの変化をccu→t cu/ccɨ→t cɨとみました。

そこで重刊改修捷解新語の「御さります」の「す」（쓰ssɨ）にも同じ変化を考えると次のようになるでしょう。

本文かな　　：ス---→ツス--→ッス

ハングル表記：ssɨ--→t sɨ--→***ssu***

発音　　　　：sʔɿ--→qsɿ---→Qsɿ

＊***ssu***はローマ字綴り。q：促音Q（/Q/）の先祖。

そして狂言記の「まつする」の後裔が「まする」（→「ます」）とみる考えを改め、重刊改修捷解新語の「まする」の後裔が狂言記の「まつする」であると考えなおすと、次のような変化を考えることができるでしょう。

捷解新語　　　重刊改修捷解新語　　狂言記　　　　助動詞/熊本方言

マル1ス　　　マス　　　　　　　　　　　　 マス

1. 終止形:marɿ1sɿ-----→masʔɿ ---------------------→masɿ（標準語）

2. 連体形:marɿ1sɿru2--→masʔɿru2-----→maqsɿru2-----→maQsɿru2（熊本方言）

マル1スル2　 マスル2　　　 マツスル2　　 マッスル2

＊Q：促音（/Q/）。q：促音Qの先祖。

＊rɿ1sɿ→sʔɿの変化については注62。

1. 世阿弥の小書きの「ッ」について考える

全　浙兵制考日本風土記の「」にみえる「設子」の音注について考えるために、次の資料から引用します。

|  |  |  |  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- |
|  | | 世阿弥 | 伊路波 | 日本風土記 | 日葡辞書 | 捷解新語 |
| 1418,1427年 | 1492年刊 | 1592年ごろ刊 | 1603年刊 | 1676年刊 |
| 節 | せつ | セッ | － | 設子 | Xet | 셰쭝（syəi ccuŋ） |
| 何時 | いつ | － | 五이두（’i tu） | 一子 | Itçu | 이쭈（‘i ccu） |
| 結句 | けつく | ケック | 内우디（u ti） | （結西：） | Qeccu | 겯구（kyət ku） |

＊二重下線は筆者。（　）内は翻字。셰쭝（syəi ccuŋ）は以下、셰쭈（syəi ccu）を使用。

＊『松浦の能』（世阿弥著1427年）：「」（岩淵　昭和52：60）。

＊『花習内抜書』（世阿弥著1418年奥書）：「」（同書：221）。

＊『伊路波』：「五이두」「内우디」（京大國語國文研編　昭和40.7：4,10）。

＊『全　浙兵制考日本風土記』：「中秋阿金那設子 あき*の*せ*つ*」「冬至伏由那設子 ふゆ*の*せ*つ*」「一子何時」「結西 け志」（京大国語国文研編　昭和36：60,60,82,68）。「結句」は「結西」（）で代用。

＊『日葡辞書』：「Xet.セ*ッ*（節）」「Itçu.イツ（何時）」「Qeccuケック（結句）」（土井・森田・長南編訳　1980：756,345,479）。また「Xetbun.セ*ッ*ブン（節分）」（同書：756）。

＊捷解新語：「셰쭝/이쭈/겯구」（京大國語國文研編　昭和47：14上,265上,221上）。また「　셔쭈（syə ccu）/　격구（kyək ku）/　셷구（syəit ku）」（同書：334上,295上,104上）。

＊「節」：精母屑韻4等入声tsiet。「設」：審母薜韻3等入声ʃɪɛt。「子」：精母止韻4等上声tsiei。

上表をみると全　浙兵制考日本風土記では「中秋」（」）の「」の音注は「節」ではなく「設子」となっています。また第18節で「月」の語末を入声のtではなく微細な聞こえを持つ舌尖母音ɿとみました。そして上の捷解新語の「」は「이쭈」（’i ccu）と並書表記されていることから、当時のツは舌尖母音ɿをもった喉頭化音cʔɿとみられるでしょう。そうみれば日本風土記の「節」の音注「設子」はsecʔɿ（セはローマ字で代用：注68）とみることができるでしょう。

次に世阿弥（1363-1443）の小書きの「ッ」について考えることにします。

世阿弥自筆謡本の『松浦の能』などには通常のツ文字と違う小書きの「ッ」63が次のようにみられます（岩淵　昭和52：60）。

「世阿弥自筆の謡本を見ると、たとえば『松浦の能』には、入声tが三か所見えているが、いずれも、ツの小字で記していて普通のツとは区別していたように思われる。（以下、文例は略）」

＊省略した文例のなかに「ジセッモ」(「時節も」)、「ゲダッブク」（「解脱服」）、「ブックヮヲ」（「仏果を」）の三語がみられます。  
＊以下、世阿弥の小書きの「ツ」には「***ッ***」（ゴシック太字斜体）を使います。

上の「」のッは現在のツに、「」のッは促音のツ（/Q/）になっています。そこで捷解新語と重刊改修捷解新語の本文かなのツ→ツツの変化はccu→t cu/ccɨ→t cɨ（翻字）となっているので、発音の変化をcʔɿ（***ッ***）→qcɿ（ツツ：qはQの先祖）→Qcɿ（ッツ：Qは促音）と考えることができるでしょう。また第15節ではキリシタン資料以前の『書史会要』（1376年頃成）や『弘治五年朝 鮮 板伊路波』（1492年刊）などのチ・ツはいまだ閉鎖音tであったとみる通説を紹介しました。そこで伊路波以前の「松浦の能」の「」のッは捷解新語のような破擦音のcʔɿではなく、歯茎閉鎖音のtʔɿとみてみます64。

そう考えなおすと、室町時代のツの変化を次のように考えることができるでしょう。

室町時代　　 江 戸 初 期　　　　　　　　江　戸　後　期　　 　　　　 現在

ツ：tʔɿ（***ッ***）----→cʔɿ（ツ） ---------------------------------------------→cɿ（ツ）

『松浦の能』　全　浙兵制考日本風土記・捷　　　　　　　重

セ***ッ***「設子」/셰쭈（セツ・syəi ccuŋ）/셰쯔（セツ・syəi ccɨ）　セツ

ツツ　　　　　　　　　　 다빋주（タヒツ・ta pit cu）/다힏즈（タヒツツ・ta hit cɨ）

促音ツ：***ッ***------------→cʔɿ（ツ）-----→qcɿ（ツツ）---→qsɿ（ツス）→Qsɿ（ッス）

　　　　『松浦の能』　　（捷）　　　　　（重）　　　　　 狂言記　　　 熊本方言

　ケツク　　　　겯구（kyət ku） 곋구（kyəit ku）「まつする」 「まっする」

＊q：促音Q（/Q/）の先祖。捷/重：捷解新語と重刊改修捷解新語の略。

＊ここでは捷解新語の쭈（ccu）と重刊改修捷解新語の쯔（ccɨ）はcʔɿ（ツ）としてあります。

そこで上のような変化を想定すると「まるする」から「ます」への変化を次のように考えることができるでしょう。

松浦の能　　捷解新語・アビラ・ヒロン　重刊改修捷解新語　 狂言記　　現代

表記：「ジセ***ッ***」　まるする　　marsuru　　 　まする　　　 まつする　ます（る）

翻字：*jisetʔɿ*----→marusuru--→marsuru----→massɨru----→*massuru*-→*masu（ru）*

発音：matʔɿsuru--------→marɿsuru---------→masʔɿru----→maqsɿru -→mas（ru）

＊日本語文献はローマ字による翻字（斜体）。

＊説明の便宜上各資料の表記を寄せ集め、また前節の「まるする」から「ます」への変化も見やすさを優先させるために終止形と連体形の変化を合体させてあります。

＊今は『松浦の能』の「***ッ***」はtʔɿ、捷解新語の「마루1수루2」（marusuru）の루1（ru1）をrɿと考えてあります。

1. ツの破擦音化はいつ起きたのか

前節では世阿弥の『松浦の能』（1427年）の小書きの***ッ***（tʔɿ）からの変化をtʔɿ（***ッ***）→cʔɿ（쭈ccu：捷解新語）→cʔɿ（쯔ccɨ：重刊改修捷解新語）と考えました。

そこで今度は次の中国語資料からチ・ツの破擦音化をみてみることにします。

|  |  |  |  |  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- |
|  | A | B | C | D | E | F | G |
| 書史会要 | 松浦の能 | 伊路波 | 日本考略 | 日本館訳語 | 捷解新語 | 重刊改修捷解新語 |
| 1376年頃成 | 1427年 | 1492年刊 | 1523年刊 | 1549年頃まで | 1676年刊 | 1781年刊 |
| 表記（翻字） | *川*土平声又近屠 | ***ッ*** | 두（tu） | 子・禿 | 都・祖 | 쭈（ccu） | 쯔（ccɨ） |
| 推定音 | thu | tʔɿ | tu | [tsɿ],[thəʔ] | [tu],[tsu] | cʔu | cʔɿ |

＊A：京大國語國文研編　昭和40.7：73。「*川*」はツの草体。「土」は姥韻1等上声tho。

＊B：「」（岩淵　昭和52：60）。「***ッ***」はとりあえずtʔɿと考えておきます。

＊C：『弘治五年　朝鮮板伊路波』：「이두」（’i tu；京大國語國文研編　昭和47：4）。

＊D/E：馬氏より上の各2語のみ引用（馬　2015：12,12）。

＊F：「ひとつ비도쭈」（phi to ccu；京大國語國文研編　昭和47：35上）。

＊G：「ひとつ히도쯔」（hi to ccɨ；同書：69下）。

次に上の資料にみえるチ・シとツ・スの音注をみてみます。

|  |  |  |  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- |
|  | 上代 | 室町初期 | 江戸初期 | | 江戸後期 | 現在 |
| 古事記 | 伊路波 | 日葡辞書 | 捷解新語 | 重刊改修捷解新語 |  |
| 712年 | 1492年刊 | 1603年 | 1676年刊 | 1781年刊 | 2019年 |
| チ | 知（ṭɪe） | 디（ti） | Chi | 지（ci） | 지（ci） | chi（tʃi） |
| シ | 斯（sie） | 시（si） | Xi | 시（si） | 시（si） | shi（ʃi） |
| ツ | 都（to） | 두（tu） | Tçu | 주（cu） | 즈（cɨ） | tsu（tsɯ） |
| ス | 須（siu） | ᅀᅮ（zu） | Su | 수（su） | 스（sɨ） | su（sɯ） |

＊現在の音は左にヘボン式ローマ字で、右の（　）内にIPA簡略表記を示しました。

＊『伊路波』『捷解新語』『重刊改修捷解新語』の表記（翻字）は一部のみ（京大國語國文研編　昭和40：3-4，森田　昭和48：228の表）。初声を重ねる表記（쭈ccu）などの声門閉鎖音（/ʔ/）はここでは考慮せず、単書表記주（cu）などで考えます。

＊『日葡辞書』のChi/Xi/Tçu/Suは現代と同じく、tɕi/ɕi/ts/s（IPA精密表記；服部　1951：106,97）とみられています。

＊ハングルのㅡ（ɨ）：現代韓国語の「＜으＞[ɯ]は、日本語の「ウ」よりも唇をもっと横に引いて発音します。」（羅聖淑　2008：8）。例：「ク구（ku）・ス스（sɨ）・ツ쓰（ssɨ）」（同書：245）。翻字は筆者。

上の伊路波と日葡辞書を比較すると、チ・ツはどちらも閉鎖音から破擦音に変化しています。そこで「チ・ツ・ヂ・ヅの破擦音化は、十五世紀末より十六世紀へかけての比較的短期間に急速に進み、十六世紀末（キリシタン資料の時代）には、ほぼ大勢は破擦音となっていたと考えられ」（外山　昭和47：193）ています。

このように通説では伊路波の두（tu）が破擦音化して捷解新語の주（cu）に変化したとみられているのですが、そう考えると捷解新語の주（cu）から重刊改修捷解新語の즈（cɨ）への表記の変更をどのように説明するのかが問題となるでしょう。

そこで安田氏はその表記の変更65にたいして、次のような考えをだされました（安田　昭和48:292）。

「ス・ツの母音が、円唇性母音（筆者注：ㅜu）から非円唇性母音（筆者注：ㅡɨ）に書き改められたのは、初本以後の変化による（筆者注：捷解新語の쭈から重刊改修捷解新語の쯔への）ものとは、一概に決定できず、むしろ、音韻論外的変異である、ス・ツの母音原注を、あるがままの姿で、忠実に表わすようになっただけのことではあるまいか。これも、su/sɯ・cu/cɯという対応関係を認めた上での改正という方向性を持つものなのである原注。」

しかしこのように単純に考えると少々疑問となる点があります。世阿弥の松浦の能（1427年）と伊路波（1492年刊）は同時代の資料とみてよいでしょう。そこで松浦の能にみえる「」をsetʔɿ（以下、声門閉鎖音（/ʔ/）を考慮せず、seはローマ字で代用）とみれば同時代語である伊路波の두（ツ：tu）の発音もtɿと考えられるでしょう。このように世阿弥のツ（tɿ）と伊路波の두（tu）を同じ発音とみれば伊路波では두（tu）の表記と発音（tɿ）に齟齬がみられます。

この問題を理解しやすくするために、ツの伊路波から重刊改修捷解新語への変化を通説（A）と筆者の考え（B）を比較すると次のようになります。

松浦の能・伊路波　　 捷解新語　　　　　　　重刊改修捷解新語

表記　：두（tu）------------→주（cu）------------→즈（cɿ）

発音A：tu---（破擦音化）----→tsu-----------------→tsɿ

発音B：tɿ-------------------→cɿ---（破擦音化）---→tsɿ

＊Aは伊路波の두をtuの発音とみたときの、またBは주（cu）→즈（cɿ）を破擦音化とみた変化。（　）内は翻字。

＊発音Bのcは硬口蓋破裂音（/c/）といまは考えてあります。ただし、発音Aの주（cu）と重刊改修捷解新語の즈（cɿ）のtsは破擦音（通説）。

さて筆者には先の주→즈の変化を「ス・ツの母音を忠実に表わすようになっただけ」とみる安田氏の考えは安直でその場しのぎのようにみえます。しかし上のBのような変化を考えると주（cu）から즈（cɨ）への破擦音化をどのように説明するのかという重大な問題が生じるでしょう。では、AとBのどちらが真実の変化なのでしょうか。

1. 雀の鳴き声から国号「清」の読みを考える

前節では破擦音化は두（tu）→주（cu）ではなく、주（cu）→즈（cɨ）の変化ではないのかと疑問をだしました。しかしこの疑問を解くには長い長い考察が必要となりますが、更新の大幅な遅れもあり、この問題の初めのところを考察することにします。

平安初期のサ行音にたいして、慈覚大師円仁の『在唐記』の記述66から有坂氏は次のように考えられました（有坂　昭和32：149-150,153-4）。

1．「梵語のsaに近い音節は當時の日本語には無かつたものと見え、その**說**明にはわざわざ大唐娑字音（心母s）を用ゐて居る。而して、本郷沙字音は、大唐沙字音（審母2等ṣ）とは違ひ、寧ろ口蓋的（palatal）な性質を持つてゐたものと見えるのである。（略）佐はサの假名としては、言はば代表的文字である。故に、本郷佐字音と言へば、當然サの音と解せられたことと思はれる。」

2．「故に,在唐記の場合にも、もし佐と沙との間に音の區別ありとせば、それは恐らく直拗の別ではなかつたかと思はれるのである。（略）當時、サ即ち「本郷佐字音」が〔tsa〕であり、シヤ即ち「本郷沙字音」が〔sḭa〕〔ʃḭa〕〔ʃa〕のやうな音であつたものと假定する時は、梵音caを「本郷佐字音勢呼之。」と註し、梵音śaを「以二本郷沙字音一呼之。」と註した理由がよく**說**明されるのである。（以下、略）」

＊ḭ：iの下部に下向きの半丸括弧（⁀の逆向き）の記号の代用。

その後鎌倉時代になると禅僧によって中国の文物や文化などが将来されたのですが、それらの音はそれ以前の推古音・呉音・漢音とは違ったもので、唐音と呼ばれています。

そして漢音と唐音のサ・タ行の違いについて、有坂氏は次のように考えられました67（有坂　昭和32：563-4）。

「（漢音は：筆者補）支那語のts,dz（齒頭音）tʃ,dʒ（正齒音）類のアフリカータをすべてサ行ザ行の形で傳へてゐる。蓋し、當時は日本語のチ・ツ・ヂ・ヅの頭音がなほt,dに近い形であり、未だアフリカータ化してゐなかつたからである。舌上音はタ行ダ行の形で現れてゐる。これは當時の支那原音では未だ純粹の破裂音であつた。（略）臨濟曹洞系の唐音は、（略）支那語のts,dz（齒頭音）tʃ,dʒ（正齒音）類のアフリカータをすべてサ行ザ行の形で傳へてゐる。日本語のチ・ツ・ヂ・ヅの頭音が此の頃までも未だ單純な破裂音であつたことを知るべきである。但し、支那語の舌上音は當時既にアフリカータ（tʃ,dʒ）化してゐたので、臨濟曹洞系の唐音ではそれをもすべてサ行ザ行の形で傳へてゐる。客（シカ）歳（シツスイ）箆（シツペイ）火（コジ）のやうな古い唐音語に於て、漢呉音でタ行ダ行の音を持つ字がサ行ザ行の音で讀まれてゐるのも、此の故である。（略）」

また江戸初期（1654年以降）黄檗宗とともに伝来した黄檗音など、また長崎などの唐通事が学習した新唐音には、次のような特徴がみられます（有坂　昭和32：564-5）。

「支那語のts,dz,tʃ,dʒ（齒頭音・正齒音・舌上音）類のアフリカータはすべてツ・ツア・ツイ・ツヲ・チ・チヤ・チユ・チエ・チヨ（濁音も之に准ずる）のやうな形で表されてゐる。tsa,tsie（tʃe）,tsoが時にサ〇・セ〇・ソ〇のように寫されることはあるが、その場合には、普通のsa,ʃe,soと區別するため、假名の右肩に小圏を附するのを常とする。而して、支那語のti,tuの音を傯ためには特にチ〇（又はデ〇）ド〇のやうな表記法を設けてゐる。これらは禪僧系統の文獻にも譯官系統の文獻にも共通な表記法である。以上の事實は、チ・ツ・ヂ・ヅが當時既にtʃi,tsu,ʒi（dʒi）,zu（dzu）の状態にまで發達してゐた事情を、よく反映してゐる。」

ところで室町時代の唐音語の「子」は一般にスと読まれるのですが、ツと読む「」と「」68のただ二つの例外にたいして有坂氏は次のように考えられました（有坂　昭和32：565-6）。

「椅子（イス）帽子（モウス）等の如く、古人がかつて之をスの形で傳へたといふことは、即ちその當時日本語のツが未だtuに近い状態に在つたことを示すものでなければならない。併し、さらば楪子（チヤツ）脚踏子（キヤタツ）の借入された時代には日本語のツは既にtsuになつてゐたものと考へなければならないか、といふと、必ずしもさうではない。何故なら、ツが未だtuの状態に在つた時代には、日本人の耳には、支那音節tsɿは、言はばス（su）とツ（tu）との中間音のやうに聞えた筈であるから、それはスで模倣されることもあつたらうが、時にはツで模倣されることが無かつたとも斷言は出來ないわけである。（下略）」

＊「」：『頓要集』（室町時代初期か）。「」：「文安元年（一四四四）の序ある『下學集』に既に見えるものである。」（上書：565）。

＊「【子】（3）教　シ・ス　（上）紙（止）」（藤堂編　昭和53：338）。「江戸時代に借入された毯子の如きはダンの音になつてゐる。」（有坂　昭和32：565）。

＊『日本寄語』（薛俊撰1523年）：「119　立　達子　タツ」（京大國語國文研編　昭和40.9：105）。

＊「子」（精母止韻4等上声tsiei：拼音zĭ）の母音は舌尖母音ɿ69。

さて鎌倉時代に伝来した唐音「」については上にみましたが、より時代を遡って古代のスの音について考えることにします。

亀井氏は雀の鳴き声が江戸初期にシウシウからチウチウに変わっていることを次の文例によって指摘されています（鈴木朖　昭和54：41-2/亀井　昭和59：456,457）。

1．「〇雀ノスヽ今チユチユト云ヲ、古シユシユトキヽタルナリ。（略）メはカモメ燕ノメニ同ク。數多キ意ニテナリ」

2．「雀子　羽原忠之（改行）生レながら忠をつくすや雀の子」

3．「ねやのうへにすたくすすめのこゑはかりしうしうとこそねはなかれけり」

＊1：鈴木朗の『雅語音聲考』（1816年刊）。

＊2：チウの初出は亀井氏が博捜されたなかでは『俳諧三部抄』（一時軒岡西惟中撰1677年）。

＊3：藤原公重（1118-1178年）の『風情集』より。

さてキリシタン時代のシは日葡辞書（1603年）でXi（通説ʃi）、また捷解新語（1676年）で시（翻字si）と表記されています。そして『俳諧三部抄』（1677年）以前の雀の鳴き声はシウシウとみられ、1600年頃の雀の鳴き声シウシウはʃiuʃiuであったとみることができるでしょう。しかしキリシタン時代のシをʃiと考えれば、雀の鳴き声シウシウはʃiuʃiu（シウシウ）→ʃiuʃiu（日葡辞書）→tʃiutʃiu（江戸後期：チウチウ）のような不自然な変化をしたと考えなくてはなりません。

ここで国号「」の読みにたいする有坂氏の考えを次にみてみます（有坂　昭和32：567）。

「後金の太宗が國號を淸と定めたのは我が寛永十三年（一六三六）のことで、その頃日本語のチが既にtʃiの音であつたことは疑ふ餘地も無い。然らばts’iŋ（淸）は當然チンと模倣せらるべき筈であつたのに、日本人は之をシンと呼んでゐる。蓋し、臨濟曹洞系の傳統的唐音では「淸」の字を常にシンと讀み慣れてゐたので、その習慣に據つたものであらう。（下略）」

＊「清」：清母清韻4等平声tshieŋ。

ところで「清」の建国と同時代の日葡辞書（1603年）ではチ・シはchi/xi、また捷解新語（1676年）では지（ci）/시（si）と表記されているので、当時のチをtʃi、シをʃiと考えてみます。すると当時の日本人には新しい国号「清」（tshieŋ）はシン（ʃiɴ）よりもチン（tʃiɴ）に近く聞こえたことでしょう。しかしチンと聞きなされて当然な国号「清」はシンと表記され、今日にいたっています。そこで有坂氏は国号「清」がチンではなく、シンと呼ばれた理由を「傳統的唐音の習慣に據つ」たと考えられました。しかし少し立ち止まって考えると、この考えはとても信じることができません。なぜなら明から清に国が改まった当時はまだ中華の威光が日本を席捲していて、清人の往来もヨーロッパ人のように禁止されていたわけでもありません。そうであれば清の建国という大事件はすぐに清人の口から直接日本人に伝えられたことでしょう。そして国号「清」の音が当時のシンに近ければシンに、チンに近ければチンとして、人々に伝えられたと考えるのが自然ではないでしょうか。たしかに当時「清」の伝統的な唐音はシンで、その音を人々が読み慣れていたのも事実なのかもしれません。しかし中華の威光を体現している清人の口からでる「清」をチンと聞いていたというのに、読み慣れていた唐音シンで口まねをし、そのシンが今に伝わっているというのはやはりどう考えてもおかしいのではないでしょうか。もし当時の国号「清」の発音がチンであれば、古い唐音のシンと新しいチンの音が共存し、その後古いシンの音はだんだんとなくなっていくことでしょう。しかし「清」は今でもシンと読み誰一人チンとは読みません。そこで当時の日本人は「清」の唐音シンを読み慣れていたために国号「清」をシンと呼んだのではなく、国号「清」はチンではなくシンと聞こえたためにシンと呼んだと考えるほうが理にかなっているでしょう。このように1636年に建国された国号「清」がチンではなくシンと呼ばれたと考えれば、ほぼ同時代の『俳諧三部抄』（1677年）以前の雀の鳴き声シウシウもʃiuʃiuでなくtsiutsiuのような音であったとみることができるでしょう。そう考えるとtsiutsiu（「須須」・シウシウ）→tʃiutʃiu（チウチウ）→tʃuɴtʃuɴ（チュンチュン）の変化を考えることができ、雀の鳴き声の変化をうまく説明できるでしょう。

1. 雀はtsiutsiuと鳴いたのか

前節では亀井氏の「すずめしうしう」の論考（亀井　昭和59：447－64）から雀の鳴き声シウシウの変化を考えました。しかし亀井氏はその論考のなかでは上代の雀の鳴き声については触れられませんでした。

そこで上代の雀の鳴き声について考えるために、古代の「雀」の表記を次にみてみます（日本大辞典刊行会編　昭和49（第11巻）：426/上代語辞典編修委員会編　1967：389）。

1．「語源説（1）スズは鳴き声から。メはムレ（群）の約〔箋注和名抄・言元梯（以下、略）」

2．「すずめ[雀]（名）すずめ。（略）【考】（略）スズは擬声語か。「～庭うずすまりゐて」（記雄略）（略）」

＊「須」：siu。「受」：ʒɪəu。

上の記述でわかるように「」は雀の鳴き声とみられるので、スズを「」の重複語とみれば「」の後裔が現代の雀の鳴き声チュンチュン（ンは撥音/ɴ/）であるとみることができるでしょう。以下、撥音ンについては考えないでおきます。

さてこれから古代のス（ツ）について考えていくのですが、話が混乱しないように各時代の資料にみえるツを次のように仮りに表記することにします。

古代　　　奈良・平安時代　　室町時代　江戸初期　　　　　　江戸後期・現代

伊路波　　日葡辞書/捷解新語　 重刊改修捷解新語

　　　　　　　　　　　　　　두（tu）　tçu/주（cu）　　　　즈（cï）

t0（tu）→t1（tu）---------→ts2ɿ----→ts3ɿ---------------→ts4ɿ

＊ツの音は第21・22節の各資料をみてください。

＊古代～平安時代のツ（t0/t1）はここではtuとみてあります。

また唐音「」（下学集1444年）の「」と伊路波の두（tu）は同時代語とみられるので、次のような変化を考えることができるでしょう。

上代　　鎌倉時代　室町中期　　　　　　　　　　江戸初期　　　　　 江戸後期

古事記　　　　　　伊路波 　　　　　　　　　 　日葡辞書/捷解新語　重刊改修捷解新語

「」　　　　　　 唐音（「」）/두（tu） Tçu/주（cu）　　　즈（cɨ）

ツ：to--------------（ts2ɿ：ツ）----------------→ts3ɿ-------------→ts4ɿ

**↗**

ス：tsiu→（ts1ɿ：ス）--------------------------→su---------------→sɿ

「」 唐音（「」）/ᅀᅮ（zu）　Su/수（su） 스（sɨ）

＊「須」：siu。「都」：to。Suは日葡辞書。

さてス・ツの変化を上のように考えたのですが、次のような疑問があります。

1．雀の鳴き声「」がtsiutsiuであれば、「須」（心母虞韻siu）と声母だけが異なる「諏」（精母虞韻tsiu）を使って、雀の鳴き声を「諏諏」となぜ表記できなかったのでしょうか。

2．雀の鳴き声「」がシウシウに変わっているので、「」→「」（ts1ɿ：鎌倉時代の唐音ス）→シウと変化したと考えられそうですが、そこに音の変化はあったのでしょうか。

3．唐音ツ（ts2ɿ）と두（tu）は同時代語とみられ、唐音ツがts2ɿであれば伊路波でも드（tɨ）で表記されたと思われます。ではなぜ두（tu）で表記されたのでしょうか。

4．その後、伊路波の두は日葡辞書のTçuや捷解新語の주（cu）に破擦音化したとみられているのですが、두（tu：ts2ɿ）から주（cu：ts3ɿ）へ破擦音化したというのは本当でしょうか。

5．伊路波の두（tu）と捷解新語の주（cu）の母音はu（ㅜ）で、その後、重刊改修捷解新語の즈（cɨ）の母音はɨ（ㅡ）に変化しています。そこで破擦音化は伊路波の두（tu）から捷解新語の주（cu）のあいだではなく、捷解新語の주（cu）と重刊改修捷解新語の즈（cɨ）のあいだに起ったのではないでしょうか。

6．雀の鳴き声をtsiutsiuとみると、上のような多くの疑問がでてきます。そこで雀の鳴き声をtsiutsiuとみて論を進めてきたことが、これらの多くの疑問を引き起こしたのではないでしょうか。雀の鳴き声をtsiutsiuとみる、最初の一歩は正しいのでしょうか。

ここで一つお断りをしておきます。このあとも難しい考察が続きますが、そこでこれまで以上に中国語音韻学の常識とはかけはなれたアイディアをだしていくことになります。しかし中国語音韻学や国語学の常識を頭において筆者のこれからの考察を読んでいただくと、それらの常識が足枷となり考察の流れについてきていただくのが難しくなると思います。そこで筆者がこれから提出する中国語音韻学や国語学の常識からかけ離れたアイディアにたいして、常識を無視しているといちいち目くじらを立てず、暫くは目をつむり、気軽に以下の考察を読んでいただければ幸いです。

元に戻ります。まず1の疑問です。前節では古代の雀の鳴き声「須須」をsiusiuではなくtsiutsiuと考えなおしました。しかしそうであるならば「」（心母虞韻4等siu）と声母だけが異なる「諏」（同じ平声である精母虞韻4等tsiu）を使って「須須」ではなく、「諏諏」（「ス・シュ」；藤堂編　昭和53：1224）と表記できたのではないでしょうか。このように雀の鳴き声「須須」を通説（日葡辞書でシはXi）のようにʃiuʃiuと考えるにせよ、あるいはtsiutsiuと考えるにせよ疑問がでてきます。そこでこのような疑問がでてきたのは雀の鳴き声をtsiutsiuと考えたことが原因ではないかというのが6の疑問です。

そこでもう一度雀の鳴き声について考えなおすことにします70。常識的に考えれば雀の鳴き声に古今東西変わりはなく、また2000年前の人びとと現在の我々の生理的な耳の構造にも違いはないとみられ、雀は昔も今もチュンチュンと鳴いていることでしょう。そして雀の鳴き声を文字で書くことはできないという究極の批判はあるとしても、現在の雀の鳴き声チュンチュンをIPA（国際音声記号）でtʃuɴtʃuɴ（ɴは撥音/ɴ/）と書くことは許されるでしょう。そして「雀」は鳴き声の「須須」に「群れの意」の接尾語メがついた語とみれば、雀の鳴き声は「須須」→シウシウ→チウチウ→チユチユ→チュウチュウ→チュンチュンと変わったと考えることができるでしょう。そこで雀の鳴き声「須須」をtsiutsʃiuではなくtʃiutʃiuと考えれば、tʃiutʃiu（「須須」・シウシウ・チウチウ）→tʃiyutʃiyu（チユチユ）→tʃuutʃuu（チュウチュウ）→tʃuɴtʃuɴ（チュンチュン）のような自然な変化として説明できるでしょう。

そこで先のス・ツの変化式は次のように書きかえることができるでしょう。

ス：「」　　シウ　　チウ　　チユ　　　チュウ　　チュン

tʃiu----→tʃiu--→tʃiu--→tʃiyu---→tʃuu----→tʃuɴ

ツ：上代・平安時代　 唐音・伊路波　　 捷解新語　　　重刊改修捷解新語

ツ-----------→「」/두（tu）--→주（cu）----→즈（cɨ）

tu------------→ts2ɿ------------→ts3ɿ---------→ts4ɿ

＊ɴ：撥音（/ɴ/）。以後も撥音については考慮しません。

このようにスの変化を考えると、先の6の疑問は雀の鳴き声をtʃiutʃiuと考えるべきであったのにtsiutsiuと考えたことから起こった疑念といえるでしょう。

1. チ・スの変化を考える

前節では雀の鳴き声「」をtʃiutʃiuと考えることで、雀の鳴き声の表記を「須須」→シウシウ→チウチウ→チユチユ→チュウチュウ→チュンチュンと自然な変化として説明できることをみました。しかし雀の鳴き声「」をtʃiutʃiuと考えなおすと、ス（「須」）がチュ（ン）に変化したのはなぜかというさらなる疑問がでてきます。そこでここでは前節の2で疑問としたスの変化について考えることにします。

まず奈良時代のと当時の東国地方のチとシ、またツとスの方言の違いについて次にみてみます（有坂　昭和32：166,179）。

１．チシ相通

「（上略）併しながら、標準語の知類（チ）に對應する音節が東歌防人歌に於て斯類（シ）の假名で寫されてゐる事實は、「加」（）「阿米都」（）「阿母」（）の如く、動詞の活用組織と關係無き名詞の場合にも存するのである。」

＊「下野國防人歌（改行）連用形――多埿毛（四三八三、鹽屋郡）」（上書：165）。

＊「おもちち[母父]（名）父母。両親。アモシシとも。「幣奉りいはふ命はがため」（万四四〇二）（略）」（上代語辞典編修委員会編　1967：165）。

2．ツス相通

「（略）未勘國東歌に（改行）（三四五七）～（改行）（三五〇五）～）（中略）萬葉集中にウチヒサの例が十個、ウチヒサの例が一個有る。故に、恐らく關西方面の言語に於ても、この語にはウチヒサス・ウチヒサツの二つの形が有つたものであり、殊にウチヒサツの方は稀でウチヒサスの方が普通であつたことが知られる。」

　＊チとツの破擦音化の発生時期の違いについては注71。

このように奈良時代のの「・」にたいして、東国方言では「・」の表記がみられます。

そこでこのような奈良・平安時代初期の類にたいして、有坂氏は次のような考えをだされています（有坂　昭和32：167）。

「而して一方奈良時代及び平安時代初期の關西人は支那語のtsi（子）tʃi（之）のやうな音節を聽いて、之を自國語の斯類（筆者注：シ）の音節（si又はʃi）と同類視したのである。何故なら、當時關西方言では、知類（筆者注：チ）の音節は未だtiであり、從つてtʃi tsiのやうな音節が缺けてゐたため、支那語のtsiやtʃiを聽く場合、それを自國語の斯類の音節に最も近く感じたのである。然らば、東歌・防人歌に於ても、斯類の假名で寫された右の方音（筆者注：先の「」などのシ）が、實はtʃi tsi tsïのやうなアフリカータで始る音節そのものであつたといふことも、有り得ることではなかろうか。」

＊「子」：精母止韻4等平声tsiei。「之」：照母之韻3等平声tʃɪei。

上の有坂氏の考えではのチはti、シはsi/ʃiであったためにのの「子・之」（破擦音tsiei/tʃɪei）はシに近く聞こえ、それらの「子・之」をチではなくシで表記したと考えられたようです。しかし東国の「」のシがtʃi/tsi/tsïのような音であったと考えるのなら、のシもʃi/siのような音ではなく、tʃi/tsi/tsïのような音であったと考えるほうが理に適っているでしょう。

ところで奈良時代をはるかに遡る5世紀の稲荷山鉄剣銘（471年か）にみえるサ行音にたいする表記72について、村山氏は次のように考えられました（村山　1988:18）。

「（略）ス　足　tsiuk＝**tsu**k　（敬称）　**tsu**kune（原注 23）（改行）スにはtsuとならんでsuもあったことが推定される（原注24）。セ，ソについては残念ながら鉄剣銘において資料はない。（中略）スクネ（宿禰）のスは5世紀には明らかにtsuであったが，8世紀にはsuとなっている。須久泥（古事記），須区禰，宿禰（日本書紀）の須siu，宿siukはsu，sukuを表わしている。奈良時代の記録に足尼（続記，774年。足tsiuk）もあるが，これは奈良時代以前からの伝統的な書き方をうけついだもので，足尼と書いてあってもtsukuneでなくsukuneと発音されていたにちがいない。（略）」

＊「足」：精母燭韻tsiok。「宿」：心母屋韻siuk。「須」：心母虞韻siu。

このように「」の表記は5世紀の「足尼」から8世紀の「須久泥」へと変わっています。しかし中国語音韻学の通説どおり「足」の精母をts、「須」の心母をsとみれば73、雀の鳴き声「須須」の変化をtsiutsiu→siutsiu（「」・シウシウ）→tʃiutʃiu（チウチウ）のような変化を考えなくてはならず、雀の鳴き声の変化をうまく説明できません。そこで中国語音韻学の常識に反するのですが、通説の精母と心母の頭子音（ts/s）をともに同じtʃと考えれば74、雀の鳴き声をtʃiutʃiu（「」・シウシウ・チウチウ）→tʃuɴtʃuɴ（チュンチュン）のような自然な変化として説明できるでしょう。

しかし精母tsと心母sをともに同じtʃとみることは中国語音韻学の通説と相いれず重大な問題を引き起こします。そこでとりあえず精母tsと心母sを同じ声母tsとみることができるアイディアについて考えることにします。

まず「詩」（心母ʃɪei）の慣用音である「」のシイの発音について前田氏の考えを次にみてみます（前田　昭和52：254）。

「結局「小さき」のはじめの「小」にあたる部分は、ことばの音としては長音でなく、イ列音の「チ」に「イ」が加わったものと考えるべきであって、その点「ツウ（通）」を、ウ列音「ツ」に「ウ」が加わったものと考えるのと同様である。「詩歌」の「」についても事情は同じであるから詳説は省くが、「シー」と引きのばすのではなく、「シ」に「イ」が続くものと考えられる。かくて、イ列に関してもやはりことばの音としての長音は存在しないといってよいであろう。」

＊前田氏の引用句：「沖にさきいさり舟の（松風）」「花鳥風月歌管弦（経政）」（同書：253）。

＊「Xi．シ（詩）」「Xijca．シイカ（詩歌）」（土井・森田・長南編訳　1980：758,765)。

また注53でみたように佐久間氏は昭和初期に「」（sɯ）のスとウの母音が違うと述べておられるので、遡った江戸時代の口語の「吸ふ」はスウのような音であったとみることができるでしょう。そしてこのように一つ一つの母音を区切って「」のように発音されることは江戸時代には「割る」と呼ばれていました。そこで昭和初期の「」が長音のスーではなく、スウのような発音であったのは遠い昔の「割って発音する」記憶が現在に受け継がれているとみることができるでしょう75。

連母音イウについては次のような記述がみられます（外山　昭和47：212/奥村　昭和47：84）。

1．「（たとえば、「九州　きうとわりしうとわる｟高砂｠」元禄十年、謡開合仮名遣など）」

2．「〔iu→ju:〕の融合変化も、比較的おそかったらしい。たとえば、謡曲や平曲の譜本伝書では、つぎの如く、iu連母音のみに「割ル」注記が付いている。「ト・ユヽ・」（東京教育大学蔵平曲譜本）等。」

さて、ここで古代のチの音について考えるために「千鳥」（A）・「鈴」（B）・「雀」（C）にたいする記述を次にみてみます（上代語辞典編修委員会編　1967：455, 387,389/日本大辞典刊行会編　昭和50（第13巻）：378-9/同書　昭和49（第11巻）：413,426）。

A1：「②ちどり。河海の水辺に棲む千鳥科の鳥名。「浜つ浜よは行かず磯伝ふ」（記景行）（略）」

B1：「すず[鈴]（名）すず。（略）野にが音聞ゆ～」（万三四三八）（略）」

C1：「すずめ] [雀]（名）すずめ。（略）「～庭うずすまりゐて」（記雄略）（略）」

＊「め」は乙類。

A2：「語源説（略）（3）なき声からか〔日本語源=賀茂百樹・音幻論=幸田露伴〕」

B2：「語源説（1）響く音から〔大言海〕。（略）」

C2：「語源説（1）スズは鳴き声から。メはムレ（群）の約〔箋注和名抄・言元梯（以下、略）」

　＊「須」：心母虞韻4等平声siu。「知」：知母支韻3等平声ṭɪe。

上の記述から「千鳥」は「チッチッ」と鳴く鳥、「雀」は（「」→シウシウ→）チウチウと鳴く鳥とみられます76。また「雀」と「鈴」にはどちらも「」の反復とみられる「」の表記がみられることから、「雀」の鳴き声チュンチュンと「鈴」のチィン・リーン・チリーンなどと鳴る音は同じとみることができ、「」はチンチンと鳴るものとみることができるでしょう77。そしてこれらの「・」の鳴く声や「」の鳴る音の初頭音はチとみなせるので、「」「」の「」の先祖を「」の「」と考えることができるでしょう。また雀の鳴き声「」は平安時代以後、シウシウと表記されるので、***チ***（「知」）→ス（「」）→シウ→チウの変化を考えます。そして「千鳥」の鳴き声チッの音節末には促音ッ（/Q/）、「鈴」の音のチンの音節末には撥音ン（/ɴ/）、また「雀」の鳴き声チウチウ（シウシウ）には語末にウがみられるので、***チ***→チイ→チウ→チン→チッのような変化を想定できるでしょう78。

この考えを図で示すと次のようになります。

「知」　　　　 ウ音便　　　撥音便　　促音便

***チ***X→（チイ→）チZ-------→チɴ-----→チQ

＊ウ音便チZの先祖を***チ***X（「知」）とみて、ウ音便のウをZ、撥音便のンをɴ（/ɴ/）、促音便のツ（/Q/）をQの記号で示してあります。チイ→チウ（＝チZ）のイ→ウの変化は第27節。

ここで「之」「詩」の字音をみておくと、次のようになっています（藤堂編　昭和53：24,1215）。

「之」：「シ　（平）支（之）（改行）tiəg-tʃɪei-ṭṣï－ṭṣï（zhī）

「詩」：「シ　（平）支（之）（改行）thiəg-ʃɪei-ṣï－ṣï（shī）

＊「之」：照母之韻3等平声tʃɪei。「詩」：審母之韻3等平声ʃɪei。

ところで前節では雀の鳴き声が「諏諏」（精母ts）ではなく声母だけが異なる「須須」（心母s）で表記されている疑問をとりあげました。そしてその疑問を解消させるために、「須」の心母（s）と「諏」の精母（ts）を同じ声母tʃとみるアイディアを考え、「須」→シウ→チウの変化を考えました。そこで「之」（照母tʃɪei）と声母だけが異なる「詩」（審母ʃɪei）の頭子音もʃではなく、照母と同じtʃとみれば、チZの先祖をチ（tʃɪ）とイ（i）の連母音であるチイ（tʃɪi）のように考えることができるでしょう。そして平安時代初期以前の「」はワッテ発音されていたとみれば、シイ（「詩」）の先祖であるチイはtʃɪ・i（・印はワルの発音）と考えることができるでしょう。

ここで平安初期の円仁の『在唐記』の記述（有坂　昭和32：149-150）をもう一度考えます。『在唐記』では梵語च（ca）は本郷佐字音で、श（śa）は本郷沙字音で対音されているので、本郷佐字音を***サ***（「佐」は精母tsa）、本郷沙字音を***シヤ***（「沙」は疏母ṣă）、また‘・’をワルの発音を表わすことにします。

そこで『在唐記』の本郷佐字音***サ***（通説：tsa）と本郷沙字音***シヤ***（通説：ʃa）をtsiaとsiaとみて、***サ***はワッテ、***シヤ***はワラナイで発音されていたとみれば、***サ***と***シヤ***の関係は次のように考えることができるでしょう。

ワルの発音あり　　ワルの発音なし（ワルの消失）

本郷佐字音***サ***本郷沙字音***シヤ***

tsi・a----------→sia

＊‘・’：「ワル」の発音をしめす記号。‘・’記号がなければ「ワラナイ」発音を示します。ここでは通説で説明しています。

ところで5世紀の「足」（精母ts）と8世紀の「須」（心母s）の声母を同じtʃとみたのですが、「」の表記は「足尼」から「須久泥」に変わっていて、そこに「足」と「須」の頭子音の違い（通説：ts/s）がみられる事実を考えると、やはり「足」と「須」の頭子音は同じ声母でありながら何らかの差があったと考えるべきでしょう。そこで「佐」（精母ts）と「娑」（心母s）との頭子音の違いを精母はtʃ=、心母はtʃ-、また直音サと拗音シヤとの違いはワル（記号は‘・’）の有無と考えてみます。

すると本郷佐字音***サ***と本郷沙字音***シヤ***、さらに本郷娑字音との関係を次のように考えることができるでしょう。

本郷佐字音***サ***　　　本郷娑字音

tʃ=i・a（***サ***）-→tʃ-i・a（サ）┬---------→s-a（さ）-→sa（サ：呉・漢音）

│　　　 └→tʃ-ia--→s-ia------→ʃa（シャ：慣用音「娑」）

└→tʃ-iă（***シヤ***）---→s-a（さ）-→sa（サ：漢音）

　　　　　　　　「沙」（疏母：呉音）

＊「佐」（精母箇韻1等去声tsa）：「サ」。「娑」（心母歌韻1等平声sa）：「サシャ」。「沙」（疏母麻韻2等平声ṣă）：「シャサ」（藤堂編　昭和53：61,330,712）

＊tʃ=：精母の頭子音。tʃ-：心母・疏母の頭子音。心母1等sと疏母2等ṣの違いはいまはとりあえずワルとワラナイ（tʃ-i・aとtʃ-ia）の違いとみておきます。‘・’はワルの発音を、‘・’がない時はワラナイ発音（ワルの消失）を示す。  
＊直拗（ワルとワラナイ発音）とs-a（さ）については注79。

このように精母・心母は同じ頭子音をもちtʃ=とtʃ-の違い、さらに直音・拗音はワル（記号・）の有無の違いと考えれば、精母（ts）と心母（s）、また本郷佐字音（通説tsa）と本郷沙字音（通説ʃa）の違いを上のようにうまく説明できるでしょう。

元に戻って「」の「知」（知母ṭɪe）の後裔を「」と「」の「」（tʃ-i・u）とみると80、チイの変化を次のように考えることができるでしょう。

知母　　 　 　　　　（チウまでワル）　　（ワルの消失）　拗音化　　撥音化

「知」　　　 チイ　　　「」　シウ　チウ　 チユ　　　　　チュウ　 チュン

（tʃ=ɪ・e→）tʃ=ɪ・i-→tʃ-i・u------------→tʃ-iu-------→tʃuu----→tʃuɴ

＊ここではチイの変化のみを考えています。

＊「知」（知母支韻3等平声ṭɪe）。

1. ツの変化を考えなおす

話をもとに戻します。第25節で提出した2-5の疑問はツが「都」（tu：古代）→「」（tsɿ：唐音）→두（tu：伊路波）→주（cu：捷解新語）→즈（cɨ：重刊改修捷解新語）のように変わったのはなぜかという疑問とみることができるでしょう。

ところで筆者が中学生ころだったでしょうか、「」をテフということを知り不思議に思ったことがあります。そこで上のツの変化にたいする疑問を解くために、「」（破擦音tʃo:）にみられる表記テフとチョウの関係を考えることにします。

「蝶」には次のような記述がみられます（日本大辞典刊行会編　昭和50（13巻）：478）/土井・森田・長南編訳　1980：125,125/京大國語國文研編　昭和33：163）。

1.「ちょう　テフ【蝶】🈩〘名〙（略）＊色葉字類抄（筆者注：。橘忠兼著12世紀中葉）「蝶　テフ　入夢　荘用夢為胡蝶」（略）」

2a.「Chô．チョゥ（蝶）蝶.」81

2b.「†Chô．チョゥ（てふ）　Toyŭ（と言ふ）の意味を示す助辞.例, Vomôchô，yumechô,&c.（思ふてふ，夢てふ，など）思うということ，夢ということ，などの意.文書語.」

3.「蝶나븨뎝〇됴우（tyo’u）」

＊『倭語類解』（洪舜明編：18世紀初ころか）。3の翻字は筆者。

上のテフとチョウの二つの表記について、ロドリゲスは『日本大文典』で次のように述べています（ロドリゲス　昭和30：638,641）。

1．「〇ここで注意を要するのは，Chô（チョー），giô（ヂョー）がcに少しく触れてT，Dで発音されねばならないのであって，日本語としての正しい発音は，Chô（チョー），giô（ヂョー），chôzu（チョーズ），chôfô（チョーホー）の代りに，Teô, deô，Teôzu，又は，Theôfô, Teôfôのやうに，Theô，dheôと言はれるべきだといふことである。」

2.「2．Tantô theôdei，chitet theô nhŏ.（端透定泥，知徹澄嬢。）　Xita nite（舌にて）。」

＊舌音の端透定泥（舌頭音1・4等）と知徹澄娘（舌上音2・3等）の音価は平山氏によれば、「t,t‘,d,n/ȶ,ȶ‘,ȡ,ȵ」（平山　昭和42：145-6）。「娘」は「嬢」に同じ。

上のロドリゲスの記述では合拗音チョー・ヂョーはTheô/dheôといわれるべきだとしています。

そこでこの珍しいth-とdh-の綴りにたいして、亀井氏は次のような考えをだされました（亀井　昭和59：286）。

「（略）即ち、口蓋化せる[t]及び[d]を特に表はさうとしたものではなかったらうか。もしこれを発音部位に関して述べるなら、舌尖のみならず中舌に近い部分を以て閉止を作る所の、[tʃ] [dʒ]における[t][d]音、少くともそれに近似の音であったといへるのではあるまいか。かく考えてこそ、「少しくCに触れてT Dに発音しなければならぬ」と説くロドリーゲスの真意が解けると思ふ。

この解釈が正しいとすれば、室町時代の末において、「ちよう」「てふ」「てう」の類は、既に一般に[chô]（＝[tʃo:]）であったとしても尚まま未だ完全にアフリカータ化し得ぬ場合があったと推定されよう。（略）」

＊下線は筆者。

ところでデ（助詞）にアルが接続したデアルのその後の変化について、次のような記述がみられます（土井・森田　昭和50：124-5）。

「「である」は、末音を落として「であ」ともなったのであって、キリシタン版のローマ字本の中にその例がある。

よりも重罪に附せうずる事であ（dea）。（天草本伊曽保）

槍下で首を取るは手柄であ（dea）82。（日葡辞書）

これが融合して「ぢゃ」となった。（略）「であ」から「ぢゃ」が生ずる一方、「だ」も生じたらしい。（略）

雑血ノ乳味トモ成ラヌ時ダゾ。（人天眼目抄、中）（以下、略）」

＊下線は右傍線の代用。

＊『人天眼目抄』：室町時代曹洞宗の川僧慧済（1475年没）の講義録。

またこのヂヤとダの関係についても、亀井氏は次のような考えをだされています（亀井　昭和59：290）。

「（上略）畢竟、標記上「だ」の仮名を以てするも、その実際の音価はまだ上方の「ぢゃ」と或いは今日程聴覚的に相互の距りがなかったためにほかならないと考へられる。そして、それは「だ」が何らかアフリカータの「ぢゃ」に近い音価を有してゐたからといふよりも、「ぢゃ」の方が、未だ口蓋化した[d]音を保存してゐたことに基くのではなからうか。」

　＊下線は筆者。

ところで先の「蝶」のテフとチョウの表記をただちに破裂音のtefuと破擦音のtʃo:と考えると、それらの音（聞こえ）には大きな違いがあったとみなければなりません。しかし上で亀井氏が考えられたように、チョウと表記される音が「未だ完全にアフリカータ化し得ぬ場合があった」とみれば、テフとチョウの頭子音（通説tとtʃ）の差はそう大きくはなかったとみることができるでしょう。また同じように「未だ口蓋化した[d]音を保存してゐた」とみるならば、上方のヂヤと関東のデア（→ダ）とのあいだの頭子音の差もそう大きくなかったとみることができるでしょう。そこでテとヂヤの頭子音は破裂音のt/dでもなく、さりとて破擦音化したtʃ/dʒでもなく、それらのtとtʃ（またdとdʒ）のあいだの、ある種の破裂音T/Dだったのではと考えられてくるでしょう。そこでチョウの頭子音をある不明の破裂音T3と考えます。そしてロドリゲスは先にみたように、chôよりteôのほうが正しいといっているので、テフの頭子音を破裂音T3になる前の破裂音T2と考えなおします。つまりテフの頭子音を破裂音T2（ロドリゲスのteô）、また合拗音チョウ（ロドリゲスのchô）の頭子音を破擦音のtʃではなく破裂音T3と考え、さらにその破裂音T3がその後、破擦音のtʃに変化したと考えると、t（破裂音）→T2（破裂音）→T3（破裂音）→tʃ（破擦音）の変化を考えることができるでしょう。

ところでロドリゲスは『日本大文典』（1604-8年刊）のなかで、当時のセについて次のような記述をしています（ロドリゲス　昭和30：613）。

「○Xe（シェ）の音節はささやくやうにSe（セ），又はce（セ）〈原注1〉に発音される。例へば，Xecai（）の代りにCecai（せかい）といひ，Saxeraruru（さしぇらるる）の代りにSaseraruru（させらるる）といふ。この発音をするので，‘関東’（Quantô）のものは甚だ有名である。」

そこでと関東の方言の違いを「都のʃe（シェ：Xe）を関東でse（セ）という」と通説のように解釈すれば、「セの子音に関する口蓋性の消失（筆者注：ʃe→se）が、関東方言において早く起こったらしい」（奥村　昭和47：121）と考えることができるでしょう。そしてそこから「当時はセと発音する関東べいの方が笑われる存在であった。今でもこのシェ・ジェは東北や九州の大部分、北陸・近畿・中国・四国の一部等でよく聞くことができる。」（秋永　1990：100）との考えがでてくるのもまた当然のことでしょう。

しかしセの口蓋性の消失が関東において都よりも早く起こったとみる、上の考えに疑問の起こる記述がロドリゲスに次のようにみられます（ロドリゲス　昭和30：228）。

「〇日本の発音では，垃丁語や葡萄牙語のCesar（人名），casa（家），casar（結婚する）等に於けるが如き単一字のSは本来無いのである。寧ろ我々が葡萄牙語や西班牙語で，Çapato（短靴）,caça（狩猟）,moço（青年）,doçura（甘味）を発音する時のやうなÇの字であると言った方が正しい（以下、略）」

そして上で正しいとされたÇはtsのような音だったとみられるので83、当時の関東のCecai（「世界」）はtsekaiのような音であったとみることができるでしょう。

ここでキリシタン時代より約100年後の『假　名文字使蜆縮凉鼓集』（鴨東蔌父著1695年刊）の次の記述をみてみます（鴨東蔌父　昭和54：影印写真版19）。

「田舎人の越前をゑつでんといひといふべきをちゑといへる*にひ*としかるべし」

＊「ち」の下線は右棒線、「ゑ」の2重下線は左棒線の代用。

＊「*に*」「*ひ*」はそれぞれの草体字の代用。

＊書名は四つ仮名に関係する「」・「」・「」・「」に基づく。

上の著者の記述をキリシタン資料（通説）にもとづいて、都のセをʃeに、田舎のチヱをtʃieと直截に読めばセとチヱの音には大きな違いがあるとみなければなりません。しかし前節では現在のシャの先祖である本郷沙字音シヤをtʃ-iaとみたので、当時の都の「瀬」（ロドリゲスのXe）はワルの消失したtʃ-ie（シエ）とみることができるでしょう。また本郷佐字音***サ***（精母ts）をtʃ=i・aとみたので、どこかの田舎人のチヱはワッタtʃ=i・eの発音であったとみることができるでしょう。そこで先にテフとチヨウにはたいした音差しかなかったと考えたように、どこかの田舎人のチヱ（tʃ=i・e）と都の「瀬」（tʃ-ie）との違いは（tʃ=とtʃ-との違いはあるとしても）同じ頭子音tʃのワッタ発音のtʃ=i・e（チヱ）とワルの消失したtʃ-ie（ロドリゲスのXe：「」）の違いしかなかったと考えることができるでしょう。また関東のCecaiはtsekaiに近い発音なので、そのCeはワッタ発音のtʃ=ieとみることができるでしょう。

話を戻して、先の第24節の3-5の疑問であるツの変化はtu（古代）→ts2ɿ（「」/두）→ts3ɿ（Tçu/주）→ts4ɿ（즈）のように変化したのはなぜかという新しい疑問に置きかえることができるでしょう。そこで唐音「」（ts2ɿ）をワッタ発音のtʃ-i・uと考えなおし、さらにこのtʃ-i・uの頭子音を破擦音tʃではなく、ある種の破裂音T2と考えなおします。そして当時の中期朝鮮語にはそのある種の破裂音T2を正確に表記するためのハングルがなかったために伊路波ではT2に近いㄷ（t）を用いて두（tu）と表記されたと考えてみます84。そう考えるとその後、そのts2ɿ （두）がキリシタン時代にts3ɿ（捷解新語の주/日葡辞書のTçu）に変化したと考えることができるでしょう。また先に亀井氏が「蝶」の合拗音チヨウの表記（Chô＝tʃo:）を「未だ完全にアフリカータ化し得ぬ場合があった」（亀井　昭和59：286）と考えられたので、주やTçuの頭子音も破擦音のtʃと考えないで、ある種の破裂音T3と考えなおします。そう考えなおせば伊路波の두（tu）から捷解新語の주（cu）への表記の変更はT2u（두：ts2ɿ）→T3u（주：ts3ɿ）のように考えることができるでしょう。また通説では두（tu）→주（cu）の変化を破擦音化とみるのですが、破擦音化は捷解新語の주が重刊改修捷解新語の즈になった変化と考えなおします。このように江戸時代初期にはツの破擦音化はまだ起きていなかったと考えなおすと、新しい3-5の疑問にたいしてツはtu→T2u（伊路波の두）→T3u（捷解新語の주）→ts4ɿ（重刊改修捷解新語の즈：cɨ）のように変化したと説明できるでしょう。

ここまで試行錯誤してきたツの変化にたいする二つの考え方は次のように比較することができるでしょう。

上代　　　　鎌倉時代・室町中期　　　江戸初期　　　　　 江戸後期

古事記　　　　唐音/伊路波 　　 　日葡辞書/捷解新語　 　重刊改修捷解新語

「都」　　　　「」/두（tu）　　　Tçu/주（cu：tsu）　즈（cɨ:tsɿ）

A．tu-------------→ts2ɿ-------------→ts3u------------→ts4ɨ

B．Tu-------------→T2u--------------→T3u-------------→ts4ɿ

＊Aは唐音「」をts2ɿ （破擦音）、BではT2u（ある種の破裂音）と考えたときのツの変化。チイの変化は注85。上代の「」はいまはtuと考えてあります。

＊（　）内の左は翻字。右は通説の音価。

さてツが上のBのように変化したと考えると、これらのT1/T2/T3がどのような音であったのかが疑問となるでしょう。そこでその疑問を解く鍵となる「母音イとウの相関」について次節で考えることにします。

1. 母音イとウの相関を再び考える

第3節では「阿遅志貴～」の志（シ乙）から「阿旎素企～」の「素」（ス）への変化を考えました。そこで神名「味耜高彦根神」の「阿遅志貴～」の「志」の母音イをI、また上代特殊仮名遣い乙類のイを東北方言にみられるイ（ï）、また「素」の母音をɿ、さらにス・ツ以外のクなどの母音（平唇のウ）をɯと考えます。

すると「」と「」の母音の変化を次のように考えることができるでしょう。

|  |  |
| --- | --- |
|  | 古代　　　　現在 |
| 「阿遅志貴～」の「志」の母音イ | I（＝ï）--→i（イ） |
| 「阿旎素企～」の「素」の母音ウ | ɿ（≒）　 /ɯ（ウ） |

＊シには上代特殊仮名遣いの甲乙の区別はありませんが、「志」の母音をいま仮にï（イ乙類）と考えてあります。

＊：ス・ツの母音。ɯ：その他の母音ウ（平唇）。

ところで第16節で、東北方言のïと舌尖母音ɿ（≒)はともに中舌的な母音で近似しているとのネフスキーの記述を紹介しました。そこで神名の「志」の母音が I（＝ï）であり、「素」の母音が舌尖母音のɿ（≒) であれば、現在の目からみてシ→スの変化はとても考えられないとしても、古代に「志」→「素」の変化（シ・スの相通86：注11）が起きていたと考えることができるでしょう。

次に現代におけるインキからインクへの変化を考えます。幕末～明治初期に英語のink（[iŋk]）が借入されましたが、その当時の日本語は開音節（母音終わり）であったとみられ、当時の人々にとってはinkの語末kの聞こえを正確にとらえることは難しかったと思われます。そこで原音[iŋk]のkを当時のク（[kɯ]）ではなく、より聞こえの近い当時のキ（[kɿ]≒[k])で借入したと考えてみます。そしてその借入時のキ（kɿ）はその後現在のキ（ki）に変化したと考えれば、原音[iŋk]の聞こえに近かった明治初期のインキ（[iɴkɿ])が現在のインク（[iɴkɯ]）へと表記が変わったことをうまく説明できるでしょう。

このように考えると、母音イとウの古代から明治初期への変化は次のようにあらわすことができるでしょう。

古代～奈良時代　　　　　キリシタン時代　幕末明治頃　　　 現在

「阿遅志貴～」→「阿旎素企～」

イ：ï（志の母音）-→ɿ（素の母音）→ɿ-----→ɿ（≒)-----------→i

イン*キ*（[iɴkɿ]) --→インキ（[iɴki]）

ウ：ɿ（≒)----------------------→ɿ------→ɿ（ス・ツの母音) /ɯ（他のウ段の母音)

「御座る」（gozarɿ）　勝つ（[katɿ]）/インク（[iɴkɯ]）

＊*キ*：明治初期のキ。キ：現在のキ。

このようにï→ɿ→iの変化を考えることで、古代の神名「阿遅志貴～」から「阿旎素企～」への、また現代のインキからインクへの表記の変更、さらにコリャードが「御座る」の母音を無表記したことなどをうまく説明できるでしょう。

ところで上代特殊かなづかい（筆者注：イ・エ・オの甲乙類の別）は「上代の末になるとバタバタと姿を消してゆき、平安になるとア行のeとヤ行のyeの区別は別としてコとゴの甲乙の別をのこすのみ」（秋永　1990：92）となり、中舌母音のイ乙(ï）はイ甲（i）に合流して、平安時代にイ乙は消滅したとみられています。また明治初期の東京語のインキの「キ」の母音がɿであったとすれば、現在の関東方言や関西方言にɿ、またはそれに近いï（中舌母音）が残っていると考えられますが、中舌母音のイは奄美方言（ɨ）や宮古方言（ɿ）、また東北・出雲方言（ï）などにしかみられません。そこで明治以降にイがɿ→iの変化をしたと考えることはできないでしょうが、ï→ɿ→iの変化を考えれば多くのことが説明できるのもまた事実です。そこでï→ɿ→iの変化を事実ではないとみないで、ï→ɿ→iの変化が成立しうるアイディアを考えることにします。

1. 正歯音3等について考える

前節ではï→ɿ→iの変化を考えましたが、このような変化は上代特殊仮名遣いの甲乙類の音の変化にもみられます。たとえば第8節で紹介した『顔氏家訓（音辭篇）』にみられる支韻3・4等の「奇・祇」の両音（群母gɪe/gie）の区別87はその日本読みキ乙とキ甲の違い（藤堂　1980：163）としてあらわれています。このように上代特殊仮名遣いの甲乙類の音の違いは万葉仮名に借用された中国語の字音の違いにもとづいている（橋本進吉　1980：11-120に詳しい）とみると、その根拠となる正歯音3等（照母）音について考える必要があるでしょう。

そこでまず上古から中古への声母の変化を黄侃（1886～1935）氏の考えから次にみてみます88（藤堂　1980：343）。

「（2）1等韻に現れる声母は「古本紐」であって，上古以来の姿をよく保存している。これに反し2等韻や3・4等拗音に現れる声母は「今變紐」で，変型の著しいものである。」

そこで今変紐とみられる正歯音3等（照母）の音価を知るために、「仏所行讃」（曇無讖訳416-426）にみえる梵漢対応を次にみてみます（水谷　昭和42：105－6）。

「Skt.　*vāṣpɑ*（人名），Pali　*vɑppɑ*　婆渋波（渋は<審二>）

Skt.　*ɑśvɑjit*（人名），Pali　*ɑssɑji*　阿湿波誓（湿は<審三>）

すなわち，次の如き明瞭な対立である。

〈審二〉：ṣ　〈ソリ舌〉

〈審三〉：ś　　〈口蓋〉」

＊āはɑの上部に‘—’を付けた文字の代用。

＊「渋」（澀）：疏母緝韻2等入声ṣïӗp（ṣ：そり舌音/ʂ/）。

＊「湿」：審母緝韻3等入声ʃɪӗp（ś：後部歯茎音/ʃ/）。

上のような対応がみられることから（細）正歯音3等の照母（章母）・審母（書母）の音価は「ťś /ś」（水谷　昭和42：106の表）、あるいは「**ȶ**ɕ/ɕ」（平山　昭和42：146の表）のような口蓋音とみられています。以下、正歯音3等（照母）はtʃ（藤堂・小林　昭和46：18）として考察することにします。

また『韻鏡』には重紐という次のような事象がみられます（平山　昭和42：149）。

「3・4等の韻母が拗介音ɪ：iの違いで区別されているものがある。例えば第4転支韻3等ɪĕ：4等iĕ（筆者注：第8節），また第23転仙韻3等ɪɛn：第21転仙韻4等iɛnの如く。（略）同一声母が同一韻母と重複して結合している観を呈する。声母を〈紐〉ともいうので，したがって〈重紐〉と呼ぶのである。

　重紐による韻母の対立は，支・脂・祭・真・仙・宵・侵・鹽の諸韻の，唇・牙喉音声母の下で存在する。」

＊4等の韻母はA類（甲類）、3等の韻母はB類（乙類）と呼ばれます。

＊「饘」：照母仙韻3等平声tʃɪɛn。「煎」：精母仙韻4等平声tsiɛn。

そこで有坂氏が「カールグレン氏の拗音**說**を評す」（有坂　昭和32：327-357）のなかでしめされた止摂支韻3・4等の違いを次にみてみることにします。

　　　並母　　　　 幫母　群母　　　　見母　 安南音　　朝鮮音　 日本音

3等：「皮（符羈切） pïi　 奇（渠羈切） kïi」「皮bi」　「kïi」　「奇」（キ乙）

4等：「陴（符支切） pi　　祇（巨支切） ki」 「陴ti」　「ki」 　「祇」（キ甲）

　＊ïの下線は半丸括弧（⁀）の代用。影母・曉母・喩母は省略。

＊中国音・ベトナム音・朝鮮音：有坂　昭和32：332,343/340/339-340。越南漢語・朝鮮漢語や元代『蒙古字韻』や日本漢字音における違いは藤堂　1980：217-220,163。

＊「皮 bɪe/陴 bie/奇 gɪe/祇 (g)ie」（藤堂・小林　昭和46：32）。

第8節で『顔氏家訓』（音辭篇）の「‘岐山の岐は，奇と読むべきだが，江南では祇と読んでいる’」（藤堂　1980：212）という記述を紹介しましたが、その続き（注24）に「《廣韻》の「支」韻では，「皮3＝符羈切」，「陴4＝符支切」の二つの反切を区別し，…」（同上）とあります。そこで韻母A・B類（i/ɪ）の違いは声母（反切上字）ではなく、韻母（反切下字）にあるとみることができるでしょう。

次に仮4等韻の拗音化について考えることにします。仮4等韻の先韻は「≪切韻≫の当時には直音韻であった。それが≪韻鏡≫の作られた当時，4等拗音型に変化していた」（藤堂　1980：216）とみられています。そして『広韻』に「蘇前先第一仙同用」89（陳彭年等　中華民国80：131）の記述がみられることから、先韻仮4等韻（en→ien）と仙韻3等（iɛn）が唐代に合流したとみられています。

この先仙韻合流については次のようにみられています90（藤堂　1980：236）。

|  |  |
| --- | --- |
| 〈六朝〉〈唐代〉 | （混同の状況） |
| 先/en/→/jen/ | 仙4 /jɛn/と混同 |

　　「（略）先・仙4 /jɛn/ ：「仙3」/rjɛn/　」

＊仮4等韻については上書：232—6。

　そこで仙韻3等「饘」と仙韻4等「煎」、また仮4等先韻「箋」との関係は次のようにみることができるでしょう。

「饘」（照母仙韻3等）：tʃɪɛn---------------→tʃɪɛn

「煎」（精母仙韻4等）：tsiɛn-------------┬→tsiɛn

「箋」（精母先韻仮4等）tsen-----→tsien -┘

このように唐代には精母の仙韻4等と先韻仮4等が合流したのですが、近代になって照母仙韻3等はそり舌音化、また精母仙韻4等は口蓋化しています。

そこで藤堂氏は現代北京語のそり舌音化と口蓋化が連動しているとして、それらの変化が次の順に起きたとみられました（藤堂　1980：400）。

　　　　　<中原音韻>　　<北京語>

「Ⅰ　/crj-/[tʃɪ-]→/cr-/[ṭṣ-]（舌面性の音がなくなる）＜正歯音3等のそり舌化＞

Ⅱ　/kj-/[ki-]→[tɕi-]（舌面性の音が復活）＜牙音の口蓋化：団音＞

Ⅲ　/cj-/[tsi-]→[tɕi-] ＜歯頭音の口蓋化：尖音＞　」

＊＜　＞内は筆者。上の変化は一部省略してあります。

＊以前の京劇では団音と尖音が区別されていました91。

また上のⅢの歯頭音（拼音z：ここではts）の舌面音（拼音j：ここではtʃ）への口蓋化を菊田氏は音韻論的に次のように解釈されています92（菊田　昭和42：175）。

「舌面音は介母/i/ //の前にのみあらわれ，そり舌音・舌端音・舌根音は/i/ //の前にはあらわれない。即ち，舌面音は，そり舌音・舌端音・舌根音のいずれとも互いに補いあう関係にあり，音韻論的には，そのいずれかと同一のものと認められる可能性がある。（略）/i/ //が前舌的であることを考慮に入れると，舌面音は，音韻的には，/i/ //の影響で舌端音がやや奥よりの前舌面で調音されるようになったものだと理解される。従って，舌端音を音素/z,c,s/に該当するとすると，舌面音は/zi,ci,si/と解釈される。」

＊「舌面音　[ȶʑ,ȶɕh,ɕ]」，「舌端音　[tz,tsh,s]」（菊田　昭和42：174）。

＊有気音はhで代用。

このように現代北京語にみられる舌面音（tʃ）と舌端音（ts）の関係をtsの口蓋化（tzɿ→ȶʑi：以下、tsɿ→tʃi）とみれば、ts＋ɿ（/zɨ/）→tʃi（/ziɨ/）の変化93を考えることができるでしょう。

ところで先に梵漢訳音で審母3等が口蓋音ś（/ʃ/）に対応していることを紹介しましたが、北京語のそり舌音化にたいする藤堂氏の考えを次にみてみます（藤堂　1980：227）。

「（上略）歯音においては，中古から中世に至る間に，要素/j/がしだいに弱まり，要素/r/がそれに逆比例して強まったと言えるのである。今日の北京語で，これら全部が完全にそり舌音となりきっているのは，このような傾向が，中世から近代にかけても引き続いて進行したことを暗示する。（略）」

＊「rはそり舌要素，jは舌面要素である。」（上書：198）。

＊上の引用文につづく変化図では「支」（照母3等）の変化は「// 〈中古〉（切韻）→// 〈中世〉（韻鏡）→//〈近代〉」。

そこでこのような上古から現代にいたる正歯音3等と歯頭音4等の変化を仙韻と先韻で考えると、次のようになるでしょう。

　　　　　　　　　切韻以前　韻鏡　　　　　　　　　 近代　　　　現代

「饘」（仙韻3）　：＊tian--→tʃɪɛn----→tʃɪɛn----（Ⅰの変化）-→zhān（そり舌音）

「堅」（先韻仮4）：-------ken-→kien----→kien---（Ⅱの変化）-→jiān（団音）

「煎」（仙韻4）　：-------→tsiɛn-------┬→tsiɛn（Ⅲの変化）→jiān（尖音）

「箋」（先韻仮4 ）：------tsen→tsien----┘

先韻の拗音化　　先仙4合流　　そり舌化・口蓋化（尖/団音）

＊四角内のローマ字は『音注韻鏡校本』（藤堂・小林　昭和46：該当ページ） 。波線は拼音。

＊「戦」：照母仙韻3等去声tʃɪɛn。「＊tian→tʃɪɛn」（藤堂　昭和42：71）。拼音zh：[tʂ]。また「饘」（照母仙韻3等平声tʃɪɛn）と異声同音。

＊「堅」（見母先韻仮4等平声kien）。「煎」（精母仙韻4等平声tsiɛn）。「箋」（精母先韻仮4等平声tsien）の拼音jは[tɕ]。

上の変化は先仙韻の古代から現代北京語への変化をうまく説明しているようにみえますが、問題があります。

そこで上の変化が起きた機序（Ⅰ→Ⅱ→Ⅲ）にたいしてどのような問題があるのかをしるために、藤堂氏の考えを次にみてみます（藤堂　昭和62：171）。

「明末までは，なおtʃ-やʃ-のような舌面的な音があり，例えば「戰」tʃien，「扇」ʃienのように発音されていた。もしそこへ，「堅」kien→tśien，「軒」hien→śienのような口蓋化を起した音がわりこんで来たらどうであろうか。tʃ-とtś-（筆者注：tɕ），ʃ-とś-（筆者注：ɕ）はとてもよく似た音であって，同一言語の中でそれを区別するのは容易ではない。つまり語音の混同を起し，ひいては，言語の伝達に支障をきたしてしまう。

ところが，明末清初に，「戰」「扇」の類はすべて捲舌音（そり舌音）となり，「戰」tʃien→tṣan，「扇」ʃien→ṣanの形，つまり今の北京語と同形となった。そのことは，前期の徐孝の『等韻図経』（1606）のなかに，はっきりとみえている。こうなれば，もう舌面音tś-やś-が入り込んできても，tṣ-とtś-, ṣ-とś-では，よほど音色が違うから，両者をききわけるのも容易であり，語音の混同を招く心配もない。そこで清初に，「堅」や「軒」の類が，一斉に口蓋化を起したのである。音韻変化の世界には，時々こうした連鎖反応がみられる。これはその一つの顕著な実例だと考えてよかろう。」

＊「堅」（見母先韻4等平声ken→kien）。「軒」（曉母元韻3等平声hïʌn）。

そこで疑問となるのですが、もしまず最初に、「戦」（tʃɪɛn）がⅠの変化（そり舌音化：tṣ）を起こして、舌面性の音（tɕ）が消失したというのであれば、変化した「戦」（tṣ）とⅢの変化（ts→tɕ）を起こすまえの、そのままの「箋」（ts）との音差は大きくて、「戦」（tṣ）と「箋」（ts）の語音の混同は起きなかったのではないでしょうか。そう考えれば、「戦」（tʃɪɛn）がそり舌音化したことで「堅」「箋」（tsiɛn/kien）の口蓋化（拼音jiānへの変化：尖団音）が引き起こされたとする説明には疑義が生じるでしょう。そしてそり舌音化と口蓋化が連動しているという考え方に疑問をもてば、近代に「戦」（tʃɪɛn）のそり舌音化が、また尖団音の口蓋化が起きたという考えにも疑問がでてくるでしょう。

ところで唐代に重唇音（両唇閉鎖音/p/）の「風」（非母東韻3等平声pɪuŋ）が軽唇音（唇歯摩擦音/f/：非母）に変化した軽唇音化は次のようにみられています（平山　昭和42：160）。

「 4）の韻母合流と関連するもので，C類＞B類の韻母合流の結果として牙喉音の場合は従来のC類音節とB類音節とが同音化したのであるが，唇音の場合はそれまで韻母が担っていた音節弁別の機能を〈軽唇音〉の独立が肩代りし，音節全体としての区別は保たれたのである。（略）」

＊下線は筆者。

＊「中舌・奥舌主母音をもつ拗音韻の唇・牙喉音音節をC類と名付けると、（略）」（平山　昭和42：152）。

ところで先に止摂支韻3・4等の韻母B・A類（ɪ/i）の違いを声母（反切上字）ではなく、韻母（反切下字）にあるとみましたが、上の軽唇音化でもやはり3等の介音ɪが声母の変化（p→）fを起こしています。つまり上文の「韻母が担っていた音節弁別の機能を〈軽唇音〉の独立が肩代り…（云々）」の考えから、ここでも介音（ɪ/i）の違いが声母の違い（f/p）になっているとみることができるでしょう。しかし通説の仙韻3等「戦」（tʃɪɛn）と仙韻4等に合流した先韻仮4等「箋」（tsien）の違いをみると、声母ではtʃ/ts（口蓋的/中舌的）、また韻母ではɪɛn/ien（中舌的/口蓋的）と、口蓋的・中舌的と2重にでてきます。しかし仙韻3等と仙韻4等（合流した先韻仮4等）は補いあう関係から94、仙韻3等の「戦」を中舌的なtʃɪVn（Vはɛ、またはe）とみるのであれば、その相手方の仙韻4等の「煎」は口蓋的なtʃiVn（あるいは韻母ではなく、声母の違いとみるならtʃɪVn とtɪVnなど）とみるべきでしょう。しかし藤堂氏はカールグレン氏以来の考え方を順守して、3等と4等を2重に中舌的と口蓋的な対とみられ、tʃɪɛn/tsienのように考えられたために（悪くいえば、ずるく解決されたために）、3等と4等の違いは何かという問題の本質が不透明になってしまったのではないでしょうか。そこから「戦」のそり舌化が近代になってあらわれ、その後に「堅」「箋」の口蓋化がおこったというのは真実の変化なのかという疑問がわいてくるでしょう。

また口蓋音とそり舌音の「聞こえ」の違いから正歯音3等を口蓋音（前舌面音）とみる通説にたいして、尾崎氏は次のような異論をだされています（尾崎　昭和55：89）。

「ある時代の標準漢語社會の内部に、のちの正齒音系列の文字を以て、梵語の口蓋音シリーズを頭子音とする音節の音譯字とする事實があったとしても95、それを以てただちに、その正齒音系列字の頭子音としては、單純な（略）口蓋音的、前舌面調音的な「聞こえ」（筆者注：「軟い」「濕った」Mouillé音色）をもった音聲、が期待される、ということにはならない。それにおくれる時代の、同じ系列字の頭子音に、舌尖調音性音聲のそれに似た「硬い」聞こえ（筆者注：中舌的なdur音色）が伴うと確認されたときには、その聞こえ、あるいは少なくともその聞こえに近似の聞こえをもったものが、そこに期待されていいのである。私は、この系列の諸字は、そのような「硬い」聞こえの音をもった文字のグループ96、少なくとも、と考える。」

　＊傍点（ヽ）は尾崎氏。下線と2重下線は筆者。

そして尾崎氏は上の考えから唇・牙喉音だけでなく、歯音などの「等韻圖三等の欄は（略）すべて「聽覚上の中舌音」（波線の語は筆者補）の原理で統一されたもの（略）」（上書：75）と考えられました。

そこでこの尾崎氏のまっとうな考えを受けいれ、北京方言の歯音3等のそり舌音化を「//（切韻）→//（韻鏡）→//（近代）」（藤堂　1980：227）のようには考えないで、正歯音3等字は「そのはじめから硬い（中舌的な）聞こえをもった」（上文の2重下線）音であったと考えなおすことにします。そして正歯音3等字はその硬い中舌的な聞こえを保ちつつ、現在の軟らかい聞こえをもつ口蓋音（tʃ）に変化したと考えます。すると正歯音3等字はt（破裂音/t/）→ṭ（そり舌音/ʈ/：六朝時代）→tʃ（破擦音/tʃ/）のように変化したと考えることができるでしょう。そのために注85（B）で考えたT1（ṭ）→T2（ȶ）→T3（c）→tʃの変化を援用することにします。そしてそり舌音の聞こえに近似の音として中舌的な介音ï/ɿ/i（ただし、最後のiは前舌音）を考え、TαV（t）を追加して、（B）の変化を破裂音（Tα/T1/T2/T3）＋介音（α,X,Y,Z）＋主母音（V）の変化と考えなおします97。

このように考えなおすと、正歯音3等の変化は次のようにあらわせるでしょう。

　　 上古　　　　　　 六朝時代　　唐代　　　　　　 近代以後　　　現在

歯茎音　　　　　 そり舌音　　歯茎硬口蓋破裂音　 硬口蓋破裂音　破擦音

B.Tα（/t/）------→T1（/ṭ/）--→T2（/ȶ/）--------→T3（/c/）---→tʃ（/tʃ/）

C. Tα（1等）------→Tï（2等）--→Tɿ（3等）---------→Ti（4等）---→tʃ（正歯音3等）

Ⅰの変化（藤堂氏）：cj（4等）-→crj（3等）-------→cr（2等）：そり舌音化

Ⅲの変化（藤堂氏）：　　　　　　　　　　　　　　　　cj（4等）[tsi]→[tɕi]：尖音

＊iは前舌母音ですが、とりあえず上のように考えます。

＊Tα→Tïはそり舌音化で、北京方言の「戦」（tʃɪɛn）はTα→Tï→Tɿと変化し、そのまま現在（拼音zhān：そり舌音）98に至っているとみてあります。またTα→Tï→Tɿ→Tiと変化した最後のTi（藤堂氏のtsiにあたるもの）がtʃに変化したとみてあります。

＊Ⅰ・Ⅲの変化は藤堂氏の第一次的解釈による。第二次的解釈は注100。

このように支韻の変化をcj（切韻:4等）→crj（韻鏡：3等）→cr（近代：そり舌音2等）に変化したとみる藤堂氏の考えをすて、Tα→Tï→Tɿ→Ti→tʃ（破擦音）と考えなおすことによって、支韻3・4等の重紐問題99 、そり舌音化と舌尖母音ɿの発生100、仮4等韻の拗開音iの発生とその後の先仙の同用、近代の口蓋化（尖音・団音）などなど正歯音3等にかかわる多くの問題にたいしてよりよい説明ができるでしょう。

しかし先に書いたように（ï→）ɿ→iの変化はありえないとみられます。そこでこの困難をのりこえる、ï→ɿ→iの変化をみたす新たなアイディアが必要となります。そして第25節ではtʃ=を正歯音3等照母と歯頭音4等精母、またtʃ-を審母3等と心母4等とみたのですが、このtʃ=とtʃ-の違いはなにか、また同じtʃ=であるのに照母と精母（同じtʃ-であるのに審母と心母）と違うのはなぜか、さらにワル（記号‘・’）の有無の違いとは何かという問題もあります。

これら正歯音3等についての疑問を解決するためにはまだまだ長い考察を必要です。

1. あとふみ

7月に校正作業を続けるなか、「おわりに」（手直しまえの第19節）を書いたのが7月下旬近く、そして近々HPの更新をする予定でした。しかし一か月近くの校正作業を続けるなか、注31の声門閉鎖音（/ʔ/）と促音（/Q/）の関係、またʔ→Qの変化にたいする批判についてずっと気がかりでした。そしてそのうちにʔ→Qの変化は起きていなかったのでは、と感じるようになり、そこで続けていた校正を中断して、17節のあとにその問題を含めて新たに考察を続けることにしました。そして12月には更新できるかなと思っていたのですが、ついに年を越してしまいました。前回の更新から早や1年余が過ぎてしまったので、正歯音3等の問題、また注68の「脚踏子」の接尾辞「子」の問題にたいする考察も今回は中断することにしました。

次回は注68の「脚踏子」の接尾辞「子」の問題にたいする考察から書いてみようと思います。そのあと正歯音3等の問題を解決するためのアイディアを引きだすために撥音と促音について考えたいと思っています。

更新がさらに遅れ、またそのため校正も不十分になってしまったことお詫びします。なお、考察を新しくつけくわえる前のもとの考察は次のURL（表題は同じ）に載せてあります。

http://ichhan.sakura.ne.jp/japanese0hp.docx

2020.1.15

ichhan

以下の文章（第30節）は手直しまえに書いたもので、この「おわりに」（手直しまえの第19節）は必要のないものですが、記録としてのせることにしました。なお1-16・27・30節は新たな考察をつけくわえる前のもので、21-26節と28・29節は新たに書きくわえたものです。ただし手直しまえの17節は現在の17-20節に書きなおしてあります。

1. おわりに

ここまで考察を続けてきましたが、前回の更新から早や半年以上が過ぎ、考察も50ページをこえました。そこでこれを読んでくださる皆様の負担を考え、今回はここで考察を一時とりやめ、ここまでの考察を更新することにしました。

第6節では倭人伝時代の舌内入声をtuのような音、第11節ではキリシタン時代の舌内入声をtʔと考えました。そして第21節ではtuとtʔを統合させ舌内入声をtʔɿとみました。そこで上古舌内入声のTは呉音借入時代のt呉から漢音借入時代のt漢へ、その後、少なくとも連声が存在していた時代のtʔɿへと変化し、さらに現在のツ（tsɿ：ts）と促音のツ（/Q/）へ分化したと考えることができるでしょう。すると、このような変化をおこす原因を作った上古舌内入声Tとはどのような音だったのかという問題がでてきます。これは今まで上古舌内入声をtと考えてきた中国語音韻学者や日本語学者、さらには韓国・朝鮮語学者の誰もが考えだにもしなかった問題です。

今回は母音イとウの相関（母音イ→ウの変化）についての考察から上古・中古舌内入声はtではないことを示してみました。このイとウの相関はこれまで指摘されたことがない、「」がウ音便化して「」に変化したことにもみることができます。また前節（今回の第27節）ではï→ɿ→iの変化を考えることで、古代から現在までの母音イ→ウの変化をうまく説明できるのですが、ɿ→iの変化はありえないとみられます。また第16節では「tがi介母の後續によって「變る」とすれば、それはtiへであって、それ以外のものへではない。」（尾崎　昭和55：64）という亀井氏の強い非難も紹介しました。

まだまだ未解決の難しい問題が多く残っていますが、次回の更新では撥音便と促音便の関係を考えることから一つずつ問題を解決していきたいと思います。

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　2019.7.25

ichhan

【注】

1. 「陰声韻尾字（母音終止形）に比べて子音韻尾つまり陽声韻尾（m・-n・-ŋ）字と入声韻尾（-p・-t・-k）字の使用比率がきわめて低いことである。（中略）おそらく倭人語には閉音節が存在しなかったのではないかと推測される。（略）」（森博達　昭和57：161-4）。
2. 「菊」は見母屋韻3等入声kɪuk（藤堂・小林　昭和46：26）。語中・語末に母音iやuが添加される現象はハワイ語の英語借用語にもみられ、日本語とオーストロネシア語族との同源の証とすることができるでしょう。
3. 「「足常母が養ふの」（万二四九五）の例はタラツネノと訓めるが、タラチネの転としてこの形もあったものか。」（上代語辞典編修委員会編　1967：449）。
4. 「」（室町後期1499年成）は俳諧連歌の撰集。撰者未詳。「竹」は知母屋韻3等入声「ṭɪuk」（藤堂・小林　昭和46：26）。「チク・シツ」（藤堂　昭和53：956）。
5. 中古音は『音注韻鏡校本』（藤堂・小林　昭和46）の該当字のローマ字転写を利用します。これ以後はその書名・著編者名・発行年・引用ページは省略します。また上書に記載されていない漢字については『中古字音索音手冊』（庄司編　昭和37）の該当字の反切をもとに、『音注韻鏡校本』より該当字のローマ字転写を引用。
6. 「アジシキタカヒコネノ神の物語は、初めは「ア遅シキ」と表記されるが、物語の後半では「ア治シキ」と変わり、後半にある歌謡の中でも「ア治シキ」と表記される。」（木田　平成8：39）。「遲」はḍɪi。「治」はḍɪei。
7. 「おそらくは、「アジスキ（甲）」の方が、奈良時代における口碑の伝承にそのまま一致対応した形であって、これに対し「アジシキ（乙）」の方は、もはや当時は、古語的感覚を帯びたものとして伝承された形だったものではあるまいか。」（亀井　昭和59：136）。
8. 「tuku（「尽く」）＋i（動詞連用形語尾）→tukui（「尽きる・もの」）→tukï（「月」）」（大野　1978：200-2）。この動詞連用形語尾i（語構成要素；阪倉　昭和41：283）は古代助詞「い」の機能（崎山　平成2：101－5）の一つで、「原オセアニア語と古代日本語との著しい並行性」（同書：117）を示すものでしょう。
9. 上代特殊仮名遣いにはチやシの甲乙の別はありません（橋本進吉　1980：103）。しかし、服部氏はヒ（唇音）・キ（軟口蓋音）とチ（歯茎音）のそれぞれの口蓋化と非口蓋化に違いがあり、そのなかチは甲乙の別がヒ・キのそれよりも早く乙類が消失したとみられていて（服部　昭和34：286-7）、「古くは、「シ」や「チ」にも、甲乙の別が存してゐたのかも知れない。」（亀井　昭和59：138）との考えがあります。
10. 万葉集第20巻防人歌の4392番に「阿米都（天地）」（有坂　昭和30：518）がみられ、チが下総国埴生郡（現在の千葉県成田市近辺）ではシであらわれます。「地」はdii。「之」（之韻ɪei）と「志」（志韻ɪei）は同声（精母tʃ）で同音異声調（平声と去声）。この「地」と「之」の交替については「奈良時代東國方言のチ・ツについて」（有坂　昭和32：161-183）に詳しい。
11. 亀井氏は「志」の母音を乙類イ（中舌母音ï）と考えることで、「阿遅志貴～」のシ乙から「阿旎素企～」のスへの変化を考えられています。もし韻鏡の「」（tʃɪei）と「」（so）の音差に惑わされなければï（「志」の母音イ乙）→ɿ（「素」の現在の母音）の変化（シ・スの相通）を考えることができるでしょう。注86。
12. 筆者の時報音はチクタクやチックタクよりは「チーックタク、チーックタク、ボーン、ボーン」です。

「この（筆者注：タ行の「持ちて」や「たり」との接続などにあらわれる促）音便は實は今日の東京語などにいふ如く、急促に呼ぶものにあらで、なほ平曲に保存せられたる如くに前の音を稍長く呼びて次の音にうつり行き、中間の音は實は微にして殆ど省かれたる如き（下線は筆者）すがたになりたりしものにあらざるか。なほ後の研究をまつものなり。」（山田　昭和29：1766）と述べられています。

＊この音は促音（/Q/）の先祖q（第19節）とみられるでしょう。

1. 「3） 福州話の閉鎖音尾韻は, 以前は-ʔと-kの二組に分れていた可能性があるが, のちに次第に合併して行き, 今では, 大多数の福州人がすでに-ʔ 一組だけを持つようになっている。あるいは，-ʔと-kを分けているとしても，自分でも知覚できなくなっている。」(詹　昭和58:258)。
2. 「漢字語によって退けられた純韓国語の例としては、『訓民正音解例』に一度しか見られないsyu・rup（）を第一に挙げ得る。（『鶏林類事』に「傘曰聚笠」、『朝鮮館訳語』に「傘　速路」）この語は『訓蒙字会』ではu・san（雨傘）に置き換えられている。」（李基文　1975：206）。『雞林遺事』の民國板説郛で、「蛋曰批動」「射曰活孛」「笠曰蓋音渇」「梳曰苾音必」「猪曰宊」となっているほかは、『古今圖書集成』所載のものと同じ。＊「苾」竹冠字の代用。

また『朝鮮館訳語』の「白錢」は「「銀」を以て正しいとする。「迫引」は「白銀」の字音を寫したものであらう。」（小倉　昭和16.12：67）。

1. 「唐朝後半期の西北支那方言に於ける入声韻尾は、當時の吐蕃人によってb r gと轉寫されてゐる。但し、その中比較的古い時代の材料では、舌内入聲の韻尾をdで寫してゐる。」（有坂　昭和32:305)。『天地八陽神呪經』では、唇内入声の「合」は「hab」、喉内入声の「作」は「tsag」(高田　昭和63:352,386)。
2. 下表は金　2003：147より作表。

|  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- |
|  | 『東國正韻』 | 『洪武正韻譯訓』 | 『六祖』 |
| 1448年刊 | 1455年刊 | 1496年刊 |
| 「質」 | 지ᇙ（cirʔ） | 짇(cit：南方音)/지ᇹ(ciʔ：北方音) | 질（cir） |

＊『東國正韻』の声調（傍点）は省略。「「質」、「」などの韻は「ㄷ」音（[t]）を終声とすべきであるのに、世間では来母（[l]）を用いる。来母の声はゆるやかで入声にふさわしくない。（略）」（趙義成訳注　2010:173）。

＊『六祖』：『六祖法寶檀經諺解』。

1. 『中原音韻』：「韻部を十九に分けたこと、隋唐以来の平上去入の体系と異なって入声を声調として立てず、それを他の三つの声調（陽平・上・去声）に配分（入派三声）したことは、この書の大きな音韻的特徴である。」（大島　1998：233）。
2. 有坂氏の考え（有坂　昭和32:605-6）を下表のようにまとめました。

|  |  |  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- | --- | --- |
|  | 中古音　　　　　『中原音韻』 | | | 北京官話 | 福州音 |
| 百 | pʌk→(paik)-----→paiʔ---------------→ | | | pai | paik |
| 博 | pɑk→（pɑuk)→ | pɑuʔ | （包類）-----→ | pɑu | pauk |
| （薄類）→poʔ→ | po |

＊薄類(「薄」「箔」「泊」「博」)：肅豪韻の入声作平聲。包類(「包」「胞」「苞」)：肅豪韻の平聲陰。「博陌切　百柏」（庄司編　昭和37：62）。陌韻2等ɛk・3等ɪɛk。

＊「例へば「博」pɑkは福州音ではpaukになってゐる。」（有坂　昭和32：605)。

1. 入声韻尾弱化：「このような入声字の用法は宋代北方音を反映するものと確信される。中国の北方音では入声韻尾は唐、五代に弱化し始め、十四世紀に声門閉鎖音（ʔ）になったので、十二世紀初はこのような弱化（p,t,k＞b,d,g＞β,r,ɣ＞ʔ）の中間段階（β,r,ɣ）であったことは推察に難くない。」（李基文　1975：108）。この考え方については有坂氏の「入聲韻尾消失の過程」（有坂　昭和32：601-7）に詳しい。
2. 『四声通解』（崔世珍1517年）巻末にみられる『四声通攷凡例』に、「今ㄱ（-k）・ㄷ（-t）・ㅂ（-p）を終声にしてそのままㄱ（-k）・ㄷ（-t）・ㅂ（-p）音で発音したら，いわゆる南方音のようになりやすいから，ただ軽く用いて早く終わらせ，あまりはっきりしないようにするのがよい。（略）」（姜　1993：224）とあり、中国語南方音の入声と朝鮮漢字音の入声の違いが述べられています。
3. 「Skt. uttara, Pali uttara　（上，北，人名）

優多羅　呉・支謙訳「撰集百縁経」（223-253訳）

烏帯　三秦・失訳別訳「雑阿含経」（350-431訳）（略）」（水谷　昭和42：100）。

1. 倭人伝において陳寿が音訳したように書きましたが、もちろん魏使（謝　1983：99）などの報告や古記録によって、陳寿は「末盧」と記述したのでしょう。

魏志東夷伝中の「斯盧は『南史』夷貊伝新羅の条に「魏の時には新盧と曰い、宋の時には新羅と曰い、或いは斯羅と曰う」」（　昭和54：85）とみえ、また古事記仲哀天皇の条に「新羅之國」「筑紫末羅縣」（倉野校注　1963：271,271）とあります。このように「盧」（模韻lo）は「羅」（歌韻la）に表記が変わっていますが、音訳字「末」には変化はありません。そこで「末」の聞こえは倭人伝時代から奈良時代頃まで、ずーっと同じであったとみられます。

ところで倭人伝には「末盧」「奴」「伊都」がみられ、「〈盧〉〈奴〉がラ・ナであれば〈都〉もタ、すなわち伊都はイタ（後述の如く実はウタ）でなければならず（略）」（　昭和54：129）と、倭人伝の地名・人名などを恣意的に読むべきではないというまっとうな批判を氏はされています。そこで「」の表記が「」に変わったことは模韻の「盧」（la）がlo/luに変わったために、歌韻の「羅」（la）が新しい表記字に選ばれたと説明できるでしょう。しかし「松浦」の「」が「」（注21）のようにではなく、「」の一字で音訳されたことにはなおそれ以上の説明が必要でしょう。

＊「末盧」は「松浦」、「奴」は（博多の古名）、「伊都」は「」・郡（[筑前国](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E7%AD%91%E5%89%8D%E5%9B%BD)）に比定されています。

1. 「漢音/-k/の場合は, /-ŋ/の場合に併行して, ‘キ’または‘ク’のどちらかに一定して訳される。

/o,a,ə/のあと。「各」‘カク’，「屋」‘ヲク’, 「德」‘トク’, 「職」‘シヨク’（ただし職韻は,呉音シキ）

/e,ɛ/のあと。「昔」‘セキ’,「歷」‘レキ’

また/t/は呉音で‘チ’に訳されることがあったが，漢音では‘ツ’に訳される。（略）」（藤堂　1980：171）。

1. （本文より続いて）「さらに《廣韻》の「支」韻では，「皮3＝符羈切」，「陴4＝符支切」の二つの反切を区別し，また「眞」韻においては，「●3＝於巾切」，「因4＝於眞切」を区別している。これらは反切上字が同じでそれぞれ「並」母および「影」母を表すから，いよいよもって反切下字の表す韻母の一部分に，何らかの細かい区分の存在したことを物語るものと言わなければなるまい。」（藤堂　1980：212）。

＊●3の字の部首は鼓、その下部は「因」の字。

1. 詹氏は本文の「河北と江南で，最も大きく異なっており」のあとで、「当時の南北方言の差は多分それほど大きなものではなかったであろう。（略）」（詹　昭和58：142）と、自身の考えを述べられています。
2. 「日本漢字音はさらに，いわゆる〈呉音〉〈漢音〉〈唐音〉の三層に分かれる。（中略）また推古朝の遺文にみえる音訳漢字は，古く漢魏音の特質を存している。」（平山　昭和42：136）。
3. 「いわゆる「」とは、撥音や入声音-tが下に母音や半母音（すなわち、「ア・ヤ・ワ」行音）をとるばあい、それと融合して、それぞれ、ナ・マ行音（撥音のばあい）タ行音（入声音-tのばあい）に発音される特殊な発声法を云う。現在でも、「」「」「」「」など慣用的に保存されているものもある。また、方言的には「本読む」（「本を」の連声）などの形で残っているところもある。」（外山　昭和47：229-230）。
4. 濱田氏は舌内入声がtとみられる理由として、以下の項目をあげられています（濱田　昭和58：82）。一部、筆者で加除し、まとめました。

「（一）『日本大文典』など、キリシタン資料の記述

（二）謡曲における発声法の口伝及び秘伝書の記述

（三）タ行連声（、など）の変化が説明しやすい。

（四）舌内tは促音形（「」）、また唇内pと喉内kは非促音形（「」・「」）となる違いがみられる。

1. 「なお『捷解新語』のccuというハングル表記が、もし信ずべきものであるとするならば、当時の「つ」（舌内入声韻尾のみならず一般にツの音節すべて）は現代語の[tsu]とは異り、その前にglottal stopを伴う[ʔtsu]もしくは [ttsu]の様な音であったのかも知れない。しかりとすれば、『日本風土記』が「」を「子」で表わしているものも、よりよく理解出来るであろう。」（濱田　昭和58：92）。
2. 琉球方言の喉頭破裂音（声門閉鎖音/ʔ/）と語頭促音について：宮良　昭和57：76－193。また奄美方言の喉頭化音を八重山方言などの語頭促音と誤認しているという批判は同書：解題14-5。ただし、上村氏の批判にある「語頭促音＋破裂音」→喉頭化無気音の変化はその逆。たとえば「」はsetʔɿ→seqtɿ（第21節）。次注。
3. ʔ（/ʔ/：声門閉鎖音）→Q（促音）の変化と、ʔ→Qの変化にたいする批判については【以前の考察】の注29～31。
4. 中古の舌内入声をtʔと考えても、なお残る疑問は【以前の考察】の注32。
5. Siebold（1826年刊）に、「たとえば，Nipponbas（日本橋 p43），Amaksa（天草 p61），Kadsusanoske（上総介p62）のように、母音i，uをはぶく書き方がかなり規則的、一般的にみられるのであって、明きらかに無声化を表わしたものと思われる。」（宮島　昭36：43）。
6. 「母音の脱落がいろんな条件のもとで同様におこっていることは、これが無声化をしめすものであるよりはCocksの聞きとりの問題であることの証拠である。（中略）おそらくCocksの日記は無声化があったことをも、なかったことをも積極的にいうための資料としては不十分だと思う。」（宮島　昭36：47）。
7. 「iとoeとは，若干の語の一定の部分では，非常に弱い音となるので，音がないかのように思われ勝ちである。日本人はシタ，sitɑ （下）をstɑ；ワタクシハ，wɑtɑkoesivɑ （私）をwɑtάksɑ；ヨク，jokoeをjok；マシ。マス。マシタ，mɑsi,mɑsoe,mɑsita，をmάsi,mɑs,mάstɑ；（以下、語例略）などのように，それぞれ発音する。」（クルチウス　昭和46：13-4）。
8. 「室町時代においては、むしろ「ござある」といふ古い形の方が行はれてゐたものであるが、すでに耶蘇会板の口語文献や捷解新語では、狂言と同じ「ござる」の形に短縮してしまってゐる。」（亀井　昭和61：414）。
9. 『天草版平家物語難語句解の研究』：

「1592～93年天草学林刊平家物語・伊曾保物語・金句集3部合綴本」（森田　昭和51：凡例ⅶ）の最後にあるバレトの「手書き」の部分。そこには「aỳtogozar（会イタウゴザル。2右－10）」「Cacaru meni y maraʃur（斯カル目ニイマラスル。5左－22）」（同書：315,316）。またバレトの自筆写本（1591年記）には「（上略）tayegato gozar（堪エ難ウゴザル。343v-2注）（改行）yri maraʃur（要リマラスル。348-15注）（略）」（同書：316）など、語末のuは表記されていません。

＊M. Barreto（1564ごろ-1620年長崎没）は1590年宣教師として、日本に帰国する天正遣欧少年使節と共に来日。1613年にマカオへ、1618再来日（同書：251-2）。

1. 「ロドリーゲスの文典では「まいらする」と「まらする」とを並べて述べてゐて、明かに後者を前者の省略形と認めてをり、後者の方が敬意が薄かったのであるが（163.R.）、やうやく口語の上では「まいらする」の方は用ゐられなくなったので、（略）」（亀井　昭和61：395）。  
   　＊この「まらする」は捷解新語の本文かな表記では「まるする」となっています。
2. 注37で例示した、バレトのgozarとmaraʃurの特異な表記（語尾uの無表記）について、「当時の話し言葉において，使用頻度の極めて高かったゴザルとマラスルとに限られていること，しかも双方とも文末終止の用例が圧倒的に多い事実に注目すれば，その場合の語尾の発音に注意して，これら2語に固定的に用いたのであろうと考えられる。」（森田　昭和51：317）でしょう。また森田氏はアクセントとの関係も考慮され、「ゴザルやマラスルの末尾音節に強勢あるいは高さの山がなかったものとすれば，末尾音節の「ル」において，その母音〔u〕は，とかく聞えの不分明なものになりやすかったであろうと考えられる。バレトは，このような音声的事実を耳さとくとらえて，gozar，marasurという特異な綴字であらわそうとしたのではあるまいか。」（同書：317-8）と考えられました。
3. A.「全国を通じ、無声化の傾向の特に烈しい地域としては、東京を含む関東西部の地方と、九州の大部分の地方とが両大関の格にある。」（東條編　昭和30：116）。

B.「（略）東京などの右にあげた場合のス・ツなどに見られる母音の無声化は、母音の脱落と言った方が、実はふさわしい。が、脱落の最も盛んなのは、九州で、ことに総説にのべた薩隅式方言地域――鹿児島県下が本場である。」（同書：118-9）。

1. 首里方言のcは旧平民や女子供の、çは旧貴族・士族の成年男子の発音。çは「〔ts〕～〔tş〕」（国立国語研究所編　昭和51：39）。

＊IPAではçは「硬口蓋摩擦音」（国際音声学会編　2003：243,237）。

1. 1729年カムチャッカ半島に漂着した、薩摩の少年ゴンザ（権左）がロシア人アンドレイ・ボグダーノフとともにあらわした『日本語会話入門』『項目別露日辞典』（ともに1736年）、ほかに『新スラブ・日本語辞典』などがあります。江口氏は「本稿では主に、『日本語会話入門』・『新スラブ・日本語辞典』を対象」（江口　平成3：17）として、考察されています。
2. 本文に紹介した資料に最初に注目されたのは村山七郎氏です。「（6）語末音節の母音は弱まっているが，いわゆる「促音化」は見られない。（改行）首 kub´（クビ），蛇 feb´（フェビ），指 ib´（イビ），靴 kuc（クツ），取る tor（トル）。」（村山　昭和40：34）。ほかにも迫野氏（迫野　1991：336）などの考察があります。

＊下線は原文では白小丸。

1. メキシコ国王に送った家康の手紙（1612-慶長17年）に「Minamotono Iyeias」（宮島　昭和36：48）と語末母音の無表記がみられます。そこで宮島氏は「一つの可能性として、Rodriguezが都のことばを対象としているのに、家康の署名などは東国方言をもとにしたために違いがうまれた、ということも考えられる。（略）」（宮島　昭和36：48）と、スの母音の無表記を方言差に求める考えをだされています。しかし母音の無表記がコリャードにまで遡れるのは事実としても、母音の無表記をただちに（単純に）母音の無声化とみることは事の本質を見誤ることになるでしょう。
2. A.「Cha,Cho,Chuと発音する。―現代ポルトガル語のchは[ʃ]を表わすが、この時代は[tʃ]を表わしていた。[tʃ]＞[ʃ]の変化は『小文典』の時代より後に生じた。」（ロドリゲス　1993：265-6）

B.「Xa,Xo,Xuと発音する。―この時代のポルトガル語の表記法では、xはつねに[ʃ]を表わした。」（同書：266）

C.「Tçuはイタリア語のzu原注＊と同じように発音する。」（同書：58）。

＊上のzu原注＊：「イタリア語のzu―zuはこの時代も現代も[tsu]（そして時に[dzu]）を表わす。」（同書：266）。

1. チ・ツの破擦音化は「禅宗がもたらした唐音資料にも反映していて、中国語の精母・清母・照母等の破擦音を写すのに、鎌倉時代に日本に伝えられた臨済曹洞系唐音では「ス（子）」、「シン（清）」、「シヤ（者）」、江戸初期の黄檗系唐音では「ツ（子）」、「チン（清）」、「チヱ（者）」、のような違いをみせている（この変化には一方でサ行子音の摩擦音化が絡んでいる）。」（高山倫明　2012：20）。
2. 「§56　IPAの[ʃ]は、厳密には日本語の「しゃ、し、しゅ、シェ、しょ」の子音を表わすのに適しない。（略）ɕ（ɕは筆者補）を用いた方がよい。（略）（中国語の：筆者補）例えば「西」xī(シー）、「小」xiăo（シヤオ）、「謝」xiè（シエ）のxの音がそれであって、この子音と日本語の「しゃ、し…」等の子音とは非常によく似ている。または等しい」（川上　昭和52：47）。
3. 高山知明氏は「（あ）二つの狭母音（筆者注：イとウ）の前でほぼ同時（筆者注：ほぼ同じ頃）に破擦音化している。（改行）（い）タ行ダ行破擦音化以前に，体系内に破擦音素（筆者注：tʃとts）が存在していない（原注2）。この変化によって破擦音が新たに生み出されている。」の2点をあげて、ツの変化を窪薗氏のような同化とみることは難しいとみられています（高山知明　2009：213）。
4. 下記の母音分類表（2）は佐藤　2002：11。また馬　2015：2の【表1】。注69．

|  |  |  |
| --- | --- | --- |
| 舌尖母音 | 舌尖前 | 舌尖後 |
|  | 非円唇　円唇 | 非円唇　円唇 |
|  | ɿ　　　 ʮ | ʅ　　　 ʯ |

1. 引用本文で中略とした記述は次の通り。

「ウェイドは『語言自邇集』の序論で、このおんを表はすに適當な文字がなく、これにあたる母音がイギリス語等に存しない由を述べて、**說**明の困難を感じてゐるが、もつともの事である。この母音が北京官話でも〔s〕と〔z〕との次だけにあらはれることは、すこぶる面白い。」（佐久間　昭和4：94）

そこでウェイドが適當な文字がなく**說**明が困難と感じた音は、聞こえが不分明で微細な母音に似たz、つまり舌尖母音ɿ（佐久間氏は中舌母音の）と考えることができるでしょう。

1. 「だいたいに北奥羽ではシ・スは[sï]、チ・ツは[tsï]、ジ・ズは[dzï]でそれぞれがシ・チ・ジに近い音、南奥羽はそれぞれ[s][ts][dz]でむしろス・ツ・ズに近い音と観察されている。従って東北方言では、アクセントは別として、・・が同音で[sïsï]あるいは[ss]となり、・・も同音で[tsïtsï]あるいは[tsts]となることになる。」（北条　昭和57：161）。
2. 宮古方言の母音イ（ɿ）を音節主音とみる、あるいは成節的子音とみる見方があり、各氏の考えが「宮古方言の「中舌母音」をめぐって」（かりまた　昭和61：54-64）に紹介されています。

＊ニコライ・ネフスキー (N.A.Nevsky　1892—1937) はロシアの東洋言語学者。彼の手書きノートの複写本「宮古方言ノート」（上下巻；沖縄県平良市（現宮古島市）教育委員会　2005.3　未見）が刊行されています。

1. 「中舌母音〔ï〕の典型的なものは、ロシア語に「イェッリ」と稱する字母ыの示す母音であつて、日本では東北地方の方言にしばしばあらはれる。」（佐久間　昭和4：95）。　たとえば「」（[sɯ]）のスの母音は[]、そのあとのウは平唇の[ɯ]という違いがみられます。「「スウ」（吸ふ）、「ツーウン」（通運）」（同書：92）。

馬氏は「筆者の観察によれば、京都のス・ズ・ツの母音は非円唇[ɿ]というよりは、円唇[ʮ]（筆者補：注49の舌尖前円唇母音）であると見ることができる。そう考えれば、[ʮ]がツ・ヅの破擦音化のきっかけとなることは[ɿ]と同じく解釈することができる。」（馬　2015：15）と考えられています。

1. 「そこ（筆者注：中国人向けの日本語の教科書）においてウ段音にはもっぱら母音[u]の漢字を用いているが、ス・ズ・ツについては母音[ɿ]の漢字で当てることが多い。これはス・ズ・ツの母音が常に他のウ段音と異なり、母音[ɿ]で現れることを意味する。」（馬　2015：9）。
2. 「母音の音色は，咽頭及び口むろの共鳴室の形によって決定するもので，舌の最高點のみを問題とするのは正確ではない。」（服部　1951:73）という批判があります。同じような批判は橋本萬太郎　1981：219-221にも。また舌の最高点をトレースした、D,Jonesの母音多角形の外に位置する母音、たとえば舌尖母音ɿなどが存在するという批判は幸雄　平成4:44-5。
3. iとɿの調音位置については下表。〈　〉内のɿ/ʅは馬氏の見解（馬　2015：6）。

|  |  |  |  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- |
|  | 歯茎 | 後部歯茎 | 歯茎硬口蓋 | そり舌 | 硬口蓋 | 軟口蓋 |
| 閉鎖音 | t/d | | ȶ/ȡ | ʈ/ɖ | c/ɟ | k/g |
| 鼻音 | n | | ȵ | ɳ | ɲ | ŋ |
| 摩擦音 | s/z | ʃ/ʒ | ɕ/ʑ | ʂ/ʐ | ç/ʝ | x/ɣ |
| 接近音 | ɹ | |  | ɻ | ｊ（ɥ） | ɰ（w） |
| 母音 | 〈ɿ〉（ʮ） | | | 〈ʅ〉（ʯ） | i（y） ɨ(~~u~~)　 ɯ（u） | |
| 舌尖 | | | | 前舌　 中舌　 後舌 | |

＊シュービゲル　1982：62の第16図より作表。また城生　1992：81の図5-11。馬　2015：6の表2。

＊斜線（/）の左は無声音、右は有声音。舌尖・前舌・中舌・後舌母音と接近音の（　）内は円唇母音。

＊硬口蓋歯茎摩擦音（/ʃ/）は1989年版IPAからは削除され、名称が後部歯茎摩擦音に変更になっています。また歯茎硬口蓋摩擦音（/ɕ/）は1979年版IPAからは削除され、その他の記号に移されています（ともに城生　1992：76,59）。

1. 「入声の～tは，Fitjet（筆舌），Xutbot（出没）のようにtで写している。字音語に限るのは当然であるけれども，‘しもと’（笞・楉）の転‘しもつ’をXimotとし，‘手伝ひ’の転訛形をTetdaiとしているのによれば，字音の影響によって稀に和語にも現われたのかと思われる。（改行）この～tは開音節形してtçuになることがあった。‘蜜’は，単独の場合はすべてMitçuとあり，羅葡日も同様であるから，これなどは早く開音節化したらしい。（以下、略）」（土井・森田・長南編訳　1980：854）。しかし、和語のツと漢語の入声を同じt ɿとみれば、和語に入声形があらわれるのを字音の影響とみたり、漢語に入声形ではなく開音節形があらわれるのをその漢語が早く開音節化したとか考えることはまちがいといえるでしょう。
2. 現在の促音（ッ：/Q/）の先祖を平曲などの促音q（注12；山田　昭和29：1766）とみれば第21節の世阿弥の小書きの「ッ」との関係を考えることができるでしょう。
3. 注31のʔ→Qの変化にたいする批判は声門閉鎖音（/ʔ/）そのものが促音（/Q/）に変化したと考えることから起こった批判です。喉頭化音の「」（secʔɿ）がセツツ（seqcɿ：ツは促音Qの先祖q）へ、その後セツ（secɿ）へ変わったと考えれば、ʔ→Qの直接の変化を考えないのでその批判はあたらないでしょう。そのかわりにʔ→Qの変化は‘はっきりした声立て’（ʔ声門閉鎖音/ʔ/：ㆆ）から‘ゆるやかな声立て’（口蓋垂鼻音/ɴ/：ㅇ）への変化（ɴʔ→ɴ：次回考察します）と考えるのがよいでしょう。

＊「はっきりした声立て」（/ʔ/）と「ゆるやかな声立て」（/h/）の違いは服部　1951：28。また「声立て」と「声止め」については日本音聲學會編　1976:326,327。

1. 「まゐらする」の後裔が「まらする」（日葡辞書：「Marasuru」）です。しかし同時代の捷解新語の本文かなでは「まるする」（마루수루marusuru）がみられます。そこで小松氏のようにmarasuru→marusuruの変化を考えるのではなく、marasuruとmarusuruは同じ語（ある種のダブレット）であったとみるのがよいでしょう。しかしそう考えると同じ語であったのになぜ表記はこのように違うのかという重大な疑問が起こるでしょう。後の更新で詳しく考えます。
2. 小松氏は「参ゐらする」から助動詞「ます」への極端な「すり減り」が起こったと考えて、その変化の背後にある理由を日本語に「効率的な運用」（小松　昭和56：330）が行われたためとみられました。しかし効率的な運用云々と考えるまえに、「まゐらす（る）」から「ます」への極端なすり減りが起こったのは真実の変化なのかと問うことが必要でしょう。
3. 「まる1する2」の「る1」の消失については次の記述が参考になります（秋山　昭和58：218-220）。

「（略）ランコッバッカーッエバタルッゾ（要らざる事ばかり言えば殴つぞ）。同前宮野河内」（中略）

（4）弱母音化通則（中略）前述のようにラ行音節が特に弱母音化するのは、特に語中・語尾のラ行音が不安定であるほかに、熊本方言では広・中開母音の音節に下接するラ行音節が反り舌音の[ɽ]で発音されるからである。これは舌先が反り返って口腔の上方の奥の方にまくれ込むので、その母音はü・ïのようなくぐもり音・曖昧音の弱母音にならざるを得ないのである。（略）したがって「ɽ」音音節の母音は脱落するに近く、反り舌運動のみが行われるか、その音節が内破音的促音に移行するか、そのどちらか（筆者注：たとえば[bakaɽu]・「～ɽ」）になることが多いのである。」

そこで捷解新語の「まる1する2」（마루1수루2）の「る1」をrɿとみれば、その루1（ru1）の影響によって喉頭化音が生じ、それを韓国語では濃音ととらえ마쓰루2 （ma ssɨ ru2：重刊改修捷解新語）の表記になったと考えることができるでしょう。このような喉頭化音（声門閉鎖音の発生）は現代の与那国方言の「」の変化（sɿta→）「[tʔa]」（橋本萬太郎　1981:357）にみられます。

1. 「（略）その表記法は、大体において、前記世阿弥自筆の曲（筆者注：『松浦の能』など）と同様であると言える。しかしてこの書（筆者注：世阿弥の『花習内抜書』）では、入声ツをすべて小書にしている。（以下、文例は省略）」（岩淵　昭和52：220-1）。

＊省略した文例中には、「ホンゼッ」（本説）「ケック」（結句）「ジセッ」（時節）「コシッ」（故実）がみられます。

1. 注22で倭人伝の「末」の音は奈良時代頃までかわりがなかったとみたので、世阿弥時代の入声をtʔɿとみれば、倭人伝当時の「末」はmuatʔɿと考えることができるでしょう。そう考えれば第6節で地名「松浦」の「松」（matʔu）を音訳するためのぴったりな漢字を「末」（muatʔɿ）とみたことに問題はないでしょう。しかし倭人伝の「末」の舌内入声がtではなくtʔɿであったとみれば、それ以前、つまり上古舌内入声はどのような音だったのかという重大な疑問がでてくるでしょう。
2. 捷解新語と重刊改修捷解新語のツ・スにたいするハングル表記の違い。

|  |  |  |  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- |
|  | 捷解新語（1676年刊） | | | 重刊改修捷解新語（1781年刊） | | |
|  | まるする |  |  | 御さりまする |  |
| 表記 | 피도쭈 | 마루수루 | 셰쭝 | 히도쯔 | ᅁᅩᅀᅡ리마쓰루 | 셰쯔 |
| 翻字 | phi to ccu | ma ru su ru | syəi ccuŋ | hi to ccɨ | ŋko za ri ma ssɨ ru | syəi ccɨ |

＊『捷解新語』と『重刊改修捷解新語』の語例：京大國語國文研編　昭和47：35上,12上,14上/69下,30下,257下。

1. 「च　ca　本郷佐字音勢呼之。下字亦然。但皆去聲。此字輕微呼之。下字重音呼之。

छ　cha　斷氣呼之。

श　śa　以本郷沙字音呼之。但唇歯不大開、合呼之。

ष　ṣa　以大唐沙字音勢呼之。但是去声。唇歯不大開。合呼之。

स　sa　以大唐娑字音勢呼之。但去声呼之。」（有坂　昭和30：469）

＊梵字はデーバナガリ文字で代用。「佐」（tsa）。「沙」（ṣa）。「娑」（sa）。

1. 「諷經の唐音にも、左（筆者注：下）のやうな面白い對立が現れてゐる。

帝（チ）　　ti　　　知（シ）　　tʃi

頂（チン）　tiŋ　　 證（シン）　tʃiŋ

都（ツ）　　tu　　　祖（ス）　　tsu（以下、略）」（有坂　昭和32：197）。「帝」は端母4等（tiei）。「知」は知母3等（ṭɪe）。

1. 「（上略）又、キヤタツ（下線は筆者補）は、支那では脚踏子とも言ふけれど、我が國では、古來脚踏又は脚榻（榻は踏と同じ）とのみ書いてゐて、「子」の字は着けない。然らば、チヤツやキヤタツのツは、「子」の音ではなくて、寧ろ、「楪」や「踏」（「榻」）の原音の入聲短促の勢を表し、或は、原音の韻尾に存在したと思はれる聲門閉鎖の音を寫したものであるかもしれない。（以下、略）」（有坂　昭和32：684）。

そこで有坂氏は1400年頃の中国語「脚踏子」はQiatatʔ（日葡辞書「」の発音を借用、また対応する音を下線で）、またその指小辞「子」はtʔであったと考えられているようにみえます。しかしこのように当時の「脚踏子」の語尾に声門閉鎖音（/ʔ/）があるとみれば中国語の舌内入声韻尾がtであったという通説（注28）とは齟齬するでしょう。

また舌内入声韻尾の「薩」は呉音「サチ」、漢音「サツ」（藤堂　昭和53：1137）ですが、唐音より以前の新漢音では「菩薩」は「ホサ」（同書：173）となっていて、舌内入声韻尾tは消失しその韻尾は声門閉鎖音（/ʔ/）であったとみられます。ところで「踏」（合韻əp）の唇内入声韻尾pは舌内入声韻尾tよりも早く消失しているとみられているので、「脚踏」の韻尾はすでに ʔ（声門閉鎖音）になっていたと思われます。そこで新漢音より後の時代に借入された唐音「脚踏」（Qiataʔ）はキャタと発音されたと思われますが、そうではなくキヤタツです。中国語を借入した「脚踏子」（Qiatatʔ）の韻尾tʔが開音節化したというならキヤタツというのもわかるのですが、「脚踏子」の「子」のない「脚踏」の発音がキヤタツというのはなぜでしょうか。

この疑問は指小辞「子」に関係していると思われますが、更新が遅れているので書きはじめていた考察はここで中断することにします。

＊「Qiatatçu.キャタツ（脚榻）　Qiatat（脚榻）と言う方がまさる.同上.」（土井・森田・長南編訳　1980：492）。

＊「踏」：「注「蹈」「沓」の書きかえ字として用いることもある。」（藤堂編　昭和53：1280）。

＊「榻」：透母盍韻1等入声thap（藤堂・小林　昭和46：104）。「沓」：定母合韻1等入声dəp（同書：102）。

1. 「元代の『中原音韻』（筆者注：周徳清1324年刊。注17）は、はじめて舌尖前母音・舌尖後母音（筆者注：注49）韻母だけからなる韻を、支思韻という名で独立させたのである。『西儒耳目資』（筆者注：明末1626年刊）では、この舌尖前母音をローマ字でůと表記している。」（佐藤　2002：80）。Ůの白丸は黒丸点の代用。
2. 以前のサ行音の考察については「「須須」と鳴いた雀はいま」（saline/saline1.html）。さらに以前の考察は【以前の考察】の注66。
3. 「都（筆者注：ツ）類に對應する音節を登類（tÖ）や斗類（to）の假名で寫した例（筆者注：「多都久　立月」（有坂　昭和32：179））がある。これによつて思へば、標準語の都類に對應する音節は、武藏あたりではこの頃まだ單純なtで始る音節だつたのであらう。（中略）現今、土佐の或方言では、ツ・ヅは未だtu duに近い音を持つてゐるが、チ・ヂは、標準語のtʃi dʒiに比すれば幾分ti diに近いものの、頭音が既に一種のアフリカータとなつてゐるのである。（音聲學協會會報第十九號所載岩淵悦太郎氏「土佐方言」參照）。これら類推すると、東國方言に於ても、チの頭音のアフリカータ化が、ツの頭音のアフリカータ化より一足先に起つたことは、有り得べきことではないかと思はれるのである。」（同書：179-181）。
4. 稲荷山鉄剣銘には次のような表記がみられます（村山　1988：18）。

「サ　沙　ṣa＝**sa**　　　（人名｡ワケは官職名）　ta**sa**kïi

　　　差　ṭṣ‘ă＝**tsa**　（人名）　ka**tsa**payo

シ 斯　sie＝**si** 　　 （宮殿名）　**si**kïi-miya

　　 次　ts‘ii＝**tsi**　（人名）　takapa**tsi**

ス　足　tsiuk＝**tsu**k　（敬称）　**tsu**kune（原注23）

スにはtsuとならんでsuもあったことが推定される（原注24）」

1. 下表は王　1985：491より、一部省略。

|  |  |  |  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- |
|  | | 先秦 | 南北朝 | 隋唐 | 明清 | 現代 |
| 精母 | （臧） | ts | ts | ts | ts | ts |
| （将） | ts | ts | ts | ts | tɕ |
| 心母 | （桑） | s | s | s | s | s |
| （相） | s | s | s | s | ɕ |

「＜精母＞（改行）中古[ts]――近代[ts]――現代[ts]/[tɕ]」。「＜心母＞（改行）中古[s]――近代[s]――現代[s]/[ɕ]」（佐藤　2002：26,27）。

1. 「」（心母虞韻siu）をtsiu（精母虞韻：「諏」）ではなく、tʃiuと考えることについて：

1．慈覚大師の『在唐記』：「च　ca　本郷佐字音勢呼之。」（有坂　昭和30：469）。

2．唐僧智廣の『悉曇字記』：「च　者字（止下反音近作可反）」（同書：475）。

＊「佐」：精母箇韻1等去声tsa。

＊「者」：照母馬韻3等上声tʃɪă。

止下反；tʃɪei（照母3等）＋ɦă（馬韻2等）→tʃă。

作可反：tsak（精母4等）＋kha（哿韻1等）→tsa。

＊有坂氏の表記は『音注韻鏡校本』（藤堂・小林　昭和46：83,79）の翻字tʃɪă/tsaで代用。

3．「（四）ca左上　突舌（略）即ち、慈覚大師に悉曇の發音を教えた所の寶月三藏も、亦caに「左」（筆者注：精母哿韻1等上声tsa）を充ててゐる一人である。（略）支那語のťś（照母三等）は梵語のcよりも更に一段と口蓋的な音であつたため、梵語のcは聽きやうによつては寧ろ支那語のtsの方に一層近く聞える傾向が有つたものであらう。（略）かやうに考えると、寶月三藏のcaが大唐者字音tʃɪă（筆者注：上の2の「者」の翻字で代用）よりもむしろ本郷佐字音｛tsa｝に近く響いたことも、充分有り得ることと思はれる。」（同書：477-8）。

このように梵語のca（च）は「者」（tʃɪă）であり、その「者」は止下反（tʃă）であるとしながらも作可反（tsa）に近いと智廣は記述しているので、「者」（tʃɪă）と「佐」（tsa）はかなり近い音であったとみることができるでしょう。そして「諏」（精母tsiu）と「須」（心母siu）は同韻で声母だけが異なっていますが、「須」と「諏」は同じ声母をもっていたと通説に反する想定をします。また古代人は雀の鳴き声を「須須」（心母siusiu）と写し、その同じ鳴き声を我々は（→）と聞きなしています。そこで「者」（照母3等tʃɪă）が「佐」（精母1等tsa）の音に近いとみれば「須」をsiu（心母4等）やtsiu（精母4等）ではなく、tʃiu（照母3等）と考えてもよいでしょう。

1. 平安時代の平がな文に「嬰伊阿宇　歷リ阿口」（馬淵　昭和46：93）がみえ、「後世、「チヤク」「ギヤク」（筆者注：「恐」「」）などと書くようになったものが、平安時代の極初期には、「ヤ」の代りに「ア」が書かれていた」（同書：93）ので、ギアク→ギヤク→ギャク（「逆」）の変化を考えることができるでしょう。そこでチウ→チユ→チュウの変化を考え、チウなどがワッテ（‘-’）発音されていたとみるならスはtʃi-u（「」）→tʃi-u（シウ）→tʃi-u（チウ）→tʃiu（チユ）→tʃu:（チュウ）→tʃuɴ（チュン）のように変化したと考えることができるでしょう。

＊「（略）miacuが普通である。その一方に，（筆者補：日葡辞書）補遺にはまた，（改行）Miyacu.（脈）脈搏.ただし，*Miaco*（脈）と発音する. （改行）とした1条がある.」（土井・森田・長南編訳　1980：853）。

1. 童謡「雀の学校」の歌詞「ちいちいぱっぱ」が「「ちいちい」というスズメの声に、軽やかな羽音「ぱっぱ」を組み合わせたものと考えられる。」（山口仲美　1989：132）ならば、雀の鳴き声はまたチイチイと考えてもよいでしょう。
2. 「（2）「鈴虫」と「松虫」の名は、いずれも平安時代の作品から現われるが、現在のように「リーン、リーン」と鳴くのを「鈴虫」に、「チンチロリン」と鳴くのを「松虫」というように、鳴き声によって区別することができる文献は江戸時代に入るまで見当たらない。（略）」（日本大辞典刊行会編　昭和49（第11巻）：425）。そこで「鈴虫」を「と鳴く虫」とみれば、命名された「鈴虫」の江戸時代以前の鳴き声をチンチンと考えてもよいでしょう。
3. 「音便は平安時代にはいって一般化したが、その中でもイ音便・ウ音便が古く、ついで撥音便・促音便の順で発達した。（略）」（中田　昭和47：28）。

＊チイ→チウのイ→ウの変化は第2・3節と27節。

1. A.「「本郷佐字音」と「本郷沙字音」との區別は、萬葉假名としての用法の上から考へれば、何處にも見出されない。兩者は假名としては古事記以來常に相通用するものである。（略）佐と沙の間には恐らく直拗の別があつたものと思はれる。（略）沙は・・の如く佛語ではシヤと讀まれるのを常とし、辞書類には皆呉音シヤと記してある。（引用例は略）よつて思ふに、在唐記に所謂「本郷佐字音」とは直音サを意味し、「本郷沙字音」とは拗音シヤを意味するものではあるまいか。」（有坂　昭和30：478-9）。

B.s-a（さ）は現在のサ（sa）ではなく、『音韻断』（泰山著1799年刊）に「サ・セ・ソはスア・スエ・スオと発音するのであるといって（略）」（三木・福永　昭和41：138）とあるように、tʃ-i・a（「娑」）の後裔とみられる、ある種のサの音。呉音の「」（筆者のtʃ-iă：麻韻2等ṣă）はs-aへ、そして現在のサ（漢音）へ変化したと、今は考えてあります。

1. 「Iijimequ（じじめく）。例へば，Suzumega jijimequ.（雀がじじめく。）雀が喧しく鳴く。」（ロドリゲス　昭和30：419）。また「ネズミは、スズメと同じように、「ジジ」と鳴くばかりではない。実は、日本人は、ずっと昔から、ネズミの声とスズメの声を、同じことばでうつしてきたふしがある。（中略）スズメの声も江戸時代になると、ネズミと同じく「チウチウ」と写される。」（山口　1989：119-121）。また『枕草紙』には「～雀の子のねず鳴き（筆者注：波線は右波線の代用）するにをどり来る。（「うつくしきもの」）」（同書：120）とみえるそうです。そこでネズミとスズメの鳴き声「ジジ」を「チ」の連濁の反復語とみれば「千鳥」のチと「鈴」や「雀」のスを同源とみることができるでしょう。
2. 「オ段長音は[ɔ:]と[o:]とがあるが、キリシタン資料（原注9）では前者をŏと書き、後者をôと書いた。またかなづかい書では、前者を「ひらく」、後者を「すぼる」といった。」（馬淵　昭和46：115）。またこの「中央語史における〔ɔ:/o:〕の音韻対立が、比較的短命だったためか、現代諸方言においても、その様な発音は、越後中部など、ごく一部の方言に存するのみなのである。」（奥村　昭和47：109）とみられています。しかしこの「開合の別に対応する区別は、中越方言で[ɔ:/o:]、雲伯方言で[a:/o:]、北部を除く九州方言で[o:/u:]の形で保たれている。」（高山倫明　2012：24）としても、「そもそも、長音にのみo対ɔの音韻的対立が存するというのは、体系的に不自然である。（略）」（阪倉編　1976：29）と考えられます。

＊「音韻論的には、オ段長音も、特にその中の例外である「わう、くわう」及びイ段の「きう、しう」などと共にまだ「割る」段階に、すべてあった、と考えるべきものなのである。」（濱田　昭和58：119）。

1. 「例,Yarixita de cubiuo toruua tegaradea原注1）.（槍下で首を取るは手柄であ)（略）」（土井・森田・長南編訳　1980：812）。「「奥州の嗣信ぢゃ…は忠信ぢゃは弁慶ぢゃはなどといふ者共」（天草版平家、四）などのように並列にも使われ、また、時に「伯父ぢゃ人」「母ぢゃ人」など、連体形にも使われた。」（土井・森田　昭和50：124）。
2. 「日本語の発音には、Cɑsɑ,Cesɑr,Cɑso,summɑを例とするラテン語、ポルトガル語とちがい、軟らかいSa,So,Su〔のS〕がなく、あるのはÇɑpɑto,Cɑçɑr,Moçɑ,Almoço,Doçurɑにみえる古いポルトガル語や古いカステリャ語のようなÇɑ, Ço,Çu〔のÇ〕だけであって、いわば二つの文字〔〕である。したがってこれらは、これまた二つの文字〔〕から成るZa,Zo,Zuに変わる。例、Çɑnzan（散々）,Çamazama（様々）など。しかしあまり意識的に発音し、そのため度がすぎて逆にÇのになってもならない（略）」（ロドリゲス　1993：70）。

＊上の文中にみえる最初と二番目の「」：「二つの文字〔音〕―[ts]のこと。ポルトガル語、スペイン語にはかつて[ts]の音があった。」「これまた二つの文字〔音〕―[dz]のこと。」（同書：270,270）。

1. 「（上略）朝鮮における實際の音韻状態としては、舌頭音と舌上音とは、諺文製定時代以來かつて區別されたことが無く、「遅」ti（筆者注：ḍɪi）が「知」chi（筆者注： ṭɪe）と同音になつた時代に、「地」ti（筆者注：dii）も亦「知」と同音となつたものではなからうか。」（有坂　昭和32：319）。

そこで唐音「」（tsɿ）の母音は中舌的な聞こえ（ɿ）をもっていたためにṭu（ṭ：/ʈ/）の聞こえに近似であったとみてみます。そして中期朝鮮語はṭuの音を正確にあらわす（ハングル）をもたなかった考えれば、ṭuの音を두（tu）で表記したとみることができるでしょう。そうであればṭuの聞こえに近似であった「」（tsɿ）と두（tu）を同じとみることに問題はないでしょう。次注。

1. 亀井氏は雀の鳴き声シウシウのシの頭子音について、「サ行の単位は音声として、その頭子音にいまだ破裂の要素をまったくはうしなってしまわず、（下略）」（亀井　昭和59：459；下線は筆者補）とみられました。そこでワルの発音が存在したシウシウ/チウチウの時代までシ（チ）の頭子音は破擦音tʃ（照母三等）ではなく、ある種の破裂音Tであったとみれば、次のような変化を考えることができるでしょう。

上　　　代　　　 室町中期　　　　　江戸初期　　 江戸後期　　 現在

A.（tʃ=ɪ・i→）tʃ-i・u→tʃ-i・u----------→tʃ-i・u----→tʃiu--→tʃuu→tʃuɴ

古代　 　　　古事記　唐音/伊路波 　日葡辞書/捷解新語　 重刊改修捷解新語

チイ　　　　 ス　　 　シウ　　　　　　　　チウ　　 チユ（→チュウ/チュン）

（「」） 　 「須」　「」/두（tu） 　　Tçu/주（cu） 　즈（cɨ）

B. T1（ṭ）-----T1（ṭ）→T2（ȶ）-----------→T3（c）-----→tʃ---------→tʃ

そり舌音　　そり舌音　歯茎硬口蓋破裂音　　硬口蓋破裂音　破擦音

このように「」の変化を考えると伊路波・捷解新語・重刊改修捷解新語のハングル表記をうまく説明できるでしょう。  
＊「」（ṭɪe：tʃ=ɪ・e）→チイ（tʃ=ɪ・i）とみてあります。

1. 亀井氏は「甲乙二類の混同の一歩手前の時期における乙類の「イ」は、単純な中舌母音[ï]ではなかったらうか。間接に、かかる事実の存在を暗示するものは、現代の諸方言である。すなはち、東北方言においては、イ列音に対して、ひろく[ï]があらはれ、同様の現象は、また山陰の雲伯方言においても、顕著である。（略）」（亀井　昭和59：138）と述べられています。

そこでï（「」の母音は乙類）→ɿ（「」の現在の母音）の変化を考えれば、古事記の「阿遅志貴高日子根神」から日本書紀の「阿旎素企多伽避顧禰」への表記の変更（シ・スの相通）を考えることができるでしょう。次注。

1. 「思ふに、古代支那語では、同じα型韻（筆者注：3・4等複韻（藤堂　1980：213－4））の中でも、牙音喉音三等の拗音的要素は、その四等の拗音的要素に比べると、口蓋性がいくらか弱かつたのではなからうか。恐らく、四等の拗音的要素i（筆者注：iで代用）に對して、三等の拗音的要素は寧ろï（筆者注：ïで代用）に近い音ではなかつたらうか。もつとも、これは牙音喉音の場合についての話である。（略）」（有坂　昭和32：330-1）。
2. 「（1）1等韻（および今日仮4等韻と名付ける韻）は「古本韻」であって，上古以来のおもかげをよく保存している。2等韻や3・4等拗音は「今變韻」で，よほど変形したものである。」（藤堂　1980：343）。

＊「止は中古音tʃɪei（筆者注：正歯音3等）（→tʃɪ）であって，漢音ではもちろんシと読む。けれども日本古代の特殊かな使いではこれをトに当て，片かなのトという字も，この止の省略体である。三国時代＊tiəi→ 唐代tʃɪeiと変化したもので，上古漢語の声母が＊tであったことがこれによっても証明される。」（同書：70）。

＊「戦」（照母線韻3等去声tʃɪɛn）：「＊tian→tʃɪɛn」。「展」（知母獮韻3等上声ṭɪɛn）：「＊tɪan→ ṭɪɛn」（藤堂　昭和42：71,73）。

1. 『広韻』の各巻首の韻目表の韻目の後に細字で書かれている「仙同用」（下注）とは「先韻（筆者注：原著では冬韻）の字は，実際に詩を作るときには，仙韻（筆者注：原著では鐘韻）の字と相互に押韻して差支えない,という意味である。これに対し，その韻の内部でしか押韻を許されない場合は，韻目（筆者注：肴第五など）の下に「独用」とあり、（略）」（平山　昭和42：117）。

＊下注：「廣韻下平聲巻第二（改行）蘇前先第一仙同用（仙第二・蕭第三・宵第四は略）胡茅肴第五獨用（以下、略）」（陳彭年等　中華民国80：131）

「＜同用＞の由来は，『切韻』の韻の分け方があまり精密で却って不便であったため，唐のはじめ許敬宗らが協議して融通をつけたものであるという。」（平山　昭和42：117）。

「陸法言の≪切韻序≫のうちに，すでに六朝の方言でも，「先」韻（仮4等）と「仙」韻（3 4等複韻）とを混同するものがあると言っており，唐代には‘同用例’と言って，「先：仙」，「齊：祭」，「添：鹽」…などの韻の通用が公認されたほどであるから，それらの区別は極めて早く消滅したものにちがいない。諸方言や借音を調べてみても，その対立の記憶が見当たらないのは，けだし当然であろう。」（藤堂　1980:233）。

1. 『慧琳音義』（787～807年撰述）などには次のような韻母の合流がみられます。

「1）1等重韻の合流。（略・改行）2）2等重韻の合流。（略・改行）3）直音4等韻の拗音化。（略）例えば先韻en＞仙韻iɛn（山摂）。したがって唇・牙喉音声母の下では重紐A類に合流した。（改行）4）C類韻母のB類韻母への合流。（略）元韻ɪʌn＞仙韻ɪɛn（山摂）。（略・改行）5)止摂諸韻の合流。（略）」（平山　昭和42：159）。

1. 「17世紀の《西儒耳目資》《五方元音》では，/kj- khj- hj-/と/cj- chj- sj-/（筆者注：有気音はhで代用）を区別しているが，18世紀の《團音正考》（圓音正考とも。満洲旗人・烏札拉文通の著）には，両者の混同を示す記述がみえる。革命前，京劇を演じる人は，その世界の伝統として，「江」tɕi-（筆者注：見母江韻2等平声kɔŋ；引用本文のⅡ）と「將」tsi-（筆者注：精母陽韻4等平声tsiaŋ；引用本文のⅢ），「香」ɕi-と「相」si-を区別するよう弟子に教えたもので，それを‘尖團の區別’と呼んでいた。劇団という特殊なグループの中に，清朝初期の状況が保存されていたのである。」（藤堂　1980：400）。
2. 菊田氏の表記と漢語拼音方案との違い。

「（略）方案のzi,ci,siのi[ɿ▼]とji,qi,xiのi[i▼]が本来別種のものであるのに，いずれもiで表記し，その違いを声母によって識別するようになっている点とも関連している。すなわち， [tzɿ▼, tshɿ▼, sɿ▼]を,音韻論では/zɨ・, cɨ・, sɨ・/，方案ではzi,ci,siとし， [ȶʑi▼, ȶɕi▼, ɕi▼]を,音韻論では/ziɨ・, ciɨ・, siɨ・/，方案ではji,qi,xiとするのである。（略）」（菊田　昭和42：177－8）。　＊有気音はhで代用。

1. 上（注92）の引用文のなかで、舌端音（ここではts）と舌面音（ここではtʃ）は音韻的に/zɨ/と/ziɨ/、また音声的にtzɿとȶʑi（一般表記ではtsとtʃ）とみられています。そこで注92の引用本文の「やや奥寄りの前舌面で調音されるようになった」という記述をɿ→iの変化と考えなおせば、Tα→Tï→Tɿ→Ti→tʃの変化にあらわれる最後のTi→tʃの変化が藤堂氏のⅢの変化（Tï→Ti→tʃ（tʃi：尖音）であると説明できるでしょう。ただしこのように北京方言の口蓋化（藤堂氏の[tsi-]→[tɕi-]の変化）をうまく説明できるとしても、ɿ→iの変化はありえないと考えられます。そうであればTα→Tï→Tɿ→Ti→tʃの変化も架空のものといわざるをえず、α→ï→ɿ→iの変化をうまく説明できるアイディアが必要となるでしょう。

また第16節で紹介した「tがi介母の後續によって「變る」とすれば、それはtiへであって、それ以外のものへではない。」（尾崎　昭和55：64）という、尾崎氏の強い非難にたいしては、TαのTに後続しているα（中舌的な聞こえをもつ音）によってそり舌音化（Tα→Tï）を、またTɿ→Ti（Ti＝/c/：藤堂氏のtsi）と変化したTiに後続しているiによって口蓋化（tʃ：[tɕ]）したと説明できるでしょう。

1. 重紐A・B類の音韻論的解釈について：

「主母音における比較的狭い母音（A類）と比較的広い母音（B類）の差とする説，拗介音における口蓋性の強（A類）・弱（B類）の差とする説，声母における口蓋化の有（A類）・無（B類），あるいは唇音化の有（B類）・無（A類）とする説があり、これらの中二つを兼ねるような考え方もある。（略）」（平山　昭和42：150）。

1. A.「（上略）普通、中古漢語形tś,tśh（筆者注：有気音はhで代用）,dź,ś,ź，のような口蓋音（前舌面音）の系列を、考えている。主としてそれは、後漢から唐中葉に原注（3）いたる前期漢譯佛典における音譯漢字が、梵語口蓋音系列音（筆者注：ca（च）系列）をあらわす用途に充當すべきものとして、韻圖のこの位置（筆者注：照母/審母などの（細）正歯音3等）に相當するものを用いているという、音韻史上の事實を踏まえた認識による、と思われる。（略）」（尾崎　昭和55：82）。

B.「後期漢譯佛典、すなわち不空以後の譯音字が、梵語口蓋音シリーズを頭子音とする音節の對字としてそれまでの正齒音字を捨て、むしろ精淸從等いわゆる齒頭音系列の文字を取ろうとするのは、（以下、略）」（同書：94）。

＊不空（705-774年）前後の『慧苑音義』（720年頃成る：『日本書記』と同時期）では審二（ṣ/ś）・審三（ś）（「沙/奢」：麻韻2等ṣă/麻韻3等ʃɪă）に、また『慧琳音義』（作成開始784年）では「審母（舌面三等：ś），山母（疏母舌尖二等：ṣ）」（水谷1994：156,457）にあてていますが、尾崎氏の小論のなかで記述されている「むしろ精淸從等…」の語例はみられません。『大唐西域記』（646年）には梵音śの対音字として、「反切上字の面からは「摩擦齒音字の**霫**を標し、破擦齒音を表わす反切上字（筆者下注：「咠」）を附している」と言い得るのみで、精母か淸母かの「氣音の有無」については、漢字の面からは決定し難い。」（水谷1994：235）とあります。

＊**霫**の反切は「咠立反」。「咠」は「緝」（清母緝韻4等入声tshiěp）に同じ（庄司編　昭和37：161）。

1. 音韻変化にたいして懐疑的であった尾崎氏は音韻変化といえるものは新世代による旧世代の「聞こえ」の模倣であるとみられました（尾崎　昭和：87）。そして漢訳仏典の音訳字（ここでは正歯音系列字）は「口蓋音、前舌面調音のシリーズであったが、それらの音が音色としてもつべきものは、いわば「軟い」「濕った」Mouillé音色であって、舌尖調音的音聲のもつ硬い音色とは別種のものである。（略）」（同書：87）として、正歯音3等（tʃ）がただちに「硬い」聞こえ（Dur音色）をもつそり舌音へ変化（tʃ→tʂ）することはありえないとみられました。
2. 「中古の音系としては，舌頭音：舌上音：正歯音の三者の間に,‘補い合う分布’が存在する（正歯音は4等と解釈）。

|  |  |  |
| --- | --- | --- |
|  | 〈直音韻〉 | 〈拗音韻〉 |
|  | 1等　 2等　 仮4等 | 3等　 4等 |
| 舌頭 | 〇　　×　　〇 | ×　　× |
| 舌上 | ×　　〇　　× | 〇　　× |
| 正歯 | ×　　×　　× | ×　　〇 |

舌頭音を/t/型，舌上音を/,/型,また正歯音を//型とする私の‘第二次的解釈’は，このような補い合う分布が存在する場合，すべてを/t/類のallophoneと解釈する可能性があるという判断に基づいたものである。」（藤堂　1980：331）。

そこで舌頭音・舌上音・正歯音（//：[ȶ]：同書：339）すべての頭子音を/t/類とみる藤堂氏の上の考えはTα→Tï→Tɿ→Ti→tʃにあらわれる頭子音Tα/Tï/Tɿ/Tiをすべて破裂音Tとみる筆者の考えに通じるものがあるでしょう。注100。

＊正歯音3等字（支韻）の第一次的解釈は「// 〈中古〉（切韻）→// 〈中世〉（韻鏡）→//〈近代〉」（同書：227）。

1. 尾崎氏は「（一）前舌面調音に重ねて兩唇の突き出しProtrusionを伴うこと原注（5）、あるいは（二）前舌面調音というとき、その調音そのものが舌のかなり**强**い上口蓋への押しつけを以て行われるていること原注（6）、（以下略）」（尾崎　昭和55：88）が正歯音3等（筆者のTɿ）の「中舌の硬い聞こえ」と近似した音色を生みだすとみられました。そしてそれらの調音が山東安丘方音などにみられると述べられています。
2. 支韻3・4等の重紐（B・A類）は上代特殊仮名遣いのイ乙とイ甲（藤堂　1980：163）の違いに反映しているとみれば、Tα→Tï→Tɿ→Ti→tʃの変化を考えることで、イ乙（ï）がɿへ変化し（イ乙が消失し）、その後i甲へ合流したこと（ï→ɿ→i）をうまく説明できるでしょう。
3. 「小さな/r/の発生は，上古の声母系統が中古の声母系統に移る転機となったものだと考えられる。六朝前期までの声母体系では，「照」組はなお//型の完全な舌面音であったと思う（音声的には[ȶ]：波線は筆者）。ところが六朝時代に，従来の/j/を/rj/のように発音する有力な方言が現れ，その方言ではまた「照」組をも/trj/のように発音したにちがいない。

　この方言は隋唐の読書音の主流となったもので，やがて/trj/は音声的には[tʃ]となり，唐末の韻図では破裂音ではなしに破擦音とみなされるようになり，舌音4等の欄ではなしに歯音3等の欄に記入されることとなったのである。「照」組が//（六朝初）→//（六朝末）→//（唐末）のように違った姿をとるに至った原因は，舌面音における‘小さなr’（下線は筆者）の発生によると言ってよいと思う。」（藤堂1980：339-340）。

ところで照母3等の変化は「中古[tɕ]―近代[tʃ/tʂ]―現代[tʂ]」（佐藤　2002：35）とみられていますが、「しかし章組（筆者注：照母）3等韻音節のなかには、『中原音韻』においてすでに[i]韻母ないし[i]介音をもたないものがあり、そのような音節では[tʃ]組でなく[tʂ]組声母が発音されていたと考えられる。」（同上）との考えがあります。そこで上のi介音をもたないものという記述をまだi介音になりきっていないものと考えなおし、それをi介音の先祖ɿとみれば、ɿ（佐藤氏のtʂ）→i（佐藤氏のtʃ）の変化を考えることができるでしょう。

そこで照母（正歯音）3等の変化にたいする筆者と藤堂氏との考えを次のように比較してみます。

注85のB：T1（t）→T2（ṭ：/ʈ/）----→T3（ȶ）-→T4（c）------→tʃ

注85のC：Tα----→Tï（そり舌音化）→Tɿ--┬------------------→Tɿ（そり舌音）

└--→Ti------------→tʃ（口蓋化音）

藤堂A：------------------------→（切韻）→（韻鏡）--→（そり舌音）

藤堂B：--------→（[ȶ]）→------------→（ts？）--→tʃ（尖音）

上古　　 六朝初　　 六朝末　　　　　唐末　　　　　　近代

＊tʃ：藤堂氏のtɕ。 [ȶ]：上記引用文中の波線の「音声的には[ȶ]」。

＊藤堂Aは「第一次的解釈」（藤堂　1980：227）。藤堂Bは「第二次的解釈」（同書：339-340）。

＊尖音の変化（藤堂氏のts→tʃ）を説明するためには藤堂B ではをtsのようにみないといけないでしょう。しかしその（ts？）は（tʂ？：そり舌音）に由来し、そのがȶ（歯茎硬口蓋音）に由来するとみておられるので、ȶ→tʂ（？）→ts（？）→tʃのような先祖返りともみえる変化を想定しなければならないでしょう。これはありえない変化ではないでしょうか。

＊‘小さなr’（T0→Tïのそり舌音化）にたいしては水谷　昭和42：100-5。

【以前の考察】

各節・各注などに関係する、以前のHP は次の通り。過去のホームページのURLの初めの<http://ichhan.sakura.ne.jp/>は省略してあります。

第3・27節：上代特殊仮名遣いについての考え

A.「 7.三たびハ行頭子音の変化について（問題1）（paline/paline4.html）

B.「3.動詞活用の問題を未解決にした大野説」/「4.エ列甲乙類音はどんな音だったのか」（ともに「母音融合にたいする大野説を考える」（special/oono.html）のなかで）

第4～11節：

A．中期朝鮮語の終声（入声）について：

「第6節　終声字を考える」（korean/korean1hp.docx）

B．中国語と朝鮮漢字音の入声について：

「8.中古音と朝鮮漢字音の入声について考える」（korean/korean2hp.docx）

C．中国語の入声について：

「中古中国語の舌内入声を考える」（korean/korean3hp.docx）

第6節：倭人伝の表記について：

「1.日本書紀歌謡次清音字の問題」（kaline/kaline1.html）

第7・8・11節：中国語の方言分化と呉音・漢音の関係について：

「中国語はいつから方言に分かれたのか」（cht/oninronhp.docx）

第10節：

A.「第8節　各自並書とㅭ（rʔ）との関係を考える」（korean1hp.docx）

B.「『捷解新語』における初声を重ねる注音法」（kaline/kaline2.html）

C.「17.促音便ってなに？」（rendaku/rendaku11.html）

第12～14 節：母音の無声化について：

「4.母音の無声化」（rendaku/rendaku20.html）

第15 節：破擦音化について：

「7.タ行の破擦化について」（rendaku/rendaku3.html）

第16 節：舌尖母音・中舌母音について：

A.「6.中舌母音を考える」/「7.宮古方言の中舌母音を考える」（special/oono.html）

B.「5.口蓋化と摩擦噪音について」（kaline/kaline1.html）

第18節：「中古中国語の舌内入声を考える」（korean/korean3hp.docx）

第26節：四ツ仮名について：

A.「9.四ツ仮名について」（rendaku/rendaku4.html）

B.「四つ仮名の混乱」（rendaku/rendaku21.html）

注2：日本語とハワイ語における英語からの借入語の関係について：

「17．促音便ってなに？」のなかの「母音添加」（rendaku/rendaku11.html#boin-tenka）

注8：古代助詞イ、またイ・シの相関について：

「F.日本語とオーストロネシア語族にみられるイ・シの相関について」（paline/paline12.html）

注28：「6.謡曲におけるツの発音について」（korean/korean3hp.docxの第6節）

注30：喉頭化（母）音について：

A.「9.ハ行転呼音になぜ喉頭化母音はあらわれたのか(問題2)」（paline/paline6.html）

B.「10.古代日本語のどんなところに喉頭化母音がみられたのか(問題2）」（paline/paline7.html）

C. 「29.サ行イ音便の問題」（rendaku/rendaku22.html）

D.「4.琉球方言にみられる無気喉頭化音について」（kaline/kaline2.html）

注29～31：声門閉鎖音と促音の関係について：

A.「(41) （声門閉鎖音）→Q（促音）の変化について(新しい考え　2011.12.5)」（paline/paline14.html#41）

B.「ʔ→Qの変化にたいする批判」（korean/korean2hp.docxの注10）

注32：中古舌内入声をtʔと考えるとしても、なお残る疑問について：

「中古中国語の舌内入声を考える」（korean/korean3hp.docx）の注23

注59：「はっきりした声立て」と「ゆるやかな声立て」について：

A.「8.中古音と朝鮮漢字音の入声について考える」（korean/korean2hp.docx）

B.「5.初声喉音字を考える」（korean/korean1hp.docx）

注62：「まる1する2」の「る1」の消失と喉頭化音の発生について：

「9.ハ行転呼音になぜ喉頭化母音はあらわれたのか(問題2）」（paline/paline6.html）

注66・70：サ行音の変化について：

A.「6.サ行の直音化について」/「8.ツァ行音について」（rendaku/rendaku3.html）

B.「10.すずめはスズと鳴いたか？」（rendaku/rendaku5.html）

C.「サ行イ音便の消長」（rendaku/rendaku11.html）

D.「29.サ行イ音便の問題」（rendaku/rendaku22.html）

E.「須須」と鳴いた雀はいま」（saline/saline1.html）のなかの「5．稲荷山鉄剣銘のサ音を考える」

F.「5.サ行音の問題を考える」（special/oono.html）

注78：「ウ（イ）音便と促音便・撥音便の交替」：

A.「17.促音便ってなに？（rendaku/rendaku11.html）

B.「18.特殊ウ音便と撥音便・促音便の交替はなぜ起こったのか」（rendaku/rendaku12.html）

C.「5.促音化現象について考える」（kaline/kaline2.html）

【引用書など】

＊中国・韓国の人名は日本語読み。

秋永一枝　1990(新装版) 　「発音の移り変り」『日本語講座(第６巻） 日本語の歴史』　阪倉篤義編　大修館書店

秋山正次　昭和58　「8　熊本県の方言」『講座方言学　9　―九州地方の方言―』　飯豊毅一・日野資純・佐藤亮一編　国書刊行会

岩生・佐久間　1965　『アビラ・ヒロン　日本王国記/ルイス・フロイス　日欧文化比較』（大航海時代叢書　Ⅺ）　アビラ・ヒロン/ルイス・フロイス著　佐久間正訳注・会田由訳・岩生成一注/岡田章雄訳・注　岩波書店  
有坂秀世　昭和30　『上代音韻攷』　三省堂

有坂秀世　昭和32　『国語音韻史の研究　増補新版』　三省堂出版

石原道博編訳　1985（新訂版）　『新訂　魏志倭人伝　他三篇』（中国正史日本伝 1）（岩波文庫）　岩波書店　＊『魏志倭人伝・後漢書倭伝・宋書倭国伝・隋書倭国伝』

伊波普猷　1974　『伊波普猷全集　第四巻』　平凡社

今石元久・三輪譲二　平成元年　「母音の音響的特徴―方言による差異―」『講座日本語と日本語教育　第2巻　日本語の音声・音韻（上）』　杉藤美代子編　明治書院

岩淵悦太郎　昭和52　『国語史論集』　筑摩書房

幸雄　昭57　「解題」『宮良當壯全集　9』　第一書房

幸雄　平成4.12　「IPAによる母音の表記に関連して（上村幸雄）　ワ ー クショップ　新しいIPAによる日本語表記について」『音声学会報』（201号）　日本音声学会

幸雄　1997　「琉球列島の言語　0）総説」『言語学大辞典セレクション　日本列島の言語』　亀井孝・河野六郎・千野栄一編著　三省堂

江口泰生　平成3年　「母音の無声化と清濁」『鹿児島大学教育学部研究紀要』（人文・社会科学編：第43巻９

王力　1985　『漢語語音史』　中国社会科学出版社

大島正二　1998（増訂版）　『中国言語学史　増訂版』　汲古書院

鴨東蔌父　昭和54　『仮名文字使蜆縮凉鼓集（駒沢大学国語研究資料　第１）』　大友信一・木村晟編輯　汲古書院　＊原本（1695年自序・刊）の写真複製。

大友信一・木村晟編　昭和43　『日本館譯語　本文と索引』　洛文社

奥村三雄　昭和47　「第二章　古代の音韻」『講座国語史　第2巻　音韻史・文字史』　中田祝夫編　大修館書店

奥村三雄　1977　「6　音韻の変遷（2）」『岩波講座　日本語　5　音韻』　橋本萬太郎ほか著　岩波書店

小倉進平　昭和16.8（28巻3号）　「「朝鮮館譯語」語釋」（上）」　東洋學報　東洋協會學術調査部

小倉進平　昭和16.12（28巻4号）　「「朝鮮館譯語」語釋」（下）」　東洋學報　東洋協會學術調査部

小倉進平　昭和50　『小倉進平博士著作集（三）』　京都大學文學部國語學國文學研究室編　京都大學國文學会　＊國語及朝鮮語發音概説　南部朝鮮の方言他（太學社影印本：ソウル）  
尾崎雄二郎　昭和55　『中國語音韻史の研究』（東洋學叢書）　創文社

夏樹　昭和54　『邪馬台国の言語』　學生社

　昭和50　「第三部　各地の方言　八　九州の方言」『方言と標準語――日本語方言学概説』　大石初太郎・幸雄編　　筑摩書房

孝夫　2012　『ロシア語音声概説』　研究社

亀井孝　昭和59　『亀井孝論文集3　日本語のすがたとこころ（一）音韻』　吉川弘文館

亀井孝　昭和61　『亀井孝論文集5　言語文化くさぐさ』　吉川弘文館

かりまたしげひさ　昭和61.3　「宮古方言の「中舌母音」をめぐって」（『沖縄文化』（66号：22巻2号）　沖縄文化協会

川上蓁　　昭和52　『日本語音声概説』　桜楓社

漢陽大學校附設國學研究院（發行）　1974　『雞林遺事』　大提閣（翻刻發行）　＊『雞林類事』の翻刻

菊田正信　昭和42　「Ⅱ　音韻論　4　現代語の音韻」『中国文化叢書 １ 言語』　牛島徳次・香坂順一・藤堂明保編　大修館書店

木田章義　平成8.12　「〔書評〕　山口佳紀著　『古事記の表記と訓読』」　『国語学』（187号）　国語学会　武蔵野書院

木部暢子　2011　「第Ⅱ部　独自性と現状　第8章　鹿児島方言―南端の難解な方言」『日本の危機言語－言語・方言の多様性と独自性』　惠編　北海道大学出版会

木村晟編　1995　「『日本一鑑』「寄語」開題」『古辞書研究資料叢刊』（第13巻）　大空社　＊日本一鑑[寄語]の典拠資料（鄭舜功著）/方言類釈[倭語彙]

姜信沆　1993　『ハングルの成立と歴史　訓民正音はどう創られたか』　梅田博之（日本語版協力）　大修館書店

京大國語國文研編　昭和33　『倭語類解　本文、國語・漢字索引』　京都大學文學部國語學國文學研究室編　京都大學國文學會

京大国語国文研編　昭和36　『全　浙兵制考日本風土記　本文、解題、國語・漢字索引』　侯継高撰　京都大学文学部国語学国文学研究室編　京都大学国文学会

京大國語國文研編　昭和40.7　『弘治五年朝 鮮 板伊路波　本文・釋文・解題』　京都大學文學部國語學國文學研究室編　京都大學國文學會『倭語類解』

京大國語國文研編　昭和40.9　『日本寄語の研究』　京都大學文學部國語學國文學研究室編　京都大學國文學會

京大國語國文研編　昭和47　『三本對照　捷解新語　本文篇』　京都大學文學部國語學國文學研究室編　京都大學國文學會

京大國語國文研編　昭和48　『三本對照　捷解新語　釋文・索引・解題篇』　京都大學文學部國語學國文學研究室編　京都大學國文學會

金東昭　2003　『韓国語変遷史』　栗田英二訳　明石書店

窪薗晴夫　1999　『日本語の音声』（現代言語学入門　2）　岩波書店　昭和46

倉野憲司校注　1963　『古事記』（岩波文庫）　岩波書店

クルチウス　昭和46　『クルチウス　日本語文典例証』　三澤光博訳　明治書院　＊『Proeve Eener Japansche Spraakkunst』（J.H.Donker Curtius著。J.J.HOFFMANNが改訂増補したもの。1857刊）の訳書  
建國大學校出版部発行　1973　『東國正韻　全』　＊建國大學校圖書館所蔵（全六巻影印本）

ケンペル　1977　『江戸参府旅行日記』（東洋文庫303）　Koempfer著　斎藤信訳　平凡社　＊通称『日本誌』の訳

香坂順一　昭和42　「Ⅲ　文法論　6　近世・近代漢語の語法と語彙」『中国文化叢書 １ 言語』　牛島徳次・香坂順一・藤堂明保編　大修館書店

国際音声学会編　2003　『国際音声記号ガイドブックー国際音声学会案内』　竹林滋・神山孝夫訳　大修館書店

国立国語研究所編　昭和51　『沖繩語辞典』（国立国語研究所資料集5）　大蔵省印刷局

古瀬順一　昭和58　「7　五島の方言」『講座方言学　9　―九州地方の方言―』　飯豊毅一・日野資純・佐藤亮一編　国書刊行会

小松英雄　昭和56　『日本語の世界　7　日本語の音韻』　中央公論社

コリャード　昭和9　『コイヤード　日本語文典』　大塚高信訳　坂口書店　＊『Ars Grammaticae Iaponicae Lingvae』（Didaco Collado,1632年ローマ刊）

斎藤義七郎　昭和57　「10　山形県の方言」『講座方言学　4　―北海道・東北地方の方言―』　飯豊毅一・日野資純・佐藤亮一編　国書刊行会

阪倉篤義　昭和41　『語構成の研究』　角川書店

阪倉篤義編　1976　『国語学概説』　有精堂出版

崎山理　昭和38　「琉球・宮古島方言比較音韻論」　『國語學』（第54輯）　武蔵野書院

崎山理　平成2　「Ⅱ報告　古代日本語におけるオーストロネシア語族の要素」『日本語の形成』　崎山理編　三省堂

佐久間鼎　昭和4（訂正3版）　『日本音聲學』　京文社

迫野虔文　1991　「『新スラブ・日本語辞典』の「オ」の表記」『辞書・外国資料による日本語研究』　大友信一博士還暦記念論文集刊行会編　和泉書院　＊この論稿は『文献方言史研究』（清文堂出版　1998）に改稿されています。

佐藤昭　2002　『中国語語音史―中古音から現代音まで』　白帝社

柴田武　1988　『方言論』　平凡社

謝銘仁　1983　『邪馬台国中国人はこう読む』　立風書房

シュービゲル　1982（新版）　『新版音声学入門』　小泉保訳　大修館

佰太郎　1992（新装増訂3版）　『音声学』　アポロン

庄司孝彦編　昭和37　『中古字音索音手冊』　日本大学文理学部中国文学研究室　監修：酒井健一　学術出版教育図書発行

上代語辞典編修委員会編　1967　『時代別国語大辞典　上代編』　三省堂

鈴木朗　昭和54　『　雅語音聲考・希雅』（勉誠社文庫68）　小島俊夫・坪井美樹解説　勉誠社　＊鈴木朖（1824・1816年刊）の複製本。

鈴木一彦　1990(新装版) 　「文法の移り変り」『日本語講座(第６巻） 日本語の歴史』　阪倉篤義編　大修館書店

伯慧　昭58　『現代漢語方言』　樋口靖訳　光生館

高田時雄　昭和63　『敦煌資料による中國語史の研究』（東洋學叢書）　創文社

高山知明　2009.3　「タ行ダ行破擦音化の音韻論的特質」『金沢大学国語国文』（34号）　金沢大学国語国文室

高山倫明　2012　『日本語音韻史の研究』（ひつじ研究叢書〈言語編〉第97巻）　ひつじ書房

中国語学研究会編　昭和45（再版訂正）　『中国語学新辞典』　光生館

趙義成訳注　2010　『訓民正音』（東洋文庫800）　平凡社

趙元任ほか合譯　1995（縮印1版北京1次）　『中國音韵學研究』　カールグレン（高本漢）著　趙元任・羅常培・李方桂合訳　商務印書館（北京）

陳彭年等　中華民国80　『校正宋本廣韻附索引』　陳彭年（重修者）　藝文印書館（校正者）　藝文印書館

土井忠生補注　1965　「アビラ・ヒロンとフロイスの日本語」『アビラ・ヒロン　日本王国記/ルイス・フロイス　日欧文化比較』（大航海時代叢書　Ⅺ）　アビラ・ヒロン/ルイス・フロイス著　佐久間正訳注・会田由訳・岩生成一注/岡田章雄訳・注　岩波書店　＊補注：岩生成一・土井忠生  
土井忠生・森田武　昭和50（新訂版）　『新訂国語歴史要説』　修文館出版

土井忠生・森田武・実編訳　1980　『邦訳日葡辞書』　岩波書店

東条操編　昭和30（再版）　『日本方言学』　吉川弘文館　＊昭和28（初版）

藤堂明保　昭和42　「Ⅱ　音韻論　1　上古漢語の音韻」『中国文化叢書 １ 言語』　牛島徳次・香坂順一・藤堂明保編　大修館書店

藤堂明保・小林博　昭和46　『音注 韻鏡校本』　木耳社

藤堂明保編　昭和53　『学研　漢和大字典』　学習研究社

藤堂明保　1980　『中国語音韻論－その歴史的研究－』　光生館　＊江南書院　昭和32年の改版

藤堂明保　昭和62　「ki-とtsi-の混同は18世紀に始まる」『藤堂明保中国語学論集』　藤堂明保中国語学論集編集委員会編　汲古書院

外山映二　昭和47　「第三章　近代の音韻」『講座国語史　第2巻　音韻史・文字史』　中田祝夫編　大修館書店

中田祝夫　昭和47　「第一章　総説」『講座国語史　第2巻　音韻史・文字史』　中田祝夫編　大修館書店

中本正智　1976　『琉球方言音韻の研究』　法政大学出版局

日本音聲學會編　1976　『音聲學大辞典』　三修社　1976

日本大辞典刊行会編　昭和47/48/49/50/50/51　『日本国語大辞典』（第1・2・11・13・18・20巻）　小学館

ネフスキー　昭和2.9　「琉球の昔話『大鶉の話』の發音轉寫」『音聲の研究』（第1輯）　音聲學協會編　興文社発行　＊宮古伊良部島佐良濱村方言（N.NEVSKY筆記解説）

橋本進吉　1980　『古代国語の音韻に就いて　他二篇』（岩波文庫）　岩波書店

橋本萬太郎　1981　『現代博言学』　大修館書店

服部四郎　1951（旧版）　『音聲學』（岩波全書）　岩波書店　＊1984年（新版：録音カセットテープ附属：未見）。

服部四郎　昭和34　『日本語の系統』　岩波書店

濱田敦　昭和40.9　「日本寄語解読試案」『日本寄語の研究』　京都大學文學部國語學國文學研究室編　京都大學國文學會

濱田敦　昭和58　「第二編　二　語末の促音」『續朝鮮資料による日本語研究』　臨川書店

[平山久雄　昭和42　「Ⅱ　音韻論　3　中古漢語の音韻」　『中国文化叢書 １ 言語』　牛島徳次・香坂順一・藤堂明保編　大修館書店](javascript:open_window()

[福井玲　2013　『韓国語音韻史の探究』　三省堂](javascript:open_window()

福島邦道　昭和40.7　「附録解説　書史会要」『弘治五年朝鮮板伊路波　本文・釋文・解題』　京都大學文學部國語學國文學研究室編　京都大學國文學會

福島邦道　昭和40.9　「日本考略・日本図纂解題」『日本寄語の研究』　京都大學文學部國語學國文學研究室編　京都大學國文學會

北条忠雄　昭57　「5　東北方言の概説」『講座方言学　4　―北海道・東北地方の方言―』　飯豊毅一・日野資純・佐藤亮一編　国書刊行会

馬之濤　2015.12　「カールグレンのいう舌尖母音と日本語/u/の異音」『開篇』（34号）　『開篇』編集部編　好文出版

前田正人　昭和52　『濱田敦教授退官記念國語學論集』　京都大学文学部国語学国文学研究室編　中央図書出版社

馬淵和夫　昭和46　『国語音韻論』　笠間書院

三木幸信・福永静哉　昭和41　『国語学史』　風間書房

水谷眞成　昭和42　「Ⅱ　音韻論　2　上中古の間における音韻史上の諸問題」　『中国文化叢書 １ 言語』　牛島徳次・香坂順一・藤堂明保編　大修館書店

水谷眞成訳　1971　『大唐西域記』（中国古典文学大系　22巻）　平凡社

三根谷徹　1993　『中古漢語と越南漢字音』　汲古書院

宮島達夫　昭和36.6　「母音の無声化はいつからあったか」　『国語学』（第45輯）

宮良當壯　昭57　『宮良當壯全集　9』　　第一書房　＊琉球諸島言語の国語学的研究・琉球語と国語との比較研究―特に音韻に就いて―他  
村山七郎　昭和40　『漂流民の言語』　吉川弘文館

村山七郎　1988　『日本語の起源と語源』　三一書房

森博達　昭和57　「三世紀倭人語の音韻」『倭人伝を読む』（中公新書）　森浩一編　中央公論社

森田武　昭和48　「捷解新語解題　五、成立の時期」『三本對照　捷解新語　釋文・索引・解題篇』　京都大學文學部國語學國文學研究室編　京都大學國文學會

森田武　昭和51　『天草版平家物語難語句解の研究』　清文堂出版

森田武　1977　「7　音韻の変遷（3）」『岩波講座　日本語　5　音韻』　橋本萬太郎ほか著　岩波書店

安田章　昭和36　「日本風土記解題」『全　浙兵制考日本風土記　本文、解題、國語・漢字索引』　侯継高撰　京都大学文学部国語学国文学研究室編　京都大学国文学会

安田章　昭和48　「重刊改修捷解新語解題　六、音韻をめぐって」『三本對照　捷解新語　釋文・索引・解題篇』　京都大學文學部國語學國文學研究室編　京都大學國文學會

山口仲美　1989　『ちんちん千鳥のなく声は―日本人が聴いた鳥の声』　大修館書店

山田孝雄　昭和29　『平家物語の語法』（上・下）　寶文館

羅聖淑　2008（第2版初版）　『韓国語　発音と文法－第2版－』　白帝社

羅大経　1990　『鶴林玉露－《宋人小説》之九』　上海書店出版　＊人集　巻之四　「日本國僧」の項

李基文　1975　『韓国語の歴史』　藤本幸夫訳　村山七郎監修　大修館書店

ロドリゲス　昭和30　『日本大文典』　ジョアン・ロドリゲス著　土井忠生訳註　三省堂出版

ロドリゲス　1993　『ロドリゲス　日本語小文典(上)』 （岩波文庫）　 ジョアン・ロドリゲス著　池上岑夫訳　岩波書店

【中国語資料解説】

『魏志倭人伝』

西晋の陳寿（233－297年）著。『三国志』「魏書」第30巻烏丸鮮卑東夷伝倭人条の略称。

『経典釈文』

「陸徳明著（？～630）。30巻。陳・至徳元年（583）～陳の末年（589）の間に成る。（略）漢魏六朝間の古経典に対する訓詁や音義，字体や諸本の校勘をして，古経典の基準化をはかったものである。（略）」（中国語学研究会編　昭和45：232）。

『切韻』

「隋の仁寿元年（601年）に編定された韻書で、主編者は陸法言（法言は字で，名は詞または慈）（以下、共編者8名の名は略）」（藤堂　1980：96）。その後、「『切韻』193韻は，唐代に増補されて，『唐韻』という名で写本として流布し」（藤堂　昭和42：39）」、「増訂の最後のものとして、北宋の大中祥符元年（1008年），陳彭年らが勅命によって撰定した『大宋重修広韻』（略してふつう『広韻』という）が現われた。」（平山　昭和42：114）。

『広韻』

「『切韻』の最終的な増訂本である『大宋重修広韻』、通称『広韻（原注1）』五巻が勅定の韻書として編纂された。（略）『広韻』はまさに官韻書であった。（改行）大中祥符元年（一〇〇八）、勅命を奉じた陳彭年（九六一～一〇一七）、丘雍（邱雍とも、生没年不詳）等によって『広韻』が編まれた。（略）原本『切韻』の音韻体系を比較的忠実に保存しているので、『切韻』に代る書として広く研究・利用されている。」（大島　1998：201）。

『鷄林類事』

宋の孫穆著（1103-4年、3巻）。「この「方言」（筆者注：第3巻）には「天曰漢㮈」のように、漢字で当時の韓国語単語または語句三百五十余項が記録されているが、（略）」（李基文　1975：104）。『雞林類事』には『古今圖書集成』『順治板説郛』『民國板説郛』所載の3種があり、『雞林遺事』として翻刻（漢陽大學校附設國學研究院發行　1974）されています。

『韻鏡』

「南宋の張麟之の序文，1161年及び1203年を冠する。（略）これら韻図の少なくとも原図は，唐代中期まで遡るないかと思う（略）」（平山　昭和42：127,134）。

＊これら韻図：上の韻鏡と「鄭樵（1104-1162）の著書『通志』の「七音略」に収める「内外転図」」（同書同頁）。

『鶴林玉露』

羅大経による随筆（1248-1252年成）。日本僧安覺から聞いたとして、「…硯曰松蘇利必筆曰分直墨曰蘇彌頭曰加是羅手曰提眼曰媚口曰窟底耳曰弭弭…」（羅大経　1990：人集　巻之四　日本國僧）とみえます。

『中原音韻』

「元の泰定元年（一三二四）（原注1）、民間の戯曲の用韻法（曲韻）を示すべく、周徳清によって編まれた『中原音韻』二巻である。」（大島　1998：229）。

『洪武正韻』

「官定韻書の一つ。16巻。明の楽韶鳳らの撰。洪武8年（1375年）刊。（略）（筆者補：韻の）分裂併合のしかたはかなり《中原音韻》に似ているが，濁声母と入声の存在することは，この書の反切が《増修互註礼部韻略》の反切をそのままとり入れていること，および杭州や蘇州を中心とする江南共通語（呉語系）と関係があろう。」（中国語学研究会編　昭和45：211-2）。

『書史会要』

「元末明初の人陶宗儀の所撰。（略）巻八に外域の部あり、天竺、畏吾児、回回につづいて「日本国」の項を設け、その文字についてしるし、「いろは」に音訳を附して掲げているものである。」（福島　昭和40：四八）。1376年頃までに成る。

『日本寄語』（「日本考略の寄語略」（福島　昭和40.9：五九））

薛俊撰（1523年）。「その内容において、「日本考略」は明代における日本研究の先駆をなしたものであり、「日本図纂」は、同じ著者による「籌海図編」とともに明代における日本研究の頂点を示すものなのである。」（同書：二）。

『日本館訳語』

「「日本館訳語」は「華夷訳語」の一部（筆者補：そのなかの丙種本十三館訳語の一つ）である。」「静嘉堂文庫本等は、その体裁・内容等から推定して、本文は嘉靖二十五年（一五四六）までの成立と考えられ、（略）嘉靖十年から嘉靖二十五年までの間に編纂されたものと言っても正鵠を得ないわけでもないと思う。」「（提督）会同館という役所で通事達の養成のために作ったテクストであるから、（略）」（大友・木村編　昭和43：それぞれ解題37,50,50）

『日本一鑑』

「『日本一鑑』（嘉靖四三年・永禄七年一五六四以降）は、鄭舜功の編纂にかかる明代末期の本格的な日本研究書である（原注1）。」（木村編　1995：3）。日本一鑑窮河話海は「嘉靖三十五年頃我国に来朝した鄭舜功の著で、三部に分れるが、その中窮河話海巻之四に文字の項があり、「華文倭字」「倭字倭（音）」「倭字草書」「草書字末」の四種の「いろは」が掲げられている。（略）」（福島　昭和40.7：四九）。

『全　浙兵制考日本風土記』

1592年ごろ刊。「明人、侯継高（国）所撰の全浙兵制考の附録であるが、その巻之三に「字書」と題して、日本の「いろは」について述べ、それにつづけて掲げられたものが「伊路波四十八字様」であるが、（略）」（福島　昭和40.7：四九-五〇）。

『西儒耳目資』

『西儒耳目資』は仏人宣教師金尼閣 Nicolas Trigaultの著書。（略）明の天啓5年（1625）に山西絳県で同地の韓雲を助手にして本書を編し，翌1626年に西安に至り、陜西涇陽の王徴の校訂を経て，同年5月これを印刷した。

『語言自邇集』

「Francis Thomas Wade✝（1818～1895）著。イギリスの外交官・中国語学者。（略）1867年（慶応3年）《語言自邇集》を公刊。」（中国語学研究会編　昭和45：264）。威妥瑪（中国名）は「ウェード式ローマ字つづりを考案，広く英語諸国で用いられた。」（同書：162）。

【韓国語・朝鮮語資料解説】

『雞林類事』→中国語関係書

『朝鮮館訳語』

15世紀初頭。「いわゆる華夷訳語の中に入っている。（略）会同館で編纂された十三館訳語の一つである。」（李基文　1975：124-5）。

『訓民正音（解例本）』

1446年刊。「訓民正音のしくみを解説したもっとも重要な資料である。例義，解例，序の3つの部分から成り,（略）」（福井　2013：230）。鄭麟趾による序がある。

『東國正韻』

1448年刊。「世宗の命を受けて申叔舟らが編纂した韻書であり，訓民正音の創制とともに行われた漢字音の改新の結果をまとめたものである。」（福井　2013：232）。

『洪武正韻譯訓』

1455年刊。「世宗の命を受け申叔舟らが編纂した韻書。明の韻書『洪武正韻』（1375）をハングルによって注音したものである。」（福井　2013：233）。→中国語関係書『洪武正韻』

『弘治五年朝 鮮 板伊路波』

1492年刊。「司訳院の倭学で使われた日本語の教科書である。（略）巻末に「弘治五年秋八月 日」という刊記がある。」（福井　2013：243）。

『六祖法寶檀經諺解』

1496年刊。「唐の六祖大師慧能の説法をまとめたものを諺解したもの。仁粋大妃の命により学祖が翻訳したと考えられている。」（福井　2013：243）。

『四聲通攷』

「『洪武正韻譯訓』の索引のように編纂された『四声通攷』は，今は伝わらない。」（姜　1993：218）。

『四聲通解』

1517年刊。「崔世珍が編纂した韻書で，申叔舟の『四聲通攷』，『洪武正韻譯訓』を補うために編纂されたものである。巻頭に崔世珍の序（正徳12年），韻母と字母の図，凡例などがあり，巻末に「四聲通攷凡例」，「翻譯老乞大朴通事凡例」，「動静字音」がある。」（福井　2013：247）。

『捷解新語』

1676年刊。「司訳院において作られた日本語の教科書で，著者は1592年ごろ壬申倭乱（文禄の役）の際に晋州で11歳にして捕虜となって日本に連れてこられた康遇聖（1581～？）である。」（福井　2013：211-2）。

『重刊改修捷解新語』

1765-70年刊（安田　昭和48：283）。「倭学書としては『改修捷解新語』（一七四八）とその重刊本（一七八一）などがそれぞれ刊行された。（李基文　1975：215）。

『倭語類解』

18世紀初期成立か。洪舜明編とみられる漢字見出し語（朝鮮語音注）にたいする日本語対訳語彙集。